

NetBackup™ アップグレード ガイド

リリース 11.0

NetBackup™ アップグレードガイド

最終更新日: 2025-04-25

法的通知と登録商標

Copyright © 2025 Cohesity, Inc. All rights reserved.

Cohesity、Veritas、Cohesity ロゴ、Veritas ロゴ、Veritas Alta、Cohesity Alta、NetBackup は、Cohesity, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Cohesity 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア（「サードパーティ製プログラム」）が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このCohesity製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Cohesity, Inc. からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Cohesity, Inc. およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Cohesityがオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」、およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Cohesity, Inc.
2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サ

ポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

<https://www.veritas.com/support>

次の URL で Cohesity Account の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、Cohesity の Web サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の Cohesity コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

<http://www.veritas.com/community/>

Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Cohesity SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章

概要	8
『NetBackup 11.0 アップグレードガイド』について	8
利用可能な NetBackup アップグレード方式	9
NetBackup 11.0 の変更について	11
NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック	12
クライアントのプッシュステージング領域が入力されなくなった	12
NetBackup 10.5 での VRTSpddei.rpm の提供停止	12
プライマリサーバーとメディアサーバーにインストールされるバイナリについて	12
アップグレードに必要なライセンスファイル	13
インストールディレクトリに多数のファイルが存在する場合、Windows プライマリサーバーのアップグレード速度が低下する	13
NetBackup データベースの変更について	14
一部のコンピュータでは NetBackup 管理コンソールと JRE のインストールは省略可能	14
ログディレクトリの権限はロールバック時にリセットが必要	15
NetBackup 8.2 以降でサポートされる外部認証局の証明書	15
Cohesity Usage Insights について	16
Cohesity Usage Insights のベストプラクティス	16

第 2 章

アップグレード計画	18
一般的なアップグレードの計画について	18
NetBackup 11.0 のアップグレード計画について	18
NetBackup 11.0 へのアップグレードの計画方法	20
レガシーログディレクトリのセキュリティ更新	25
統合ログのセキュリティ更新	26
通知、メッセージ、耐性の構成情報がアップグレードされない	26
カタログバックアップの既知の制限事項	27
NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について	27
アップグレードによるファイルの自動変更について	28
アップグレード前のジョブデータベースのサイズの削減	29
SUSE Linux プライマリサーバーのアップグレードに関する既知の問題	30
パフォーマンスと調整に関する注意事項	30
アップグレードツールについて	30

Cohesity Services and Operations Readiness Toolsについて	31
SORT のアップグレードのための推奨手順	31
NetBackup プリインストールチェックターについて	36
NetBackup データベースアナライザツールについて	37
アップグレードに関する注意事項および制限事項	37
オペレーティングシステムの最小バージョン	37
NetBackup 11.0 以降のアップグレードに関する Windows コンパイラとセキュリティの要件	38
NetBackup Web サーバーをサポートするユーザー アカウントの作成	38
NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイバートランスポート	38
メディアサーバーのサポートについて	40
NetBackup 8.1 での MSDP の変更	40
NetApp クラスタに必要になる可能性のある変更	41
Bare Metal Restore 情報がエラー自動イメージプリケーションを使って複製されるときのエラー	41
バージョン 8.1 より前のクライアントと 8.1 以降のメディアサーバーでのアップグレードの問題	42
第 3 章 プライマリサーバーのアップグレード	43
プライマリサーバーのアップグレードについて	43
NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順	44
Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する	49
Windows システムでのサイレントアップグレードの実行	61
NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード	66
Linux での NetBackup プライマリサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード	74
NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順	80
NetBackup の起動と停止のスクリプトについて	84
アップグレード後のシステムの更新	85
第 4 章 メディアサーバーのアップグレード	88
メディアサーバーの NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順	88
NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード	90
Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード	93

第 5 章	NetBackup の MSDP のアップグレード	99
	NetBackup 8.1 での MSDP のアップグレードの考慮事項	99
	MSDP ローリングデータ変換について	100
	MSDP 指紋アルゴリズムの変更について	101
第 6 章	クライアントのアップグレード	102
	クライアントのアップグレードについて	102
	クライアントの NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順	103
	NetBackup アップグレードスクリプトによる UNIX および Linux クライアントのアップグレード	105
	ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード	107
第 7 章	VxUpdate を使用した NetBackup 配備の管理	120
	VxUpdate について	120
	VxUpdate で使用するコマンド	121
	リポジトリの管理	122
	配備ポリシーの管理	125
	VxUpdate を使用したプライマリサーバーからのアップグレードの手動による開始	131
	VxUpdate を使用したメディアサーバーまたはクライアントからのアップグレードの手動による開始	135
	配備ジョブの状態	137
	EEB 管理ビュー	139
付録 A	参照先	141
	NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成	142
	NetBackup データベースユーザー	144
	クラスタ化されたプライマリサーバーの非アクティブノードで証明書を生成する	146
	NetBackup Java Runtime Environment について	147
	アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除	149
	NetBackup Web ユーザーインターフェースについて	150
	NetBackup 応答ファイルについて	151
	プライマリサーバーからクライアントへのクライアントソフトウェアのプッシュインストールについて	178
	プライマリサーバーへのクライアント形式のソフトウェアのインストール	179
	NetBackup IT Analytics Data Collector について	180

NetBackup IT Analytics Data Collector バイナリの手動によるインストールまたはアンインストール	181
NetBackup IT Analytics Data Collector の手動構成	183
NetBackup IT Analytics Data Collector の手動でのアップグレード	186
維持される Java Virtual Machine のオプション	187
RBAC ブートストラップについて	187
NetBackup ソフトウェアの入手について	189
NetApp クラスタのためのアップグレード前の追加手順	189
Replication Director を使用した NetApp ディスクアレイの使用	192
NetBackup のバージョン間の互換性について	196
UNIX および Linux の場合のアップグレード要件	197
Windows および Windows クラスタのアップグレード要件	200
Windows クラスタのアップグレードの要件	205
新しいメディアサーバーに全データを移行してクラスタ化されたメディアサーバーを削除する	207
Amazon クラウドストレージサーバーのアップグレード後の手順	207
サーバーのアップグレード後のクライアントのアップグレード	208
アップグレードエラーのロールバック手順	213
NetBackup プライマリサーバーとドメインのサイズについてのガイダンス	213

概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [『NetBackup 11.0 アップグレードガイド』について](#)
- [利用可能な NetBackup アップグレード方式](#)
- [NetBackup 11.0 の変更について](#)
- [Cohesity Usage Insights について](#)
- [Cohesity Usage Insights のベストプラクティス](#)

『NetBackup 11.0 アップグレードガイド』について

『NetBackup 11.0 アップグレードガイド』は、NetBackup 11.0 へのアップグレードの計画と実行を支援するために提供されます。『NetBackup 11.0 アップグレードガイド』では、NetBackup バージョン 8.x 以降から NetBackup 11.0 へのアップグレードパスについて説明しています。このガイドの最新版は、[NetBackup アップグレードポータル](#)から入手できます。

NetBackup 環境では、異なるバージョンの NetBackup を混在させることができます。複数バージョンの NetBackup がサポートされるため、サーバーを一度に 1 台ずつアップグレードできます。このアップグレードプロセスでは、システム全体のパフォーマンスへの影響が最小限に抑えられます。バージョン混在のサポートに関する詳しい情報を参照できます。

11.0 リリースでの NetBackup の変更について詳しくは、[『NetBackup リリースノート』](#)を参照してください。

p.196 の[「NetBackup のバージョン間の互換性について」](#)を参照してください。

Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT) は、アップグレード準備に役立つリソースです。SORT に関する詳しい情報を参照できます。

p.31 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

NetBackup のサポート終了 (EOSL) バージョンから NetBackup 11.0 へのアップグレード

NetBackup 7.7.x 以前はサポート終了 (EOSL) になっています。NetBackup の EOSL バージョンの必要なアップグレード手順は、『[NetBackup 11.0 アップグレードガイド](#)』に記載されていません。NetBackup の EOSL バージョンから 11.0 に直接アップグレードするには、次のことが必要です。

- 『[NetBackup 8.0 リリースノート](#)』を参照して、NetBackup への変更点について理解します。
- 『[NetBackup 8.0 アップグレードガイド](#)』に一覧表示されているアップグレード手順を参照します。
- NetBackup 8.0 のアップグレード手順を、『[NetBackup 11.0 アップグレードガイド](#)』のアップグレード手順と組み合わせます。

ご使用の ESOL バージョンから NetBackup 11.0 までの各リリースの『[NetBackup リリースノート](#)』と『[NetBackup アップグレードガイド](#)』を参照してください。

これらのマニュアルでは、正常にアップグレードするために役立つアップグレード手順と必要条件に関して詳しく説明しています。

これらのマニュアルのコピーについては、[NetBackup マニュアルのランディングページ](#)を参照してください。

利用可能な NetBackup アップグレード方式

表 1-1 および 表 1-2 に、NetBackup のアップグレード方式の詳細を示します。使用環境に最適なアップグレード方式をよりよく理解するには、次の点を考慮してください。

- 対話形式: アップグレードプロセス中にユーザーが UI を介して入力する必要があります。
- サイレントまたはネイティブ: Windows コマンドファイルを使用するアップグレード、または UNIX および Linux のネイティブパッケージマネージャを直接呼び出すアップグレード。
- プッシュまたはリモート: VxUpdate、Chef、SCCM などのオプションが含まれます。さらに、Windows ではリモートアップグレードを実行でき、UNIX と Linux では ssh または sftp を使用できます。
- NetBackup では、アップグレードに特定の Ansible プレイブックの使用がサポートされます。詳細情報が利用可能です。[p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」](#)を参照してください。

表 1-1 UNIX と Linux のアップグレードおよび EEB

方式	プライマリ	メディア	クライアント
対話形式	p.66 の「NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード」を参照してください。	p.90 の「NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	可能。プライマリサーバーについての情報を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
サイレントまたはネイティブ	p.74 の「Linux での NetBackup プライマリサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード」を参照してください。	p.93 の「Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	p.107 の「ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
プッシュまたはリモート	アップグレード: 不可 EEB: EEB のプッシュアップグレードは、サードパーティの配備ツールを使用すれば可能な場合があります。	p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	p.208 の「サーバーのアップグレード後のクライアントのアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
Ansible プレイブック	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。

表 1-2 Windows のアップグレードおよび EEB

方式	プライマリ	メディア	クライアント
対話形式	p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」を参照してください。	p.90 の「NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	可能。プライマリサーバーについての情報を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。

方式	プライマリ	メディア	クライアント
サイレント	p.61 の「Windows システムでのサイレントアップグレードの実行」を参照してください。	p.61 の「Windows システムでのサイレントアップグレードの実行」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	可能。プライマリサーバーについての情報を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
プッシュまたはリモート	アップグレード: p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」を参照してください。 EEB: EEB のプッシュアップグレードは、サードパーティの配備ツールを使用すれば可能な場合があります。	p.90 の「NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード」を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	可能。プライマリサーバーについての情報を参照してください。 p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
Ansible プレイブック	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。	NetBackup のアップグレードに NetBackup Ansible プレイブックを使用できます。 p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。

VxUpdate について

VxUpdate は、メディアサーバーとクライアント向けのポリシーベースのオンデマンドアップグレードツールを提供します。ポリシー形式により、メディアサーバーおよびクライアントのアップグレード用のツールが簡略化されます。オンデマンド機能は、必要に応じた即时のアップグレードを可能にします。

VxUpdate は、バックアップアップポリシーに類似した、使い慣れたポリシーベース形式の構成になっています。配備ポリシーを使用して、NetBackup から提供される EEB (Emergency Engineering Binary) のインストールを自動化できます。配備ポリシーを使用すると、配備アクティビティをスケジュールに従って構成および実行したり、クライアントホストの所有者がオンデマンドでアップグレードを実行したりできます。可能な場合は、プッシュまたはリモートアップグレードに VxUpdate を使用することをお勧めします。

NetBackup 11.0 の変更について

NetBackup バージョン 11.0 の重要な変更をいくつか次に記述します。詳しくはバージョン 11.0 の NetBackup™ リリースノートを参照してください。

NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック

NetBackup のプロビジョニングと構成のために、特定の Ansible プレイブックの使用がサポートされます。NetBackup でサポートされているプレイブックは、GitHub の次の場所から入手できます。

<https://github.com/VeritasOS/netbackup-automation-platform/blob/main/README.md>

この場所で提供されているプレイブックは、現在 NetBackup がサポートしている唯一のプレイブックです。readme ファイルを参照して、個々のプレイブックがサポートする NetBackup のバージョンを確認してください。

クライアントのプッシュステージング領域が入力されなくなった

NetBackup 11.0 の時点では、NetBackup クライアントのプッシュインストールとアップグレードのステージング領域は、プライマリサーバーとメディアサーバーのインストールまたはアップグレード中に入力されなくなりました。表示されるプロセスに従って、プッシュインストールまたはアップグレード用のクライアントオペレーティングシステムを追加します。

p.179 の「プライマリサーバーへのクライアント形式のソフトウェアのインストール」を参照してください。

NetBackup 11.0 時点では、クライアントのファミリーではなく、1 つのクライアントを使用してクライアントのプッシュインストールとアップグレードを実行できます。たとえば、Linux-ppc64le SuSE クライアントを追加せずに Linux-ppc64le Red Hat クライアントを追加できます。

NetBackup 10.5 での VRTSpddei.rpm の提供停止

NetBackup 10.5 以降、VRTSpddei.rpm は NetBackup に含まれなくなりました。

VRTSpddei.rpm は、VMware イメージのインスタントアクセスとマルウェアスキャンを提供していました。

VMware イメージのインスタントアクセスまたはマルウェアスキャンを引き続き使用するには、libguestfs.rpm パッケージと python3-libguestfs.rpm パッケージを使用します。NetBackup アップグレードスクリプトは、これらの 2 つの新しい RPM が存在することを検出すると、自動的に vrtspddei を削除します。そうでない場合、アップグレードスクリプトは、新しい RPM をインストールして VRTSpddei を削除するための手動による手順があることをユーザーに通知します。

プライマリサーバーとメディアサーバーにインストールされるバイナリについて

NetBackup 10.3 以降、NetBackup はメディアサーバーにプライマリサーバーのバイナリを提供しなくなりました。この変更は、インストール済みの占有域を減らし、メディアサーバー上の潜在的に脆弱なコンポーネントの数を最小限に抑えるために行われました。ソ

ソフトウェアの総合的な性質を考えると、NetBackup ではインストール済みバイナリのリストを提供できません。NetBackup にはプライマリサーバーとメディアサーバーに利用可能な無数のインストールオプションがあり、そのすべてがインストールされるバイナリに影響します。

アップグレードに必要なライセンスファイル

NetBackup 10.3 以降、NetBackup ではライセンスキーの代わりにライセンスファイルが使用されます。プライマリサーバーのアップグレード処理の一環として、ライセンスファイルをダウンロードするか、一時的な本番用ライセンスを使用する必要があります。一時的な本番用ライセンスは、NetBackup に含まれているためダウンロードする必要はありません。

NetBackup 8.1.2 より前のバージョンからのアップグレードでは、VEMS (Cohesity Entitlement Management System) からダウンロードした本番用ライセンスか、評価用ライセンスのみがサポートされます。評価用ライセンスは、NetBackup に含まれているためダウンロードする必要はありません。8.1.2 より前のバージョンから NetBackup をアップグレードする場合は、一時的な本番用ライセンスを使用できません。

すべてのアップグレードに、VEMS からダウンロードした本番用ライセンスを使用してください。本番用ライセンスにアクセスできない場合は、ダウンロードされていない組み込みライセンスのいずれかを使用できます。使用するライセンスは、NetBackup のバージョンによって異なります。

評価用ライセンスは、NetBackup 8.1.2 より前の NetBackup バージョンからアップグレードする場合にのみ使用されます。評価用ライセンスは 60 日間有効です。アップグレードの直後に、評価用の残りの日数を示すアラートが Web UI に表示されます。

一時ライセンスは、NetBackup 8.1.2 以降から NetBackup 10.3 以降へのアップグレードで使用されます。一時ライセンスは 60 日間有効です。アップグレードの直後に、一時ライセンスの期限が切れるまでの残りの日数を示すアラートが Web UI に表示されます。

ライセンスファイルに関する詳細情報を参照できます。

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779

インストールディレクトリに多数のファイルが存在する場合、Windows プライマリサーバーのアップグレード速度が低下する

9.1 以降のリリースからアップグレードすると、NetBackup ファイルに対するフルコントロールが付与されている間に、NetBackup Windows プライマリサーバーのアップグレードがハングアップしているように見える場合があります。アップグレード中に、NetBackup ファイルに対して NetBackup サービスへのフルコントロールを付与していることを示すメッセージが表示されます。

アップグレードの一環として、nbfp.exe プロセスはインストールディレクトリの権限を更新します。インストールディレクトリに、ログおよびイメージデータベースのほかに多数のファ

イルが存在する場合、この処理に時間がかかることがあります。インストーラが nbfp.exe からの応答を待っている間、インストールを停止しないでください。

NetBackup のインストールディレクトリには、独自のファイルを作成しないことをお勧めします。インストールディレクトリに 300,000 を超えるファイルがある場合は、ベリタステクニカルサポートにアップグレードについてお問い合わせください。NetBackup インストールディレクトリのファイル数を判断するための詳細情報が利用可能です。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100060329

NetBackup データベースの変更について

NetBackup データベースは新しいデータベースソリューションに変換されます。データベース変換の一環として、NetBackup は、NetBackup データベース内のレコード数の特定と、更新に必要な時間の推定を試行します。アップグレードの推定所要時間が 2 時間を超える場合は、続行するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

NetBackup の内部テストで、サイズが約 55 GB で約 1 億個のレコードが含まれるデータベースにかかったおおよその時間は、オペレーティングシステムごとに次のとおりです。

- Linux の場合: 約 30 分。
- Windows の場合: ハードウェアによって 30 分から 2 時間。

ここに示す時間は、アップグレード自体ではなく、データベース変換のみに該当します。

アップグレード中は、変換に追加のディスク容量が必要です。この領域は、新しいデータベースを作成して移行するために必要です。NetBackup の内部テストでは、アップグレードで必要になるのは、現在の NetBackup データベースで変換にかかった領域の約 2 倍になると示されています。

NetBackup をアップグレードする前に、データベース事前チェックツールを実行して潜在的なデータの問題を特定します。事前チェックツールの使用方法については、https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100055151 を参照してください。アップグレード前に NetBackup データベースのデフラグを行い、全体的な変換エクスペリエンスを向上させます。データベースをデフラグするための[再編成 (Reorganize)]オプションについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

一部のコンピュータでは NetBackup 管理コンソールと JRE のインストールは省略可能

NetBackup 管理コンソールは、すべての NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントコンピュータで省略可能です。JRE パッケージは、NetBackup プライマリサーバーでは必須ですが、すべてのメディアサーバーとクライアントコンピュータでは省略可能です。

以前のリリースと同様に、JRE パッケージは必須であるため、NetBackup プライマリサーバーにデフォルトでインストールされます。NetBackup 管理コンソールと JRE は、Windows

クライアントのデフォルトインストールには含まれません。Windows クライアントでこの機能が必要な場合は、Java リモート管理コンソールをインストールしてください。

NetBackup のさまざまなインストール方法が用意されているため、ユーザーは NetBackup 管理コンソールをすべての NetBackup コンピュータにインストールするかどうかを選択できます。また、ユーザーは、JRE パッケージを NetBackup メディアサーバーおよびクライアントコンピュータにインストールするかどうかを選択できます。インストールまたはアップグレード後の NetBackup 管理コンソールや JRE のインストールについての詳しい情報も参照できます。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#) を参照してください。

ログディレクトリの権限はロールバック時にリセットが必要

NetBackup 8.3 Windows のアップグレードが失敗し、以前のバージョンにロールバックする必要がある場合は、mklogdir コマンドを使ってログフォルダの権限をリセットする必要があります。NetBackup 8.3 のアップグレードによって、ログフォルダの権限が変更されます。これらの権限は、NetBackup の以前のバージョンとは互換性がありません。

NetBackup をロールバックした後、mklogdir.bat -fixFolderPerm を実行して、ログフォルダの権限を 8.3 より前の権限に戻します。この要件は、Windows プラットフォームにのみ適用されます。mklogdir コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 8.2 以降でサポートされる外部認証局の証明書

NetBackup は NetBackup 8.2 で外部認証局証明書のサポートを導入しました。この変更により、ホストの検証とセキュリティのため、NetBackup 認証局の代替手段が提供されます。PEM、DER、P7B 形式の証明書をサポートしています。

NetBackup の外部 CA のサポートと CA が署名した証明書について詳しくは、『[NetBackup セキュリティ暗号化ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 8.2 の外部認証局の制限事項

- UNC パスまたはネットワークドライブの割り当てが含まれている外部認証局の仕様は、リモートインストール方式を使用する Windows ホストでは失敗します。リモートインストールを実行する Windows ホストでは、外部 CA 証明書仕様に UNC パスやネットワークドライブの割り当てを使用できません。リモートインストール方式には、VxUpdate とセットアップウィザードのプッシュインストールオプションが含まれます。UNC パスまたは割り当てられたネットワークドライブの使用を試みると、パスにアクセスできないため、事前チェックとインストール操作が失敗します。

Cohesity Usage Insights について

Cohesity Usage Insights は、NetBackup の配備の効率的な管理、傾向の認識、今後の計画の作成に役立ちます。正確なほぼリアルタイムのレポートで、バックアップされるデータの合計量を確認できます。Usage Insights は、ライセンス付与されている容量の制限を超過しそうになると警告します。Usage Insights には NetBackup 8.1.2 以降が必要です。

Usage Insights では次のものが提供されます。

- 保護対象テラバイトの正確でほぼリアルタイムのレポート。
- グラフィカルに表示される使用傾向。
- ライセンス済み容量の超過を事前に警告する使用状況の評価。
- 簡単な容量計画と予算策定。
- 適用の急増または潜在的なギャップの識別。

容量ライセンス (NDMP、限定版、完全、エンタープライズ、エンタープライズクラウド、データムーバーエディション) を使用しているお客様の場合、Usage Insights を使用することで、容量の使用状況を正確に測定できます。この測定により、保護対象の各作業負荷のストレージ使用状況を包括的に把握でき、効率的な容量計画が可能になります。さらに、Usage Insights は必要な遠隔測定データを自動的に提供するため、これらのお客様は遠隔測定データを手動でアップロードする必要がありません。

よく寄せられる質問について詳しくは、『Cohesity Usage Insights for NetBackup スタートガイド』を参照してください。

注意: Usage Insights は、Google Chrome および Mozilla Firefox と互換性があります。Microsoft Edge または Microsoft Internet Explorer では正しくレンダリングされない情報があるため、これらを使用することはお勧めしません。

p.16 の「[Cohesity Usage Insights のベストプラクティス](#)」を参照してください。

Cohesity Usage Insights について詳しくは、『[Cohesity Usage Insights for NetBackup スタートガイド](#)』を参照してください。

Cohesity Usage Insights のベストプラクティス

Usage Insights ツールの使用に特定のベストプラクティスをお勧めします。

- Usage Insights は、Google Chrome および Mozilla Firefox と互換性があります。Microsoft Edge または Microsoft Internet Explorer では正しくレンダリングされない情報があるため、これらを使用することはお勧めしません。
- 対象となるサイトで、安全な Web トライフィックを伝送できることを確認します。

Usage Insights では HTTPS を使用して関連情報を送信します。自動アップロード機能を活用するために、プライマリサーバーでアウトバウンド HTTPS トラフィックを許可する必要があります。手動アップロードには、アップロード場所からの HTTPS トラフィックが必要です。

アップグレード計画

この章では以下の項目について説明しています。

- 一般的なアップグレードの計画について
- パフォーマンスと調整に関する注意事項
- アップグレードツールについて
- アップグレードに関する注意事項および制限事項

一般的なアップグレードの計画について

アップグレードの計画について詳しくは、このセクションを確認してください。

NetBackup 11.0 のアップグレード計画について

現在インストールされているバージョンの NetBackup は、NetBackup 11.0 のアップグレード処理に影響します。

- NetBackup 10.3 より前のリリースから NetBackup 10.3 以降のリリースにアップグレードする場合は、Cohesity Entitlement Management ポータル (<https://support.veritas.com>) からライセンスファイルをダウンロードする必要があります。ライセンスはプライマリサーバーでのみ必要です。
- NetBackup 10.2 より前のすべてのバージョンでは、データベースの変換を計画する必要があります。
- MSDP を使う NetBackup 8.0 以前のすべてのバージョンは、MSDP ローリング変換を計画する必要があります。

表 2-1には、アップグレードに対して実行する必要があるタスクに関する追加情報があります。

表 2-1 インストールされているバージョンに基づいた必要なアップグレードタスク

アップグレードタスク	タスクを実行する必要があるバージョン
ライセンスファイルのダウンロード	NetBackup 10.3 より前のリリースから NetBackup 10.3 以降のリリースにアップグレードする場合は、Cohesity Entitlement Management ポータルからライセンスファイルをダウンロードする必要があります。ライセンスはプライマリサーバーでのみ必要です。詳しくは以下を参照してください。 https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779
データベース変換の事前チェック	NetBackup 10.2 より前のバージョンから NetBackup 10.2 以降へのすべてのアップグレードでは、データベース変換事前チェックユーティリティを実行する必要があります。NetBackup 10.2 より前のバージョンからのアップグレードの前にこのユーティリティを実行します。詳しくは、 https://www.veritas.com/support/en_US/article.100055151 を参照してください。
MSDP 変換	MSDP を使う NetBackup 8.0 以前のすべてのバージョンは、MSDP ローリング変換を実行する必要があります。 p.99 の「 NetBackup 8.1 での MSDP のアップグレードの考慮事項 」を参照してください。

アップグレードを始める前に、メディアキットまたは製品の電子的なイメージファイルに含まれている『NetBackup リリースノート』を確認してください。このマニュアルはアップグレードする前によく理解する必要がある、NetBackup 11.0 での重要な変更を記述したものです。

注意: NetBackup 11.0 への正常なアップグレードを確実にするために、次の SORT ページと NetBackup アップグレードポータルを参照してアップグレードの詳細のすべてを確認してください。

SORT ページ:

<https://sort.veritas.com/netbackup>

p.31 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

NetBackup アップグレードポータル:

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100032801

p.20 の「[NetBackup 11.0 へのアップグレードの計画方法](#)」を参照してください。

NetBackup 11.0 へのアップグレードの計画方法

NetBackup 11.0 へのアップグレードの準備段階で複数の要素を検討する必要があります。

データベースのユーザー、ポート、ディスク容量の要件

Linux 環境の場合、新しい NetBackup データベースの操作には root 以外のユーザーが必要です。root ユーザーが NetBackup デーモンを起動すると、root 以外のユーザーを求めるメッセージが表示されます。ユーザー名は次に示す基準を満たす必要があります。

- root アカウントは許可されません。
- sudo ユーティリティへのアクセス権を持つアカウントは許可されません。
- ユーザー名は 1 文字から 31 文字である必要があります。
- ユーザー名には英語の文字のみを含める必要があります。
- スケールアウトデータベースユーザーとして nbwebsvc ユーザーを使用しないでください。
- 詳しくは、次を参照してください。<https://www.veritas.com/docs/100053091>

root 以外のユーザーで NetBackup デーモンがすでに起動している場合は、この同じアカウントが NetBackup データベースの実行に使用されます。

新しいデータベースには、デフォルトでポート 13787 を使用する接続プールサービスがあります。このポートがデータベース操作に利用可能であることを、アップグレード前に確認します。有効なポート番号を指定しないと、ポートの問題が解決するまで NetBackup が使用できなくなります。

このポートが利用できない場合は、Linux アップグレード中に応答ファイルで値を変更できます。Linux の対話型アップグレードにはプロンプトが表示されません。Windows プライマリサーバーの場合、アップグレード中にカスタムインストールパスを選択するとポート値を変更できます。応答ファイルに関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

アップグレード中は、変換に追加のディスク容量が必要です。この容量は、新しい PostgreSQL データベースを作成し、一時的な .dat ファイルを格納するために必要です。NetBackup は、新しいデータベースが古いデータベースとほぼ同じになることを想定します。一時 .dat ファイルには、現在の ASA .db ファイルと同じサイズの容量が必要です。

NetBackup データベースの変換用の追加ディスク容量は、NetBackup 10.2 より前のバージョンから NetBackup 10.2 以降にアップグレードする場合にのみ必要になります。データベースを一度変換すると、この追加のディスク容量は必要ありません。

Linux プライマリサーバーでは、データベースファイルは /usr/openv/db/data ディレクトリにあります。Windows プライマリサーバーでは、データベースファイルは `install_path\Veritas\NetBackup\DB\data` ディレクトリにあります。

管理者以外のユーザーとしての NetBackup デーモンおよびサービスの起動

NetBackup 9.1 では、ほとんどの NetBackup デーモンとサービスを root 以外のユーザーとして起動できるようになりました。NetBackup サービスを root 以外のユーザーとして開始します。権限の少ないユーザーを使用する場合は、それに応じて計画する必要があります。ユーザー アカウントが、ディザスタークリアファイル、外部認証局 (ECA) ファイル、一時ファイルのパスにアクセスできることを確認します。

UNIX と Linux の場合、プライマリサーバーのアップグレード中に新しいプロンプトが表示されます。新しいプロンプトではサービスユーザー (root 以外にすることが望ましい) の入力を求めるメッセージが表示されます。このユーザーは事前に作成する必要があり、セカンダリグループとして nbwebgrp を指定する必要があります。

サービスユーザーが root 以外のアカウントの場合は、データベースユーザーとして使用されます。この場合、別のデータベースユーザーの入力を求めるメッセージは表示されません。

Windows では、ローカルサービスの組み込みアカウントをサービスアカウントとして使用できます。このオプションは、プライマリサーバーの [カスタム (Custom)] アップグレードパスで利用可能です。

インストールの完了後に、nbserviceusercmd コマンドを使用してメディアサーバーとクライアントでサービスユーザーを変更できます。nbserviceusercmd コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。サービスユーザー アカウントについて詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100053035 を参照してください。

Windows では、NetBackup Legacy Network Service や NetBackup Client Service などのサービスが「ローカルシステム」以外の管理者アカウントとして実行されている場合、その[ログオン]の値は変更されません。

クラウド保護ポリシーの変更

ユーザーが NetBackup 9.1 より前の環境から NetBackup 9.1 以降の環境にアップグレードすると、クラウド保護計画が変更されます。アップグレード前の環境に、異なる種類のクラウドプロバイダの複数のクラウド資産を含む保護計画が 1 つある場合、その計画はアップグレード後にクラウドプロバイダの種類ごとに 1 つの保護計画に分割されます。資産は、クラウドプロバイダの種類に基づいて、新しい保護計画間で分散されます。たとえば、Amazon, Azure, Google 資産を含む WeeklyBackups 保護計画があつた場合、次のように分割されます。

- WeeklyBackups: Amazon の資産のみが含まれます。
- WeeklyBackups_azure: Azure の資産のみが含まれます。
- WeeklyBackups_gcp: Google の資産のみが含まれます。

プライマリサーバーとメディアサーバーによる NetBackup Snapshot Manager のアップグレード

環境に NetBackup Snapshot Manager を搭載したコンピュータがある場合は、他の NetBackup コンピュータより前にこれらのコンピュータをアップグレードする必要があります。正しいアップグレード順序は、NetBackup Snapshot Manager コンピュータ、プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントです。アップグレード順序と NetBackup のバージョンについて詳しくは、次を参照してください。

[p.196 の「NetBackup のバージョン間の互換性について」](#) を参照してください。

メディアサーバー重複排除プールのローリング変換

NetBackup 8.1 のアップグレードには、メディアサーバー重複排除プール (MSDP) のローリング変換が含まれています。

デフォルトでは、ローリング変換はシステムがビジー状態ではないときに実行されます。つまり変換は、バックアップ、リストア、CRQP、CRC チェック、圧縮などが非アクティブのときに実行されます。この変換では、通常のシステム操作への影響は予想されません。ローリング変換が完了すると、変換後のシステムと新しいインストールの間で違いはありません。ローリング変換に関する詳しい情報を参照できます。

[p.99 の「NetBackup 8.1 での MSDP のアップグレードの考慮事項」](#) を参照してください。

[p.100 の「MSDP ローリングデータ変換について」](#) を参照してください。

RBAC のセキュリティ管理者の指定

役割ベースのアクセス制御 (RBAC) を使用する場合は、セキュリティ管理者を指定する必要があります。詳細情報を参照できます。

p.150 の「[NetBackup Web ユーザーインターフェースについて](#)」を参照してください。

『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup のインストールとアップグレードのための Web サービスのアカウントの追加

NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Tomcat Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウント要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。詳細情報を参照できます。

p.142 の「[NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成](#)」を参照してください。

メモ: ベリタスは、NetBackup Web サービスに使用するユーザー アカウントの詳細を保存することを推奨します。プライマリサーバーのリカバリでは、NetBackup カタログのバックアップが作成されたときに使用されたものと同じ NetBackup Web サービスのユーザー アカウントとクレデンシャルが必要です。

注意: セキュアモードで NetBackup PBX を実行する場合は、Web サービスユーザーを PBX の権限を持つユーザーとして追加します。PBX モードの判別と、正しくユーザーを追加する方法について詳しくは、次をご覧ください。

<http://www.veritas.com/docs/000115774>

NAT が有効になっている Linux クラスタ化された NetBackup 8.2 のアップグレード

NAT が有効になっている NetBackup 8.2 Linux クラスタのアップグレードによって NAT の状態が誤って識別されます。その結果、11.0 へのアップグレード後に NAT は無効になります。NetBackup 11.0 へのアップグレードが完了したら、NAT を再度有効にする必要があります。アップグレード後の手順に、より詳しい情報が含まれています。

p.80 の「[NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順](#)」を参照してください。

任意の btrfs ファイルシステムから NetBackup データベースへの移行

btrfs ファイルシステムでは NetBackup データベースのインストールまたはアップグレードをサポートしていません。NetBackup データベースが btrfs ファイルシステムに存在する場合、アップグレードを開始する前に、サポートされているファイルシステム(ext4 または xfs)にデータベースを移動します。データベースファイルは、プライマリサーバーのディレクトリ /usr/openv/db に存在します。アップグレード前のデータベースの移動について、詳しい情報を参照できます。[p.44 の「NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順」](#)を参照してください。

NetBackup 8.2 以前からのアップグレードでの証明書キーサイズの環境変数

この情報は、8.2 以前の環境の NetBackup アップグレードに適用されます。

NetBackup は安全に通信するため、セキュリティ証明書を使用して NetBackup ホストを認証します。セキュリティ証明書は X.509 公開鍵基盤 (PKI) 標準に適合しています。

NetBackup プライマリサーバーは、認証局 (CA) として動作し、ホストに電子証明書を発行します。NetBackup は、2048 ビット、3072 ビット、4096 ビット、および 8192 ビットの証明書キーサイズをサポートしています。

NetBackup 9.1 のアップグレードでは、キー強度が 2048 ビットの新しい root CA が配備されます。2048 ビットより大きい証明書キーサイズを使用するには、インストールを開始する前にプライマリサーバーの NB_KEYSIZE 環境変数を設定します。

例:

```
NB_KEYSIZE = 4096
```

NB_KEYSIZE に指定できる値は、2048、3072、4096、8192 のみです。

メモ: プライマリサーバーで FIPS モードが有効になっている場合は、NB_KEYSIZE 環境変数の値として指定できるのは 2048 ビットまたは 3072 ビットのみです。

注意: 使用環境のキーサイズは慎重に選択する必要があります。大きいキーサイズを選択すると、パフォーマンスが低下する場合があります。使用環境に適したキーサイズを判断するには、あらゆる要素を考慮する必要があります。

CA の移行と証明書キーサイズについて詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

[表 2-2](#)はアップグレード手順の概要を示しています。

表 2-2 アップグレード処理の概要

手順	詳細	詳細情報
1	オペレーティングシステムの必要条件を見直し、コンピュータがすべての必要条件を満たしていることを確認します。	p.197 の「 UNIX および Linux の場合のアップグレード要件 」を参照してください。 p.200 の「 Windows および Windows クラスタのアップグレード要件 」を参照してください。 p.205 の「 Windows クラスタのアップグレードの要件 」を参照してください。
2	Web サーバーのユーザーアカウントとグループアカウントが作成され、有効になっていることを確認します。	詳しくは以下を参照してください。 p.142 の「 NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成 」を参照してください。
3	アップグレード処理を開始する	p.43 の「 プライマリサーバーのアップグレードについて 」を参照してください。

レガシーログディレクトリのセキュリティ更新

NetBackup 11.0 へのアップグレード中に、レガシーログディレクトリの権限は、新しい ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS により制限の厳しいレベルに設定されます。この変更は、機密情報が含まれている可能性のある NetBackup ログへの不正アクセスを防止することを目的としています。

デフォルト値は ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS=NO です。この値は NetBackup レガシーログへのアクセスを制限します。

ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS を YES に変更することで、ログファイルの権限を制限の少ない設定に変更できます。NetBackup 11.0 へのアップグレード時に制限の少ないログ権限を保持する場合は、アップグレードする前に nbsetconfig コマンドを使用して ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS=YES を設定します。

レガシーログの権限を再度制限するには、nbsetconfig を使用して ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS=NO を設定します。

nbsetconfig コマンドについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS 値について詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

統合ログのセキュリティ更新

NetBackup 10.0.0.1 へのアップグレード中に、統合ログディレクトリとそのファイルに対する権限がより制限の厳しいレベルに設定されます。この変更は、機密情報が含まれている可能性のある NetBackup ログへの不正アクセスを防止することを目的としています。

ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS を YES に変更することで、ログファイルの権限を制限の少ない設定に変更できます。NetBackup 10.0.0.1 へのアップグレード時に制限の少ないログ権限を保持する場合は、アップグレードする前に nbsetconfig コマンドを使用して ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS=YES を設定します。

UNIX および Linux のアップグレードでは、サーバーの bp.conf に ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS=YES が設定されている場合、nblog.conf のログファイル権限は 644 です。icsul.conf の権限はすでに 640 であるため、変更されません。新しい権限は、新しく作成されたログファイルにのみ適用されます。アップグレードの前から既存のログファイルの権限は変更されません。

nbsetconfig コマンドについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

ALLOW_WORLD_READABLE_LOGS 値について詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

通知、メッセージ、耐性の構成情報がアップグレードされない

NetBackup 10.0 より前の環境から NetBackup 10.0 以降へのアップグレード中、以前の通知、メッセージ、および耐性の構成情報は移行されません。以前に追加された Resiliency Domain は、NetBackup Web インターフェースの [耐性 (Resiliency)] タブに表示されなくなります。

[耐性 (Resiliency)] タブの耐性情報を再構成して再検出するには、参照先のテクニカルノートに示されている手順を実行します。[耐性 (Resiliency)] タブには、Cohesity Resiliency Platform (VRP) の構成情報と、その Resiliency Domain に関連するすべてのデータ（管理対象および管理対象外の資産を含む）が表示されます。

Resiliency Domain データを再検出するには、アップグレードの完了後に再構成する必要があります。NetBackup を 10.0 にアップグレードした後に VRP を再構成する方法について詳しくは、参照されているテクニカルノートを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100052464

NetBackup 10.0 へのアップグレードの一環として移行されない情報は、次のファイルに格納されます。

- vrp-h2-store.mv.db
- messages-h2-store.mv.db
- notifications-h2-store.mv.db

これらのファイルは、プライマリサーバー上の次のディレクトリに保持されます。削除しないかぎり、これらのファイルは指定した場所に残ります。これらのファイルは、NetBackup 10.0 以降の環境では使用できません。

- Windows ファイル:

```
install_path¥NetBackup¥var¥global¥wmc¥h2stores¥vрp-h2-store.mv.db  
install_path¥NetBackup¥var¥global¥wmc¥h2stores¥messages¥  
messages-h2-store.mv.db  
install_path¥NetBackup¥var¥global¥wmc¥h2stores¥notifications¥  
notifications-h2-store.mv.db
```

- Linux ファイル:

```
/usr/openv/var/global/wmc/h2stores/vrp-h2-store.mv.db  
/usr/openv/var/global/wmc/h2stores/messages/  
messages-h2-store.mv.db  
/usr/openv/var/global/wmc/h2stores/notifications/  
notifications-h2-store.mv.db
```

カタログバックアップの既知の制限事項

NetBackup のバージョンが混在するバックアップ環境がサポートされます。ただし、NetBackup カタログのバックアップを作成する場合は制限事項があります。

プライマリサーバーが別のメディアサーバーにカタログのバックアップを実行する場合に、メディアサーバーでプライマリサーバーと同じバージョンの NetBackup を使う必要があります。NetBackup カタログがプライマリサーバー上に存在するため、プライマリサーバーはカタログバックアップのクライアントであると見なされます。

そのため、メディアサーバーの NetBackup のバージョンはプライマリサーバーと同じである必要があります。

メディアサーバーの NetBackup と同じバージョンを使わないと、カタログデータが適切に保護されません。

バージョン混在のサポートに関する詳しい情報を参照できます。

[p.196 の「NetBackup のバージョン間の互換性について」](#)を参照してください。

NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について

NetBackup では、NetBackup ホストの認証にセキュリティ証明書を使用します。

NetBackup セキュリティ証明書は、X.509 公開鍵基盤 (PKI) 標準に適合しています。プライマリサーバーは、NetBackup 認証局 (CA) として動作し、ホストに NetBackup 証明書を発行します。

NetBackup は、ホスト ID ベースとホスト名ベースの 2 種類の **NetBackup** ホストセキュリティ証明書を提供します。ホスト ID ベース証明書は、各 **NetBackup** ホストに割り当てる UUID (Universal Unique Identifier) に基づいています。**NetBackup** プライマリサーバーは、これらの識別子をホストに割り当てます。

NetBackup 8.0 以前に生成されたすべてのセキュリティ証明書は、現在ホスト名ベースの証明書と呼ばれます。**NetBackup** は、これらの古い証明書を新しいホスト ID ベースの証明書に置き換える移行を進めています。この移行は今後のリリースで完了し、ホスト名ベース証明書は使用されなくなる予定です。ただし移行はその途上にあり、特定の処理では最新の **NetBackup** バージョンに引き続き過去のホスト名ベース証明書が必要です。

NetBackup では、**NetBackup** 認証局または外部認証局が発行した証明書をホストの認証に使用します。プライマリサーバーで外部証明書を使用する場合は、インストール後のプロセスで証明書を構成します。外部証明書を使用するメディアサーバーやクライアントでは、インストール時またはアップグレード時、あるいはインストール後またはアップグレード後に外部証明書を構成できます。

インストール後の処理について詳しくは、

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300 を参照してください。

NetBackup での外部 CA のサポート、および外部 CA が署名した証明書について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

アップグレードによるファイルの自動変更について

以前のバージョンの **NetBackup** からアップグレードする場合、特定のカスタマイズ可能なスクリプトが上書きされます。**NetBackup** では、これらのスクリプトを上書きする前にスクリプトのコピーが保存され、すべての変更が保持されます。

UNIX および Linux の場合

表 2-3 UNIX および Linux の保護パスおよびファイル

保護対象のパスまたはファイル	処理
/usr/openv/netbackup/bin/initbpdbm /usr/openv/netbackup/bin/initbprd	現在の NetBackup バージョンの番号がファイル名に追記されます。 例: initbpdbm.version
/usr/openv/netbackup/nblog.conf	アップグレード時に、ファイルに接尾辞が追加されます。詳しくは、アップグレードの完了後に /usr/openv/netbackup ディレクトリの内容を確認してください。

保護対象のパスまたはファイル	処理
/usr/openv/msg/C	ディレクトリ全体がディレクトリ名と現在のバージョン番号に移行されます。
/usr/openv/netbackup/bin/goodies	例:
/usr/openv/netbackup/bin/help	
/usr/openv/volmgr/help	/usr/openv/netbackup/ bin/goodies.version

Windows の場合

表 2-4 Windows の保護対象のパスとファイル

保護対象のパスまたはファイル	処理
install_path\NetBackup\ nblog.conf	ファイルは ディレクトリにコピーされます。 例:
install_path\NetBackup\bin\goodies\ netbackup.adm	ファイルは
install_path\NetBackup\bin\goodies\ help_script.cmd	install_path\NetBackup\bin\goodies.release
install_path\NetBackup\bin\goodies\ available_media.cmd	ディレクトリにコピーされます。
install_path\NetBackup\bin\goodies\ check_coverage.cmd	release 値は NetBackup の現在のバージョンです。
install_path\NetBackup\bin\goodies\ cleanstats.cmd	例:
install_path\NetBackup\bin\goodies\ duplicate_images.cmd	install_path\NetBackup\bin\goodies.release
install_path\NetBackup\bin\goodies\ verify_images.cmd	
install_path\NetBackup\bin\goodies\ bpstart_notify	install_path\NetBackup\bin\goodies.version\ netbackup.adm
install_path\NetBackup\bin\goodies\ bpend_notify	

アップグレード前のジョブデータベースのサイズの削減

9.0 以前から NetBackup 9.1 以降へのアップグレード後に、資産レベルでのアクセス制御を可能にするため、特定の作業負荷の既存のジョブに資産の名前空間が割り当てられます。この処理には時間がかかる場合があります。アップグレードの前にジョブデータベースのサイズを減らす必要があります。この処理により、関連付けを実行するために必要な処理の量が最小化され、Web サービスのパフォーマンスに与える影響が最小限に抑えられます。非常に大規模なジョブデータベースでは、ヒープ領域の高使用率に関連したアラートが表示される場合があります。

影響を受ける作業負荷には、クラウド、Nutanix AHV、RHV、VMware が含まれます。

詳しくは、次の記事を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/100049808>

SUSE Linux プライマリサーバーのアップグレードに関する既知の問題

まれに、SUSE Linux プライマリサーバーのインストール前チェックで、`webservice` ユーザーまたは `webservice` グループが存在しないと報告される場合があります。

ユーザーとグループが想定どおりに存在することを検証し、アップグレードを再実行してください。

問題が解決しない場合は、インストール前チェックのエラーを上書きするように環境変数を設定し、操作を再実行します。

```
NBPREINSTALL_CRITICAL_OVERRIDE=YES
```

パフォーマンスと調整に関する注意事項

『NetBackup Backup Planning and Performance Tuning ガイド』には、現場の経験に基づいた環境に関する推奨事項が記載されています。特定の環境では、異なる注意事項が必要になる場合があります。

管理者は、このガイドを使用して、特定の NetBackup 環境の NetBackup のパフォーマンスを分析、評価、調整する必要があります。表示される情報を使用して、次の項目を決定します。

- NetBackup プライマリサーバーのサイズ要件。
- 必要な CPU、ディスクドライブ、テープドライブの数。
- さまざまな作業負荷に対して NetBackup を最適化する最善の方法。
- バックアップパフォーマンスを最大にするための調整パラメータ。
- リカバリ時間を短縮するための適切な戦略。
- NetBackup によるデータの処理方法を理解するための利用可能なツール。

追加情報に関しては、『NetBackup Backup Planning and Performance Tuning ガイド』を参照してください。

アップグレードツールについて

SORT (Services and Operations Readiness Tools) やインストール前チェックなど のアップグレードツールについて詳しくは、このセクションを確認してください。

Cohesity Services and Operations Readiness Tools について

Cohesity SORT (Services and Operations Readiness Tools) は、ベリタスエンタープライズ製品をサポートするスタンドアロンと Web ベースの強力なツールセットです。

NetBackup では、SORT によって、複数の UNIX/Linux または Windows 環境にまたがってホストの設定を収集、分析、報告する機能が提供されます。このデータは、システムで NetBackup の最初のインストールまたはアップグレードを行う準備ができるかどうかを評価するのに役立ちます。

次の Web ページから SORT にアクセスします。

<https://sort.veritas.com/netbackup>

SORT ページに移動すると、次のように多くの情報を利用可能です。

- インストールとアップグレードのチェックリスト
このツールを使うと、システムで NetBackup のインストールまたはアップグレードを行う準備ができるかどうかを確認するためのチェックリストを作成できます。このレポートには、指定した情報に固有のソフトウェアとハードウェアの互換性の情報がすべて含まれています。さらに、製品のインストールまたはアップグレードに関する手順とその他の参照先へのリンクも含まれています。
- Hotfix と EEB Release Auditor
このツールを使うと、インストールする予定のリリースに必要な Hotfix が含まれているかどうかを調べることができます。
- カスタムレポート
このツールを使うと、システムに関する推奨事項を取得できます。
- NetBackup のプラットフォームと機能の今後の予定
このツールを使うと、新しい機能や改善された機能に置き換えられる項目を判断できます。さらに、置き換えることなく廃止される項目に関する情報を入手することもできます。これらの項目のいくつかには NetBackup の特定の機能、サードパーティ製品の統合、その他の製品の統合、アプリケーション、データベースおよび OS のプラットフォームが含まれます。

SORT ツールのヘルプが利用可能です。SORT ホームページの右上隅にある [ヘルプ (Help)] をクリックします。次のオプションがあります。

- 実際の本のようページをめくってヘルプの内容を閲覧する
- 索引でトピックを探す
- 検索オプションを使ってヘルプを検索する

SORT のアップグレードのための推奨手順

現在の NetBackup ユーザーは、SORT の最初の導入時に一覧表示される 4 つの手順を実行する必要があります。このツールには他にも多くの機能が備わっていますが、これ

らの手順はすでに NetBackup を使っているユーザーにとって SORT の概要を知る上で役立ちます。さらに、これらの手順を実行することで、その他の SORT 機能に関する有用で基本的な知識が備わります。

表 2-5

手順	詳細
SORT Web ページにアカウントを作成します。	p.32 の「 SORT ページにアカウントを作成する方法 」を参照してください。
システム固有のインストールレポートを作成します。	p.33 の「 システム固有のインストールレポートを作成する方法 (Windows の場合) 」を参照してください。 p.34 の「 システム固有のインストールレポートを作成する方法 (UNIX または Linux の場合) 」を参照してください。
今後のプラットフォームと機能の予定を確認します。	p.35 の「 今後のプラットフォームの変更と機能の予定を確認する方法 」を参照してください。
Hotfix と EEB Release Auditor の情報を確認します。	p.35 の「 Hotfix と EEB (Emergency Engineering Binary) の情報を確認する方法 」を参照してください。

SORT ページにアカウントを作成する方法

- 1 Web ブラウザで、次の場所に移動します:

<https://sort.veritas.com/netbackup>

- 2 右上で[ログイン (Login)]をクリックしてから、[今すぐ登録 (Register now)]をクリックします。

3 要求された次のログオンおよび連絡先情報を入力します:

電子メールアドレス (Email address) 電子メールアドレスを入力し、検証してください。

パスワード (Password) パスワードを入力し、検証してください。

名 (First name) 名を入力してください。

姓 (Last name) 姓を入力してください。

会社名 (Company name) 会社名を入力してください。

国 (Country) 国を入力してください。

優先言語 (Preferred language) 優先言語を選択してください。

CAPTCHA テキスト (CAPTCHA text) 表示される CAPTCHA テキストを入力してください。必要に応じて、イメージを更新してください。

4 [送信 (Submit)]をクリックします。**5** ログオン情報の受信時に SORT にログインしてカスタマイズした情報のアップロードを開始できます。**システム固有のインストールレポートを作成する方法 (Windows の場合)****1** SORT の Web サイトに移動します。

<https://sort.veritas.com/netbackup>

2 [インストールとアップグレード (Installation and Upgrade)]セクションで、[SORT データコレクタによるインストールとアップグレードのカスタムレポート (Installation and Upgrade custom reports by SORT data collectors)]を選択します。**3** [データコレクタ (Data Collectors)]タブを選択します。**4** [グラフィカルユーザーインターフェース (Graphical User Interface)]のラジオボタンを選択して、プラットフォームに対して適切なデータコレクタをダウンロードします。

データコレクタは OS 固有です。Windows コンピュータに関する情報を収集するには、Windows データコレクタが必要です。UNIX または Linux コンピュータに関する情報を収集するには、UNIX または Linux データコレクタが必要です。

5 ダウンロードが終わったら、データコレクタを起動します。**6** [ようこそ (Welcome)]画面の[製品ファミリー (product family)]セクションで NetBackup を選択して、[次へ (Next)]をクリックします。

- 7 [システムの選択 (System Selection)]画面で、分析するすべてのコンピュータを追加します。[参照 (Browse)]をクリックすると、分析に追加可能なコンピュータのリストを確認できます。管理者アカウントまたはrootアカウントでツールを起動する必要があります。
- 8 すべてのシステムを選択したら、[システム名 (System names)]セクションを確認して[次へ (Next)]をクリックします。
- 9 [検証オプション (Validation Options)]画面の[検証オプション (Validation options)]下で、アップグレード後のバージョンを選択します。
- 10 [次へ (Next)]をクリックして続行します。
- 11 ユーティリティによって要求されたチェックが実行され、結果が表示されます。レポートをマイ SORT にアップロードできます。また結果を印刷したり保存できます。分析を一元管理しやすくするために、結果をマイ SORT Web サイトにアップロードします。[アップロード (Upload)]をクリックして、マイ SORT のログオン情報を入力すると、データがマイ SORT にアップロードされます。
- 12 終了したら、[完了 (Finish)]をクリックしてユーティリティを閉じます。

システム固有のインストールレポートを作成する方法 (UNIX または Linux の場合)

- 1 SORT の Web サイトに移動します。

<https://sort.veritas.com/netbackup>

- 2 [インストールとアップグレード (Installation and Upgrade)]セクションで、[SORT データコレクタによるインストールとアップグレードのカスタムレポート (Installation and Upgrade custom reports by SORT data collectors)]を選択します。
- 3 [データコレクタ]タブを選択します。
- 4 プラットフォームに対して適切なデータコレクタをダウンロードします。

データコレクタは OS 固有です。Windows コンピュータに関する情報を収集するには、Windows データコレクタが必要です。UNIX または Linux コンピュータに関する情報を収集するには、UNIX または Linux データコレクタが必要です。

- 5 ダウンロード済みのユーティリティが保存されたディレクトリに移動します。
- 6 実行 (Run)./`sortdc`

ユーティリティによって、最新バージョンのユーティリティがインストールされていることを確認するためのチェックが実行されます。さらに、ユーティリティによって、最新のデータが含まれているかどうかがチェックされます。この処理の後、ユーティリティによって、このセッションのログファイルの場所がリストされます。
- 7 要求されたら、Enter キーを押して続行します。
- 8 メインメニューで[NetBackup ファミリー (NetBackup Family)]を選択します。

- 9** [何をしますか? (What task do you want to accomplish?)]というプロンプトが表示されたら、[インストール/レポートのアップグレード (Installation/Upgrade report)]を選択します。

カンマで項目を区切ることで、複数のオプションを選択できます。

- 10** レポートに含めるシステムを指定します (複数可)。

指定したシステムで以前にレポートを実行していた場合は、そのレポートを再び実行するようプロンプトが表示されます。[はい (Yes)]を選択すると、レポートが再実行されます。

ユーティリティによって、セッションのログファイルの場所が再びリストされます。

ユーティリティの進捗状況が画面に表示されます。

- 11** インストールまたはレポートをアップグレードする製品に関するプロンプトが表示されたら、NetBackup を指定します。

- 12** インストールする NetBackup のバージョンに対応する数字を入力します。

ユーティリティによって、セッションのログファイルの場所が再びリストされます。

ユーティリティの進捗状況が画面に表示されます。

- 13** ユーティリティによって、レポートをオンラインで確認する場合には SORT Web サイトにアップロードするよう促すプロンプトが表示されます。オンラインレポートを利用すると、システム上のテキストベースのレポートよりも詳細な情報を入手できます。

- 14** タスクが完了したら、ユーティリティを終了できます。オプションでツールに関するフィードバックを提供できます。これはツールを改善するために使用されます。

今後のプラットフォームの変更と機能の予定を確認する方法

- 1** Web ブラウザで、次の場所に移動します:

<https://sort.veritas.com/netbackup>

- 2** [NetBackup のプラットフォームと機能の今後の予定 (NetBackup Future Platform and Feature Plans)] ウィジェットを見つけて選択します。

- 3** [情報の表示 (Display Information)]を選択します。

- 4** 表示される情報を確認します

- 5** 任意 - サインインによる通知の作成 - [サインインによる通知の作成 (Sign in and create notification)]をクリックします。

Hotfix と EEB (Emergency Engineering Binary) の情報を確認する方法

- 1** Web ブラウザで、次の場所に移動します:

<https://sort.veritas.com/netbackup>

- 2** [NetBackup Hotfix と EEB Release Auditor (NetBackup Hot Fix and EEB Release Auditor)] ウィジェットを見つけて選択します。

- 3 Hotfix または EEB (Emergency Engineering Binary) の情報を入力します。
- 4 [検索 (Search)]をクリックします。
- 5 新しいページに、以下の列が含まれた表が表示されます。

EEB 識別子の Hotfix 前の画面で入力した Hotfix または EEB 番号が表示されます。
(Hot fix of EEB Identifier)

説明 (Description) Hotfix または EEB に関連付けられた問題の説明が表示されます。

解決済みのバージョン この問題が解決された NetBackup のバージョンが示されます。
(Resolved in Versions)

NetBackup プリインストールチェックについて

NetBackup インストーラにはインストール前チェックが含まれています。この機能を使用すると、コンピュータの正常なインストールまたはアップグレードの準備ができるか判断しやすくなります。

このチェックは、アップグレードを開始する際に自動的に実行されます。チェックの結果は次のポイントで示されます。

- UNIX または Linux のアップグレードスクリプト
エンドユーザー使用許諾契約に同意してから、インストールを開始するまでの間。
- Windows のインストールウィザード
[Installation Summary]が表示される[Ready to Install the Program]画面

また、インストール前チェックは VxUpdate から実行することもできます。p.120 の「[VxUpdate について](#)」を参照してください。

NetBackup は、インストールまたはアップグレードの開始時にチェックを行うインストール前プログラムを使用します。このチェックでは、正常に運用するために削除できる既知の問題を調べることができます。実行されるチェックは、インストール時やアップグレード時に発生した以前の問題に関して、お客様からいただいたご意見に基づいて開発されました。お客様から新たにフィードバックをいただいた場合、NetBackup はこのチェックを更新する可能性があります。更新は、NetBackup のリリースには依存しません。サーバーが telemetry.veritas.com に接続できる場合、インストールやアップグレードを開始すると、NetBackup がチェックを最新のバージョンに自動的に更新します。

実行されるテストの1つは、ローカルにインストールされた EEB (Emergency Engineering Binary) の更新とインストール中の NetBackup のバージョンに含まれている修正の比較です。インストール前テストのうちいずれかが失敗すると、必要な操作の種類を示すメッセージが表示されます。

一部のテスト失敗は軽微なものと見なされ、アップグレードの続行が許可されます。重要なテスト失敗があると、インストールまたはアップグレードの実行が妨げられます。この出力は、インストールまたはアップグレードを安全に続行する前に他の処置を講じる必要があることが通知されます。

インストール前チェックの結果は次の場所に格納されます。

- Linux

次のパスにあるインストールトレースファイル
`/usr/openv/tmp`

- Windows

次のディレクトリ

```
%ALLUSERSPROFILE%\Veritas\NetBackup\InstallSummary  
%ALLUSERSPROFILE%\Veritas\NetBackup\InstallLogs
```

NetBackup データベースアライザツールについて

新しい NetBackup データベースのための準備が環境で整っていることを確認するため、NetBackup データベースアライザツールを開発しました。NetBackup データベースの重要性を考えて、NetBackup 10.2 にアップグレードする前にこのツールを実行する必要があります。ツールの場所とツールの実行方法について詳しくは、次の URL で確認できます。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100055151

アップグレードに関する注意事項および制限事項

アップグレードの操作に関する注意事項、制限事項、要件について詳しくは、このセクションを確認してください。

オペレーティングシステムの最小バージョン

NetBackup に必要な最小オペレーティングシステムについて詳しくは、SORT の Web サイトを参照してください。SORT の Web サイトでは、互換性のある Windows、UNIX および Linux オペレーティングシステムの完全なリストが SCL (ソフトウェア互換性リスト) にまとめられています。

<https://sort.veritas.com/netbackup>

<https://sort.veritas.com/checklist/install>

NetBackup 11.0 以降のアップグレードに関する Windows コンパイラとセキュリティの要件

NetBackup 11.0 以降の Windows では、Visual Studio 2022 コンパイラと Windows 11 SDK (Software Development Kit) を使用します。NetBackup 11.0 を実行するには、Windows コンピュータに Visual C++ ランタイムライブラリのバージョン 14.36.32532 以降が必要です。Microsoft 社はこれらのライブラリをインストールする再頒布可能ユーティリティを提供します。これらの再頒布可能ユーティリティについての詳細情報は入手可能です。

<https://visualstudio.microsoft.com/downloads>

Microsoft 社のこれらのユーティリティは、再起動を必須とするように Windows ホストを変更する場合があります。再起動は、Visual C++ ランタイムライブラリがシステム上の 1 つ以上のプロセスで使用されている場合に必須となる可能性があります。NetBackup 11.0 以降をインストールする前に、Visual Studio 2022 C++ ランタイムライブラリを Windows コンピュータにインストールする必要があります。これらのライブラリのインストールは、コンピュータを安全に再起動できるメンテナンス期間内で実行する必要があります。

互換性のある Visual C++ ランタイムライブラリがない Windows コンピュータでは、NetBackup のアップグレード処理で、ライブラリのインストールを提案される場合があります。リスクとオプトインを確認する必要があります。リスクとオプトインのプロセスに関する詳細情報が入手可能です。

https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100062924

すべてのセキュリティ更新プログラムが適用されていないと、再頒布可能ユーティリティがホストで失敗したり、予期しない動作をする可能性があります。Windows ホストに最新のセキュリティ更新プログラムが適用されていない場合、次の動作が発生する可能性があります。

- NetBackup のアップグレードプロセスが開始直後に失敗し、Visual Studio 2022 C++ ランタイムライブラリを配備できないというメッセージが表示される。
- NetBackup のインストールまたはアップグレードプロセスによって実行された nbcertcmdtool アプリケーションが予期せず失敗する。このエラーは、セキュリティ構成が無効または不十分であるために発生する nbcertcmdtool エラーと区別することが困難です。
- NetBackup のインストールまたはアップグレードプロセスの終了間際に、MSDP アプリケーションが予期せず失敗する。

NetBackup Web サーバーをサポートするユーザー アカウントの作成

NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウン

ト要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。

多数の手順を実行すると、オペレーティングシステムでユーザーとグループを作成できます。特定のいくつかの方法を示していますが、他の方法でも同じ目標を達成できる可能性があります。ホームディレクトリのパス、ユーザー名、およびグループ名はハードコードされていないため、変更することができます。デフォルトのローカルユーザー名は **nbwebsvc**、デフォルトのローカルグループ名は **nbwebgrp** です。

メモ: Linux プラットフォームの場合、UID はクラスタ環境の各ローカルアカウントと同じである必要があります。すべてのクラスタノードでローカルアカウントが一貫して定義されていることを確認します。

Linux でユーザー アカウントとユーザーグループを作成する方法

- 1 次のコマンドでローカルグループを作成します。

コマンド: # groupadd *group_name*

例: # groupadd nbwebgrp

- 2 次のコマンドでローカルユーザー アカウントを作成します。

コマンド: # useradd -g *group_name* -c *comment* -d /usr/openv/wmc *user_name*

例: # useradd -g nbwebgrp -c 'NetBackup Web Services application account' -d /usr/openv/wmc nbwebsvc

Windows でユーザー アカウントとユーザーグループを作成する方法

メモ: Windows 上のクラスタ環境のドメインアカウントを使う必要があります。

メモ: Web サービスのユーザー アカウント名は 20 文字に制限されます。

- 1 次のコマンドでローカルユーザー アカウントを作成します。

コマンド: C:>net user *user_name* *StrongPassword* /add (*StrongPassword* はアカウントに関連付ける強いパスワードです)

例: C:>net user nbwebsvc 1U*s7lQ# /add

- 2 次のコマンドでローカルグループを作成します。

コマンド: C:>net localgroup *group_name* /add

例: C:>net localgroup nbwebgrp /add

3 次のコマンドで新しいユーザーを新しいグループのメンバーにします。

コマンド: c:¥>net localgroup group_name user_name /add

例: C:¥>net localgroup nbwebgrp nbwebsvc /add

4 次のように、新しいユーザーに[サービスとしてログオン]の権限を付与します。

- [コントロールパネル]、[管理ツール]、[ローカルセキュリティポリシー]の順に進みます。
- 次に[セキュリティの設定]で、[ローカルポリシー]から[ユーザー権利の割り当て]をクリックします。
- [サービスとしてログオン]を右クリックして[プロパティ]を選択します。
- ローカルユーザーを追加します。
- 変更を保存して[サービスとしてログオン]のプロパティのダイアログボックスを閉じます。

これらの要件のいずれかが満たされていない場合、NetBackup プライマリサーバーのインストールは失敗します。Windows では、インストールプロセスの一部として、ユーザー アカウントのパスワードを指定するように求められます。

NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイバートラんスポートメディアサーバーのサポートについて

RHEL 7.5 以降でファイバートラんスポートメディアサーバー (FTMS) を使用する計画がある場合は、必ず NetBackup を 8.1.2 以降にアップグレードしてください。また、NetBackup 8.1.2 以降が配備された新しい RHEL 7.5 以降のリリースのシステムを使用することもできます。

RHEL を 7.5 以降のリリースにアップグレードする前に、次の手順を実行します。

- 1 FTMS を無効にします。
- 2 NetBackup を 8.1.2 以降にアップグレードします。
- 3 RHEL を 7.5 以降のリリースにアップグレードし、その後 FTMS を再構成します。

FTMS の再構成について詳しくは、『[NetBackup SAN クライアントおよびファイバートラんスポートガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 8.1 での MSDP の変更

NetBackup 8.0 から 8.1 へのアップグレードには、MSDP (メディアサーバー重複排除プール) のローリングデータ変換が含まれています。この変換はバックグラウンドで動作し、既存のすべてのデータコンテナを AES 暗号化と SHA-2 指紋アルゴリズムに変換します。crcontrol コマンドを使用してローリングデータ変換を管理および監視できます。crcontrol コマンドの使用についての詳しい情報を参照できます。『[Veritas NetBackup](#)

『重複排除ガイド』のローリングデータ変換のセクションを参照してください。さらに、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』の `crcontrol` コマンドを参照してください。

ローリング変換は、システムがビジー状態ではないときに実行されます。つまり変換は、バックアップ、リストア、CRQP、CRC チェック、圧縮などが非アクティブのときに実行されます。この変換では、通常のシステム操作への影響は予想されていません。ローリング変換が完了すると、変換後のシステムと新しいインストールの間で違いはありません。

NetBackup のアップグレード中に変換プロセスの明示的な手順は不要です。アップグレード後、ローリング変換はバックグラウンドで動作を開始します。ローリング変換が開始されると、元の **NetBackup** バージョンに戻すことはできません。ローリング変換に関する詳しい情報を参照できます。『Veritas NetBackup 重複排除ガイド』のローリングデータ変換のセクションを参照してください。

NetApp クラスタに必要になる可能性のある変更

11.0 のアップグレードの一環として、任意の **NetApp** クラスタの設定を見直します。クラスタモードが **Node Scope Mode** に設定されている場合、**NetApp** 社では、**Vserver** 対応モードへの変更を推奨しています。アップグレードの一環として **Vserver** 対応モードへの移行を計画する場合は、ファイルそれぞれに対する詳細なイメージレポートを作成します。`bpiplist` コマンドを使って、このリストを生成します。環境のサイズによっては、この操作に時間がかかる場合があります。詳細情報を参照できます。

p.189 の「[NetApp クラスタのためのアップグレード前の追加手順](#)」を参照してください。

Bare Metal Restore 情報がエラー自動イメージレプリケーションを使って複製されるときのエラー

BMR (Bare Metal Restore) 情報の正常な AIR (Auto Image Replication) の略で自動イメージレプリケーションの意味) には 2 つのことが必要です。1 つは、ターゲットドメインのプライマリサーバーで **BMR** が有効になっている必要があります。2 つ目に、ターゲットドメインのプライマリサーバーは **BMR** 情報を送信するあらゆるクライアントと同等以上の **NetBackup** のバージョンである必要があります。たとえば、ターゲットドメインのプライマリサーバーが **NetBackup 11.0** で元のドメインのクライアントが 10.1 である場合には、AIR は正しく機能します。

元のドメインのクライアントが **NetBackup 11.0** でターゲットドメインのプライマリが 10.1 である場合には、**BMR** 情報は複製できません。他の情報はすべて正常に送信され、**BMR** 情報だけが複製されません。クライアントの内容はリストアできますが、**BMR** を使うことはできません。

このトピックに関する詳細情報を参照できます。

<http://www.veritas.com/docs/TECH211267>

バージョン 8.1 より前のクライアントと 8.1 以降のメディアサーバーでのアップグレードの問題

NetBackup 8.1 のアップグレードで、指紋をとるアルゴリズムは MD5 から SHA2 にアップグレードされ、セキュリティの脆弱性に対する保護が向上しました。NetBackup では、既存の MD5 の指紋データを SHA2 に変換するために、ローリング変換とインライン変換の 2 つの変換方式が導入されました。問題は、次の条件下で発生します。

- クライアントがバージョン 8.1 より前の NetBackup
- クライアントで Client Direct (クライアントで重複排除を実行する) を使用している
- NetBackup 8.1 以降のメディアサーバーでクライアントのバックアップを作成している

これらの条件下では、指紋の変換はインラインで行われます。その結果、バックアップパフォーマンスに悪影響が与えられ、メディアサーバーで CPU の処理負荷が増加します。メディアサーバーで、MD5 の情報を再ハッシュして SHA2 の指紋を作成する必要があります。

この問題を防ぐには、次の操作を行います。

- バージョン 8.1 より前のクライアントの場合、NetBackup 8.1 以降のメディアサーバーでメディアサーバー重複排除 (MSDP) を使用するようにバックアップを変更します。この処理により、バックアップでのインライン変換の実行を防ぎます。
- 8.1 以降のメディアサーバーでバックアップが作成されている 8.1 より前のクライアントで、Client Direct を使用しないでください。

プライマリサーバーのアップグレード

この章では以下の項目について説明しています。

- [プライマリサーバーのアップグレードについて](#)
- [NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順](#)
- [Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する](#)
- [Windows システムでのサイレントアップグレードの実行](#)
- [NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード](#)
- [Linux での NetBackup プライマリサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード](#)
- [NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順](#)
- [NetBackup の起動と停止のスクリプトについて](#)
- [アップグレード後のシステムの更新](#)

プライマリサーバーのアップグレードについて

使用環境の他のコンピュータの NetBackup をアップグレードする場合は、まずプライマリサーバーの NetBackup をアップグレードします。プライマリサーバーのアップグレードが終了したらメディアサーバーをアップグレードし、次にクライアントをアップグレードします。NetBackup は、バージョンが混在する環境をサポートします。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.196 の「NetBackup のバージョン間の互換性について」](#) を参照してください。

プライマリサーバーのアップグレード方法として、NetBackup アップグレードスクリプトによる方法と、UNIX および Linux のネイティブインストーラによる方法の 2 種類をサポートしています。NetBackup アップグレードスクリプトによる方法は標準的なアップグレード方法で、新規ユーザーにお勧めです。UNIX および Linux のネイティブインストーラによる方法は難易度が高い場合があり、追加の手順も必要です。

NetBackup には、NetBackup のサポート対象バージョンすべての管理コンソールが含まれています。NetBackup のサポート対象バージョンについて詳しくは、次を参照してください。

<https://sort.veritas.com/eos/>

メモ: NetBackup のサーバーソフトウェアをインストールまたはアップグレードした後に、ホストにあるリモート管理コンソール (Windows と Java) の古いバージョンをアンインストールすることをお勧めします。ネイティブの Windows 版 NetBackup 管理コンソールがある場合は、NetBackup サーバーソフトウェアをインストールまたはアップグレードするときに自動的にその管理コンソールがアンインストールされます。

p.196 の「NetBackup のバージョン間の互換性について」を参照してください。

アップグレードに進みます。

p.44 の「NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順」を参照してください。

NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順

NetBackup 11.0 のアップグレードの計画時に表示される一般的な情報に注意してください。

- ガイド付き方式に必要な追加手順を実行できるようにするいくつかのツールを使用できます。詳しくは、Business Critical Services (BCS) の担当者にお問い合わせください。
- NetBackup アップグレードに RHEL 7.5 へのアップグレードが含まれており、ファイルトランSPORTメディアサーバー(FTMS)を使用する場合には、追加の手順が必要になります。詳細情報を参照できます。
p.40 の「NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイルトランSPORTメディアサーバーのサポートについて」を参照してください。
- GCO (Global Cluster Option) を使ってグローバルにクラスタ化されたプライマリサーバーを含む NetBackup のインストールでは、このマニュアルのアップグレード計画のガイドラインに従ってください。これらのサーバーをアップグレードする手順について

は、次のドキュメントを参照してください：

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100041191

- NetBackup IT Analytics は、NetBackup のレポートと分析のためのソリューションです。NetBackup プライマリサーバーのアップグレード中に NetBackup IT Analytics Data Collector がアップグレードされる場合があります。NetBackup IT Analytics Data Collector とアップグレードに関する詳細情報を参照できます。
p.180 の「[NetBackup IT Analytics Data Collector について](#)」を参照してください。

プライマリサーバーを NetBackup 11.0 にアップグレードする準備を行うには、以下の手順を実行します。

NetBackup 11.0 にアップグレードしてイメージメタデータの移行を完了するためのインストール前手順

- 1 SORT ツールを使用して環境チェックを実行します。

p.31 の「[SORT のアップグレードのための推奨手順](#)」を参照してください。

- 2 次の手順でライセンスファイルをダウンロードします。

- ユーザー名とパスワードを使用して Cohesity のサポートアカウント (Cohesity のサポート) にログオンします。
- [ライセンス (Licensing)] を選択します。このオプションを選択すると、VEMS (Cohesity Entitlement Management System) が表示されます。
- VEMS のメインメニューで [資格 (Entitlements)] を選択します。
- [資格 (Entitlements)] ページでライセンスキーライセンスキーの生成に使用する資格を検索します。
- 資格を見つけたら、関連付けられている [ライセンスの生成 (Generate License)] オプションを選択します。
- [バージョンの選択 (Select Version)] フィルタを使用して、配備する製品バージョンのライセンスキーオプションのリストを表示します。
- 表のライセンスキーオプションを選択し、必要な情報を指定して [生成 (Generate)] を選択します。
- [ファイルのダウンロード (Download File)] を選択して、新しいライセンスをコンピュータに保存します。

メモ: ライセンスファイルをダウンロードする方法について詳しくは、次を参照してください。https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100048764

- 3 データベース事前チェックツールを実行して、ご使用の環境で、新しい NetBackup データベースへの変換の準備が整っていることを確認します。このツールについて詳しくは、次を参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100055151

- 4 (該当する場合) Linux で、NetBackup データベースファイルが btrfs ファイルシステムに存在する場合、アップグレードの前に、サポートされているファイルシステム (ext4 または xfs など) にデータベースファイルを移動します。btrfs ファイルシステムに NetBackup データベースを配置することはサポートされていません。データベースファイルは、プライマリサーバーのディレクトリ /usr/openv/db に存在します。

Linux で NetBackup データベースファイルを移動するには:

- カタログバックアップを実行します。

- すべての NetBackup デーモンを停止します。

```
/usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all
```

- NetBackup データベースサーバーの起動

```
/usr/openv/netbackup/bin/nbdbms_start_stop start
```

- /usr/openv/db/bin/nbdb_move -data data_directory -index index_directory -tlog log_directory

ミラー化されたトランザクションログを使用する場合、次のコマンドを使用します。

```
/usr/openv/db/bin/nbdb_move -data data_directory -index index_directory -tlog log_directory -mlog log_mirror_directory
```

- すべての NetBackup デーモンを起動します。

```
/usr/openv/netbackup/bin/bp.start_all
```

- カタログバックアップを実行します。

- 5 (該当する場合) Windows の場合は、すべてのオペレーティングシステムの更新プログラムとセキュリティ更新プログラムを適用してください。詳細情報を参照できます。

[p.38 の「NetBackup 11.0 以降のアップグレードに関する Windows コンパイラとセキュリティの要件」](#) を参照してください。

- 6 (該当する場合) Windows では、NetBackup のインストールディレクトリに多数のファイルが含まれる場合、アップグレード時間が長くなる場合があります。詳細情報を参照できます。

[p.13 の「インストールディレクトリに多数のファイルが存在する場合、Windows プライマリサーバーのアップグレード速度が低下する」](#) を参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100060329

- 7 NetBackup の各自の環境に応じて通常実行するアップグレード前のタスクを実行します。次に例を示します。

- ウイルス対策ソフトウェアを無効にします。
ウイルス対策ソフトウェアを無効にできない場合、ウイルススキャンイベントから NetBackup ファイルとフォルダを除外します。NetBackup ファイルとフォルダの除外について詳細をご覧いただけます。
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100004864
 - すべてのカスタマイズされたスクリプトやサードパーティのスクリプトを停止します。
 - クラスタ固有のタスクを実行します。
 - ホットカタログバックアップを実行します。
 - すべてのストレージライフサイクルポリシー (SLP) を無効にします。
 - NetBackup のすべてのポリシーを無効にします。
 - NetBackup 7.5.x より前のすべての環境ですべてのディスクステージングストレージユニットを無効にします。
 - VMware と RHV (Red Hat Virtualization) 環境では、アップグレードする前にジョブデータベースのサイズを削減します。アップグレード後に、資産レベルでのアクセス制御を可能にするため、既存の VMware ジョブと RHV ジョブに資産の名前空間が割り当てられます。この処理には時間がかかる場合があります。このプロセスに関する詳細情報を参照できます。
p.29 の「**アップグレード前のジョブデータベースのサイズの削減**」を参照してください。
 - クラスタシステムの場合のみ、次の NetBackup リソースをオフラインにします。
 - Windows Server Failover Clusters (WSFC): ディスク、仮想名、仮想 IP アドレスを除くすべての NetBackup グループのリソースをオフラインにします。クラスタアドミニストレータインターフェースを使用して NetBackup グループのリソースをオフラインにする方法については、Microsoft のクラスタアドミニストレータに関するマニュアルを参照してください。
 - Veritas Cluster Server (VCS) クラスタ: NetBackup リソースをオフラインにします。
次のコマンドで NetBackup オプションを使用して -persist グループを固定します。

```
hagrp -freeze NetBackup_service_group -persistent
```

これらのリソースをオフラインで取得するコマンドについて詳しくは、『NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド』を参照してください。
- 8 (該当する場合) NetApp クラスタをノードスコープモードから Vserver モードに変更する場合は、各ファイラの詳しいイメージレポートを作成します。このレポートは bpimagedlist コマンドを使って生成できます。次に利用可能なオプションの一例を挙げます。環境に合わせて必要なオプションを使います。**

```
bpimagedlist -client ndmp_host_name
```

- 9 NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Tomcat Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウント要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。詳細情報を参照できます。

p.142 の「[NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成](#)」を参照してください。

メモ: ベリタスは、NetBackup Web サービスに使用するユーザー アカウントの詳細を保存することを推奨します。プライマリサーバーのリカバリでは、NetBackup カタログのバックアップが作成されたときに使用されたものと同じ NetBackup Web サービスのユーザー アカウントとクレデンシャルが必要です。

メモ: セキュアモードで NetBackup PBX を実行する場合は、Web サービスユーザーを PBX の権限を持つユーザーとして追加します。PBX モードの判別と、正しくユーザーを追加する方法について詳しくは、次をご覧ください。

<http://www.veritas.com/docs/000115774>

- 10 (該当する場合) Tomcat Web サーバーの設定をカスタマイズした場合は、それらの設定がアップグレード後も維持されるかどうかを確認します。詳細情報を参照できます。

p.187 の「[維持される Java Virtual Machine のオプション](#)」を参照してください。

- 11 NetBackup とやり取りするシステムのすべてのアプリケーションを停止します。この手順には、バックアップ中のデータベースまたはシステムコンポーネントが含まれます。これらのアプリケーションの停止に失敗すると、予期しない動作が発生する可能性があります。観測される動作には中止されたアップグレードやアプリケーションエラーが含まれます。

Oracle ユーザーの場合は、バックアップが実行されていないことを確認します。NetBackup をインストールする前に、RMAN のプロセスを停止します。AIX を使用する場合、RMAN プロセスを停止した後、root ユーザーとして /usr/bin/slibclean を実行する必要があります。

Oracle データベースを停止できない場合、手順は Oracle データベースがアクティブのままで NetBackup をインストールできる手順を利用できます。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

<http://www.veritas.com/docs/TECH158276>

- 12 NetBackup のすべてのサービスを停止します。

- UNIX システムの場合: /usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all
- Windows システムの場合: `install_path\NetBackup\bin\bpdown -f`

プレインストール手順は完了です。ご使用のプラットフォームに従って、NetBackup のバイナリのアップグレードに進みます。このトピックについて詳しくは、以下のページを参照してください。

- p.49 の「[Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する](#)」を参照してください。
- p.61 の「[Windows システムでのサイレントアップグレードの実行](#)」を参照してください。
- p.66 の「[NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード](#)」を参照してください。

Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する

ローカルコンピュータ、リモートコンピュータ、クラスタコンピュータで NetBackup 11.0 にアップグレードするには次の手順を実行します。

Windows でローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーの NetBackup バイナリをアップグレードする方法

- 1** NetBackup のアップグレードを開始するシステムにログオンします。管理者権限でログオンしてください。
 - ローカルの Windows システムをアップグレードする場合は、コンソールでコンピュータに直接ログオンします。
 - リモートの Windows システムをアップグレードする場合は、NetBackup をインストールするホストすべてにネットワークアクセスが可能なシステムにログオンします。
 - クラスタの Windows システムをアップグレードする場合は、アクティブノード（共有ディスクが存在するノード）にログオンします。
- 2** ESD イメージ（ダウンロード済みファイル）が保存されているディレクトリに移動して、`Browser.exe` を実行して NetBackup インストールウィザードを起動します。
- 3** ブラウザの初期画面（[Home]）で、[Install/Upgrade] をクリックします。
- 4** [Install/Upgrade] 画面で、[NetBackup Server Software Install/Upgrade] をクリックします。

- 5 必要な Visual C++ ランタイムライブラリがないことを通知するメッセージが表示されたら、情報を確認して対応します。詳細情報を参照できます。
p.38 の「[NetBackup 11.0 以降のアップグレードに関する Windows コンパイラとセキュリティの要件](#)」を参照してください。
- 6 [Welcome]画面で内容を確認して[Next]をクリックします。
- 7 (該当する場合) 以前にこのホストに NetBackup 11.0 をインストールしている場合、[Program Maintenance]ダイアログが表示されます。
 - [Modify]を選択してローカルホストのインストール設定を変更するか、ローカルホストをリモートホストへのプッシュインストールを実行するためのプラットフォームとして使用します。
 - [Repair]を選択して、NetBackup 11.0 をローカルホストで元の状態にリストアします。
 - NetBackup 11.0 をローカルホストから削除するには、[Remove]を選択します。
- 8 [License Agreement]画面で、次の操作を行います。
 - [*I agree to and accept the terms of the license agreement*]にチェックマークを付けます。
ソフトウェアをアップグレードするにはこの項目を選択する必要があります。
 - [Next]をクリックします。

9 [NetBackup Install/Upgrade Type]画面で、次の情報を指定します。

Where to install	ローカルアップグレードの場合は、[Upgrade this computer only]を選択します。 リモートアップグレードの場合は、[Install or upgrade one or more computers on your network]を選択します。 クラスタアップグレードの場合は、[Upgrade a clustered primary server]が唯一のオプションです。
Typical	デフォルト設定で NetBackup をアップグレードするには、このオプションを選択します。 プライマリサーバーのみ: デフォルトでは、標準オプションはプライマリサーバーの構成を確認し、NetBackup 管理コンソールが現在存在する場合は管理コンソールのアップグレードのみを実行します。現在のプライマリサーバーの状態以外の状態を強制する場合は、[Custom]を選択します。 NetBackup 管理コンソールを除外することを選択した場合は、以前のすべてのバージョンが削除されます。 メディアサーバーのみ: デフォルトでは[Typical]オプションはメディアサーバーの構成を調べ、Java GUI と JRE パッケージが存在している場合のみアップグレードします。現在のメディアサーバーの状態以外の状態を強制的に実行する場合は、[Custom]を選択します。Java GUI と JRE を除外することを選択した場合は、以前のすべてのバージョンが削除されます。
Custom	NetBackup のデフォルト設定を強制変更するには、このオプションを選択します。

[Next]をクリックします。

10 [NetBackup Server Role and Licenses]画面で、次の情報を入力します。

■ ライセンス

NetBackup 8.1.2より前のバージョンからのアップグレードでは、VEMS (Veritas Entitlement Management System) または評価用ライセンスからダウンロードした本番用ライセンスのみがサポートされます。8.1.2より前のバージョンから NetBackup をアップグレードする場合は、一時的な本番用ライセンスを使用できません。

NetBackup 8.1.2 以降から NetBackup 10.3 以降のリリースにアップグレードする場合は、VEMS からライセンスファイルをダウンロードするか、一時的な本番用ライセンスを使用する必要があります。ライセンスはプライマリサーバーでのみ必要です。詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

メモ: リモートアップグレードの場合は、ここに入力したライセンスが他のノードにプッシュ型で転送されます。ライセンスによってアドオン製品を使用できるようになります。アドオン製品がすでにインストールされているノードに **NetBackup** をプッシュインストールした場合、ライセンスはアドオン製品に対して機能します。

リモートアップグレードまたはクラスタアップグレードの場合は、アップグレード処理中にアップグレードを実行する適切なクレデンシャルを所有していることを検証するために次の処理が実行されます。

- アップグレード先のクラスタシステムを選択すると、**NetBackup** はクラスタのすべてのノードに対する適切な管理クレデンシャルを所有しているかどうかを確認します。適切なクレデンシャルを所有していない場合は、そのシステムはリストに追加されません。
- 適切なクレデンシャルを持っている場合は、そのノードをアップグレードするために有効なライセンスを入力する必要があります。

10.3 より前のリリースから 10.3 以降のリリースへのアップグレードで、ライセンスが提供されていない場合、**NetBackup** は組み込みの一時的な本番用ライセンスを使用します。詳しくは、

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

10.3 以降のリリースからのアップグレードの場合、ライセンスが無効または期限切れである場合、リモートまたはクラスタ化された Windows インストールの事前チェックは失敗します。そのノードの **NetBackup** バージョンは変更されず、**NetBackup** は引き続き機能します。アップグレードを正常に行うには、有効なライセンスを入力する必要があります。

ネットワーク内の複数のコンピュータへのプッシュインストールで、リモートコンピュータに有効なライセンスがない場合、事前チェックでアップグレードが失敗します。そのノードの **NetBackup** はアップグレードされませんが、引き続き機能します。

クラスタ化されたプライマリサーバーの場合、ライセンスはアクティブノードにのみアクセス可能な共有ディスクに格納されます。したがって、ライセンスは非アクティブノードにプッシュされません。

- [NetBackup Primary Server]を選択し、ライセンスを参照して追加し、[Next]を選択してプライマリサーバーソフトウェアのアップグレードに進みます。ライセンスについて詳しくは、
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。
- [NetBackup Media Server]を選択し、[Next]を選択してメディアサーバーソフトウェアのアップグレードを続行します。メディアサーバーのアップグレードにライセンスは必要ありません。

- 11** (該当する場合)リモートアップグレードでは、[FIPS Compliance in NetBackup]ダイアログが表示されます。

NetBackup では、アップグレード中の FIPS モードの変更はサポートされていません。既存の NetBackup のバージョンで FIPS がサポートされている場合は、アップグレードの前に FIPS モードを有効にします。それ以外の場合は、アップグレード後に有効にします。

Windows のリモートアップグレード中に FIPS モードを有効または無効にしても、リモートホストの NetBackup の構成で既存の FIPS モード値が変更されることはありません。

FIPS について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

- 12** この手順は[Custom]アップグレードにのみ適用されます。[Typical]アップグレードの場合は、次の手順へスキップします。

この手順では、[NetBackup Features]、[NetBackup Port Numbers]、および [NetBackup Services]を選択し構成する方法について記述します。

- **Java GUI オプション**

(該当する場合: プライマリサーバーのみ) アップグレードの内容に応じて、次のオプションが表示されます。

- [Include Java GUI]: 指定したコンピュータで NetBackup 管理コンソールをインストールまたはアップグレードします。
- [Exclude Java GUI]: 指定したコンピュータから NetBackup 管理コンソールを除外します。NetBackup 管理コンソールの既存のバージョンは削除されます。
- [Match Existing Configuration]: NetBackup 管理コンソールの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在する場合、コンポーネントはアップグレードされます。アップグレード前のシステムに NetBackup 管理コンソールが存在しない場合、管理コンソールはインストールされません。

- **Java GUI および JRE オプション**

(該当する場合: メディアサーバーのみ) アップグレードの内容に応じて、次のオプションが表示されます。

- [Include Java GUI and JRE]: 指定したコンピュータで NetBackup 管理コンソールと JRE をインストールまたはアップグレードします。
- [Exclude Java GUI and JRE]: 指定したコンピュータから NetBackup 管理コンソールと JRE コンポーネントを除外します。既存の NetBackup 管理コンソールおよび JRE コンポーネントがすべて削除されます。

- [Match Existing Configuration]: NetBackup 管理コンソールと JRE コンポーネントの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在する場合、コンポーネントはアップグレードされます。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在しない場合、コンポーネントはインストールされません。
- NetBackup Port Numbers
構成に必要な場合は、この画面からポート番号を変更できます。
NetBackup と他社製品が同じポートを共有しようとして競合が発生した場合、ポート番号の変更が必要になることがあります。また、ファイアウォールでセキュリティの問題を引き起こすポートの競合が発生している場合にも変更できます。ポート番号を変更するには、置き換えるポート番号を選択し、新しい番号を入力します。
[Next] をクリックします。
- NetBackup Services
この画面で、次の NetBackup サービスの起動アカウントおよび起動の種類を指定します。

Privileged Account Details

[Local System account] または [Custom account] を指定します。

デフォルトでは、[Local System account] が選択されるので、NetBackup は組み込みシステムアカウントを使います。このオプションを選択すると、その下のフィールドは無効になります。

異なるシステムアカウントを指定する方法

- [Custom account] を選択します。
- 次のフィールドにアカウント情報を入力します。
 - Domain
 - Username
 - Password

Non-Privileged Account Details

先ほど指定した特権アカウントと同じアカウントまたはローカルサービスアカウントを指定します。

ローカルサービスアカウントを使用する場合、1 回限りの変換を行う必要があります。この変換により、カタログサイズに応じてアップグレード時間が大幅に増加する場合があります。

特権のないサービスユーザー アカウントについて詳しくは、次を参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100048220>

この情報は、プライマリサーバーのアップグレードにのみ適用されます。

Startup Type

このオプションは、NetBackup ホストを再起動する必要がある場合、NetBackup サービスが自動的に開始するかどうかを判断します。デフォルトは [Automatic] です。

再起動後、NetBackup サービスを手動で開始するには、[Manual] を選択します。

Start job-related NetBackup services after completion	デフォルトでは、アップグレードが完了したらジョブに関連するサービスを自動的に開始する設定になっています。 ジョブに関連するサービスが自動的に開始しないようにするには、ボックスをクリックしてチェックマークをはずします。
Safe Abort Option	このオプションは、アップグレードの一環として再起動が必要な場合にアップグレードを続行する方法を決めます。 このオプションを選択すると、アップグレード処理で再起動が必要であると判断された場合にアップグレードは停止します。システムは元の状態にロールバックされます。 このオプションを選択しないと、アップグレード処理で再起動が必要であると判断されてもアップグレードは続行されます。

[Next]をクリックします。

13 [NetBackup Web Services]画面で、[Web Services Password]を入力します。

これは、NetBackup Web サービスのユーザー アカウントのパスワードです。このアカウントは、プライマリサーバーをインストールする前に作成する必要があります。詳細情報を参照できます。

[NetBackup Web Services]画面で、アカウントの種類とアカウントの詳細を指定します。

What types of accounts should we use?	[Local]または[Domain (Active Directory)]を選択します。 Web サーバーを、ローカルホストに存在するユーザーおよびグループアカウントに関連付ける場合は[Local]を選択します。 Web サーバーを、信頼済みの Windows ドメインに存在するユーザーおよびグループアカウントに関連付ける場合は[Domain (Active Directory)]を選択します。
---------------------------------------	---

What are the existing account details? 次に示すように、情報を指定します。

- [Domain]: アカウントの種類の選択を[Domain (Active Directory)]にする場合は、ユーザーおよびグループアカウントが属するドメインの名前を指定します。
- [Group]: Web サーバーに関連付けるグループアカウントの名前を指定します。
- [User]: Web サーバーに関連付けるユーザー アカウントの名前を指定します。セキュリティ上の理由により、ホストの管理者権限を持つユーザー アカウントを指定しないでください。
- [Password]: [User] フィールドで指定されたユーザー アカウントのパスワードを指定します。

詳細情報を参照できます。

p.200 の「[Windows および Windows クラスタのアップグレード要件](#)」を参照してください。

- 14** (該当する場合: メディアサーバーのみ) 環境で外部認証局を使用している場合、[External Certificate]画面が表示されます。[External Certificate]画面で、外部認証局 (ECA) を構成する方法に基づいて、3 つのラジオボタンのいずれかを選択します。選択した方法に応じて、異なる情報を入力する必要があります。

- [Use Windows certificate store]

証明書の場所は、*Certificate Store Name*¥*Issuer Distinguished Name*¥*Subject Distinguished Name* のように入力する必要があります。

メモ: 証明書ストアを指定するときは、任意の名前に対して \$hostname 変数を使用できます。実行時に \$hostname 変数はローカルホストの名前を評価します。このオプションを使用すると、NetBackup ソフトウェアを多数のクライアントにプッシュインストールするときに柔軟性が高まります。

あるいは、Windows 証明書の場所をカンマ区切りのリストで指定できます。たとえば、MyCertStore¥IssuerName1¥SubjectName, MyCertStore¥IssuerName2¥SubjectName2, MyCertStore4¥IssuerName1¥SubjectName5 のように指定できます。次に、表示されるラジオボタンから、証明書失効リスト(CRL)オプションを選択します。

- [Use the CRL defined in the certificate]: 追加の情報は不要です。
- [Use the CRL at the following path]: CRL のパスを入力するように求められます。
- [Do not use a CRL]
- [Use certificate from a file]

このオプションを選択した後、次を指定します。

 - [Certificate file]: このフィールドには、証明書ファイルへのパスと証明書のファイル名を指定する必要があります。
 - [Trust store location]: このフィールドには、トラストストアへのパスとトラストストア名を指定する必要があります。
 - [Private key path]: このフィールドには、秘密鍵ファイルへのパスと秘密鍵のファイル名を指定する必要があります。
 - [Passphrase file]: このフィールドでは、パスフレーズファイルへのパスとパスフレーズのファイル名を指定する必要があります。このフィールドは必要に応じて指定します。

- [CRL option]: お使いの環境の正しい CRL オプションを指定します。
 - [Use the CRL defined in the certificate]: 追加の情報は不要です。
 - [Use the CRL at the following path]: CRL のパスを入力するよう求められます。
 - [Do not use a CRL]
- [Proceed without security]
潜在的な問題を一覧表示する警告メッセージが表示されます。現在のセキュリティ構成の状態に応じて、外部 CA 証明書が構成されるまで、NetBackup がバックアップやリストアを実行できない場合があります。

[Next]をクリックして続行します。

15 リモートアップグレードの場合のみ、[NetBackup Remote Hosts]画面で NetBackup をインストールするホストを指定します。

- Windows Destination Systems
[Windows Destination Computers]を右クリックし、ドロップダウンメニューから選択するか、次の方を使ってください。

Browse

NetBackup をアップグレードするホストのネットワークを検索するには、ここをクリックします。

- [Available Systems] ダイアログボックスで追加するコンピュータを選択し、[Next] をクリックします。
 - [Remote Computer Login Credentials] ダイアログボックスで、リモートコンピュータで使う **NetBackup** のアカウントのユーザー名、パスワード、ドメインを入力します。
 - 複数のリモートコンピュータをアップグレードする場合は、[Remember User Name and Password] の隣にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。このオプションを選択すると、各リモートコンピュータにこの情報を入力する必要がなくなります。
- クレデンシャルを指定したらホストノードを選択し、[Windows Destination Systems] リストに追加します。**NetBackup** のリモートアップグレードは、これらのノードで実行されます。インストール先のシステムを選択する場合、ローカルホストも忘れずに選択してください。
- NetBackup** では、システムを選択するたびに、システムの確認が実行されます。たとえば、次のようにサーバーアップグレード先のシステムが選択した種類と一致するかどうかが確認されます。
- **NetBackup** がインストールされていない場合: リモートは検証済みと見なされます。
 - **NetBackup** がすでにインストールされている場合: そのシステムのアップグレードの種類と要求しているアップグレードの種類を比較します。
 - 無効な組み合わせの場合: 問題があることが通知され、そのシステムは選択できません。無効な組み合わせの例として、すでにプライマリサーバーになっているリモートシステムにリモート管理コンソールをインストールしようとしている場合があります。
 - リモートシステムがサポート外のプラットフォームやレベルの場合: 問題が通知され、そのシステムは選択できません。

アップグレード手順で、リモートシステムに対する適切な管理クレデンシャルを所有しているかどうかを検証されます。管理クレデンシャルを所有していない場合は、[Enter Network Password] 画面が表示され、管理者のユーザー名およびパスワードの入力を求められます。

[OK] をクリックし、インストール先のシステムの選択を続けます。

選択するノードごとに、この処理を繰り返します。ユーザー名およびパスワードは保持することができます。その場合、ユーザー名またはパスワードが無効な場合にのみ、そのユーザー名またはパスワードが求められるようになります。

次に、クラスタ環境でのプッシュインストールに関する注意事項を示します。

- **NetBackup** は、複数のノードでアップグレードできます。ただし、クラスタのノード数に対する制限は、**NetBackup** ではなくクラスタサービスによって設定されます。
- 言語パッケージとその他の **NetBackup** のアドオン製品は、プッシュ方式ではアップグレードできません。アドオン製品は、クラスタグループのノードごとにアップグレードする必要があります。これらの製品のアップグレード方法については、各製品の **NetBackup** マニュアルを参照してください。
- **NetBackup** は、アップグレードの開始時に入力したライセンスのみを他のノードにプッシュ型で転送します。ライセンスによってアドオン製品を使用できるようになります。アドオン製品がすでにインストールされているノードに **NetBackup** をプッシュすると、ライセンスはその製品に対して機能します。
- [OK] をクリックします。

Import

ホスト名のリストを含んでいるテキストファイルをインポートするためにここをクリックします。テキストファイルを作成する場合、ホスト名は次の形式で定義する必要があります。

Domain\ComputerName

Add

ホストを手動で追加するためにここをクリックします。

- [Manual Remote Computer Selection]ダイアログボックスが表示されたら、[Domain]と[Computer Name]を入力し、[OK]をクリックします。
- [Remote Computer Login Credentials]ダイアログボックスで、リモートコンピュータでアップグレードを実行するために使うアカウントの[User Name]と[Password]を入力します。
複数のリモートコンピュータに追加、アップグレードする場合は、[Remember User Name and Password]の隣にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。このオプションを選択すると、各リモートコンピュータにこの情報を入力する必要がなくなります。
- [OK]をクリックします。

Remove

[Destination Systems]リストからホストを削除するには、ホストを選択し、ここをクリックします。

Change

選択したリモートホストの NetBackup ファイルのインストールの宛先を変更するためにここをクリックします。

- [Next]をクリックします。

- 16** クラスタアップグレードの場合のみ、[Cluster Settings]画面に表示される情報を確認します。単なる情報として[Public Network]以外のすべての情報が表示されます。パブリックネットワークを変更する必要がある場合は、ドロップダウンリストから正しいパブリックネットワークを選択します。

警告: このクラスタに割り当てられているプライベートネットワークは選択しないでください。

[Cluster Configuration]をクリックします。クラスタ構成が正常に行われたことを示すメッセージが表示されたら、[Next]をクリックします。

- 17** (該当する場合: プライマリサーバーのみ) カタログのサイズによっては、無制限の保持変換を続行するように求められることがあります。

9.0 より前の NetBackup から NetBackup 9.0 以降へのアップグレードには、無制限の有効期限変換が含まれます。この変換は、2038 年より先の有効期限をサポートします。この変換によって、アップグレードを完了するために必要な時間が長くなる場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100048600

- 18 [Ready to Upgrade]画面で、前の手順で選択した内容を示す[Upgrade Summary]を確認します。

ECA 健全性チェックユーティリティで CSP (暗号サービスプロバイダ) または KSP (キーストレージプロバイダ) がセキュリティ記述子をサポートしていないことが示された場合、アップグレードは続行できません。

このフラグは、NetBackup サービスがローカルサービスユーザー アカウントのコンテキストで実行されている場合、プロバイダを使用できないことを示します。セキュリティ記述子をサポートしているプロバイダを使用するか、管理者アカウントを使用してすべての NetBackup サービスを実行してください。

サービスユーザー アカウントについて詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』の「NetBackup サービスがローカルサービスアカウントのコンテキストで実行されている場合の Windows 証明書ストアの制限事項」の情報を参照してください。

- 19 次のオプションのいずれかを選択します。

- [Upgrade]をクリックして、アップグレードを開始します。
- [Back]をクリックして前の画面で必要な変更を加えたら、この画面に戻って [Upgrade]をクリックします。
- アップグレードを中止するには、[Cancel]をクリックします。

[Upgrade]をクリックするとアップグレード処理が開始され、アップグレードの進捗状況を示す画面が表示されます。この処理には数分かかる場合があります。

リモートアップグレードまたはクラスタアップグレードの場合のみ、ダイアログボックスでシステムを右クリックしてアップグレードの状態を確認します。アップグレードは 5 つまで並行して行われます。1 つのアップグレードが完了すると別のアップグレードが開始し、最大 5 つのアップグレードが進行中になります。

- 20 リモートアップグレードの場合のみ、すべてのリモートアップグレードが完了したら [Finish]をクリックします。

- 21 [Upgrade Complete]画面で、次のオプションから選択します。

View the log file

アップグレードログファイルには、詳しいインストール情報とエラーが発生したかどうかが表示されます。このログには、**NetBackup** 管理コンソール（プライマリサーバーとメディアサーバー）と**JRE**（メディアサーバー）のオプションインストールについての情報が含まれます。

次の場所にあるアップグレードログを確認します。

```
%ALLUSERSPROFILE%¥Cohesity¥NetBackup¥InstallLogs¥
```

メモ: 複数のコンピュータにリモートアップグレードを実行する場合は、このオプションを選択するとローカルコンピュータのログのみが表示されます。アップグレードするように選択した各コンピュータにそれぞれのアップグレードログファイルが作成されます。リモートコンピュータのログファイルを表示するためには、**Windows** エクスプローラのウィンドウを開き、
¥¥<COMPUTERNAME> と入力します。

アップグレードログを検索し、次のエラーが表示されているかどうかを確認します。

- Return Value 3 を含む文字列。
- 次のように色分けされている重大なログメッセージ:
黄色 = 警告。
赤 = エラー。

Finish

次のいずれかを選択してアップグレードを完了します。

- すべてのサーバーのソフトウェアをアップグレードしたら、[Launch NetBackup Web UI now] の横にあるチェックボックスにチェックマークを付けて [Finish] をクリックします。
NetBackup 管理コンソールによって構成ウィザードが起動し、**NetBackup** 環境を構成できるようになります。
- アップグレードするサーバーソフトウェアが他にも存在する場合は、[Finish] をクリックします。
次のコンピュータに移動して、必要なサーバーソフトウェアをアップグレードできます。

22 **NetBackup** クラスタ設定を手動で修正した場合や外部スクリプトで修正した場合は、**NetBackup** クラスタレジストリに変更が正しく反映されていることを確認してください。
質問がある場合は、**Cohesity** のテクニカルサポートにお問い合わせください。

23 バイナリが正常にインストールされました。インストール後の手順に進みます。

詳細情報を参照できます。

[p.80 の「NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順」](#) を参照してください。

Windows システムでのサイレントアップグレードの実行

サイレントアップグレードを実行すると、リモートアップグレードを実行する場合と同様に、対話形式での入力が不要になります。**NetBackup** サービスをローカルシステムではなく特定のユーザーで実行する場合、**NetBackup** のサイレントインストールはサポートされません。

サイレントアップグレードを実行するには、最初に該当する **NetBackup** スクリプトを修正する必要があります。スクリプトの修正後に、そのスクリプトを実行してサイレントアップグレードを開始できます。

このスクリプトはアップグレードを開始できるようにすべての **NetBackup** サービスを終了します。他のシステムプロセスで **NetBackup** ファイルに対するハンドルが保持されていることをスクリプトが検出すると、アップグレードは失敗します。実行中の **NetBackup** プロセスを特定するには、次の場所にある **NetBackup Install** ログファイルを確認します。

```
%ALLUSERSPROFILE%\Veritas\NetBackup\InstallLogs
```

特定した各プロセスを手動で停止したら、再びアップグレードスクリプトを実行できます。

メモ: Windows 2012/2012 R2/2016 Server Core システムでは、この手順で **NetBackup** のみをアップグレードできます。

NetBackup サーバーソフトウェアをサイレントアップグレードする方法

- 1** **NetBackup** をアップグレードするシステムに管理者としてログオンします。
- 2** ESD イメージ (ダウンロード済みファイル) が存在する場所に移動します。
- 3** Windows エクスプローラを開き、x64 ディレクトリの内容を、ハードドライブの一時ディレクトリにコピーします。インストールしたいプラットフォームの形式と関連付けられたディレクトリを選択します。
- 4** ソースファイルが読み取り専用であるので、コピーされたファイルの権限を変更して、インストールまたは更新できるようにします。
- 5** コピーされたファイルが存在する一時ディレクトリで、変更する適切なスクリプトを選択します。
 - プライマリサーバーをアップグレードするには、`silentprimary.cmd` を編集します。
 - メディアサーバーのアップグレード時: `silentmedia.cmd`
- 6** 次の行をインストールの必要に応じて編集します。
 - `SET ADDITIONALSERVERS=media1,media2,media3`

このホストと通信する追加の **NetBackup** プライマリサーバーおよびメディアサーバーの名前を入力します。後で **NetBackup** をインストールするサーバーの名前を含めます。

他のサーバーがこのホストと通信しない場合は、スクリプトからこの行を削除します。

 - `SET ABORT_REBOOT_INSTALL=0`

この行では、再起動が必要になった場合のアップグレードの続行方法を指定できます。次の設定から選択します。

0 (デフォルト) デフォルトでは、再起動が必要であると判断された場合でもサイレントアップグレードは中止されません。この設定を 0 のままにした場合、次のタスクの 1 つを選択します。

- アップグレードの完了後にインストールログを調べて再起動が必要かどうかを確認します。
文字列 `in use` がログ内に表示されれば、システムを手動で再起動する必要があります。
- アップグレードの完了後に自動再起動を強制します。
自動再起動を強制するには、スクリプトを実行する前に、サイレントインストールのコマンドスクリプト (`silent*.cmd`) から次のオプションを削除します。

```
REBOOT="ReallySuppress"
```

警告: 強制再起動はユーザーに警告なしで起きます。アップグレードは取り消されず、システムが元の状態にロールバックされることもありません。

1 再起動が必要であると判断された場合にアップグレードを中止するにはこの設定を選択します。

この設定を選択すると、再起動が必要な場合はアップグレードが取り消されてシステムが元の状態にロールバックされます。

- `SET LICENSE=TEMP_PRODUCTION | license_file_path | EVALUATION`
NetBackup 8.1.2 より前のバージョンからのアップグレードでは、**VEMS** または評価用ライセンスからダウンロードした本番用ライセンスのみがサポートされます。**8.1.2** より前のバージョンから **NetBackup** をアップグレードする場合は、一時的な本番用ライセンスを使用できません。
VEMS からまだライセンスをダウンロードしていない場合は、`TEMP_PRODUCTION` を使用できます。詳しくは、
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

- `SET ALLOW_PRE_90_UPGRADE=value`
このフィールドはプライマリサーバー専用です。この値は、**9.0** より前のリリースの **NetBackup** からのアップグレードを続行できるかどうかを判定します。アップグレードの続行を許可する場合は 1 を指定します。アップグレードには、無制限の有効期限変換プロセスが含まれます。0 を指定すると、プライマリサーバーをアップグレードできません。

NetBackup 9.0 以降のバージョンでは、**2038** 年より先の有効期限がサポートされています。**NetBackup** の以前のバージョンとの互換性を確保するために、無

制限の有効期限が設定されたすべての項目は、新しい無制限の有効期限の値を反映するように更新されます。この変換によって、アップグレードを完了するために必要な時間が長くなる場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100048600

■ SET ECA_CERT_STORE=*cert_store_string*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、Windows 証明書ストアの外部証明書の場所を指定します。このフィールドは、「*store_name\issuer_DN\subject*」という形式で指定します。このフィールドは、Windows 証明書ストアから外部証明書を使用する場合に必要です。

■ SET ECA_CERT_PATH=*path*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、外部証明書ファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_TRUST_STORE_PATH=*path*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、トラストストアの場所を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_PRIVATE_KEY_PATH=*path*

このフィールドを使用して、秘密鍵を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_CRL_CHECK_LEVEL=*value*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、CRL モードを指定します。このフィールドは必須です。サポートされる値は次のとおりです。

■ USE_CDP: 証明書に定義されている CRL を使用します。

■ USE_PATH: ECA_CRL_PATH で指定されたパスにある CRL を使用します。

■ DISABLED: CRL を使用しません。

■ SET ECA_CRL_PATH=*path*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、外部 CA 証明書に関連付けられている CRL のパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ECA_CRL_CHECK_LEVEL が USE_PATH に設定されている場合にのみ必要です。該当しない場合は、このフィールドを空のままにします。

■ SET ECA_KEY_PASSPHRASEFILE=*path*

このフィールドは、メディアサーバーのみに表示されます。このフィールドを使用して、キーストアにアクセスするためのパスフレーズを含むファイルのパスとファイル名を指定します。

ル名を指定します。このフィールドは省略可能で、ファイルから外部証明書を設定する場合にのみ適用されます。

- **SET INCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY=value**
(該当する場合: プライマリサーバーのみ) Java GUI のインストールは、NetBackup Windows プライマリサーバーのインストールでは省略可能です。このオプションは、Java GUI をインストール、アップグレード、または削除するかどうかを指定します。このオプションでサポートされる値は、次のとおりです。
 - **INCLUDE:** NetBackup をインストールまたはアップグレードする際に Java GUI を含めます。
 - **EXCLUDE:** NetBackup をインストールまたはアップグレードする際に Java GUI を除外します。NetBackup 管理コンソールの既存のバージョンは削除されます。
 - **MATCH:** ホスト上の既存の構成を照合します。Java GUI がすでにあるホストは最新バージョンに更新されます。Java GUI は他のすべてのホストで除外されます。
 - **SET INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE=value**
(該当する場合: メディアサーバーのみ) NetBackup Windows メディアサーバーのインストールでは、NetBackup Java GUI と JRE パッケージのインストールは省略可能です。このオプションは、Java GUI および JRE パッケージをインストール、アップグレード、または削除するかどうかを指定します。このオプションでサポートされる値は、次のとおりです。
 - **INCLUDE:** NetBackup をインストールまたはアップグレードする際に Java GUI と JRE を含めます。
 - **EXCLUDE:** NetBackup をインストールまたはアップグレードする際に Java GUI と JRE を除外します。既存の NetBackup Java GUI および JRE パッケージがすべて削除されます。
 - **MATCH:** ホスト上の既存の構成を照合します。Java GUI および JRE コンポーネントがすでにあるホストは最新バージョンに更新されます。コンポーネントは他のすべてのホストについて除外されます。
 - **INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR=value**
このフィールドを使用して、NetBackup IT Analytics Data Collector のインストール動作を指定します。デフォルト値は 1 で、この場合は NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされます。NetBackup IT Analytics Data Collector をインストールしない場合は 0 を指定します。

7 スクリプトを保存して実行します。

8 次の場所にあるインストールログを確認します。

```
%ALLUSERSPROFILE%¥Cohesity¥NetBackup¥InstallLogs¥
```

このログには、NetBackup 管理コンソール（プライマリサーバーとメディアサーバー）と JRE（メディアサーバー）のオプションインストールについての情報が含まれます。

インストールログを検索し、次のエラーが表示されているかどうかを確認します。

- Return Value 3 を含む文字列。
- 重要なログメッセージは次のように色分けされます。
 黄色 = 警告。
 赤 = エラー。

- 9** バイナリが正常にインストールされました。インストール後の手順に進みます。詳細情報を参照できます。

[p.80 の「NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順」を参照してください。](#)

NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード

バックアップが実行されない時間にアップグレードおよび再構成をスケジュールすることをお勧めします。ただし、アップグレードの手順では、バックアップがアップグレードの妨げにならないようにするために、すべてのポリシーを無効にするように指示されます。

NetBackup のアップグレードおよび再構成中にバックアップが実行されないようにポリシーを一時的に変更することもできます。

Linux サーバーソフトウェアを 11.0 にアップグレードするには

- 1** root ユーザーとしてサーバーにログインします。
- 2** NetBackup 管理コンソールが開いている場合は、ここで閉じる必要があります。
- 3** (該当する場合) クラスタ環境では次のタスクを実行します。

- 必要に応じて、`bp.conf` と `vm.conf` ファイルを次のように編集します。
 REQUIRED_INTERFACE エントリがある場合は、CLUSTER_NAME エントリに置換します。それ以外の場合は、新しい CLUSTER_NAME エントリを追加します。このエントリは仮想サーバー名として定義する必要があります。

プライマリサーバーの場合は、最初の SERVER エントリが `bp.conf` ファイルの CLUSTER_NAME エントリに一致することを確認してください。

- NetBackup サーバリソース (**ServerResource**) をオフラインにします。以下に示すコマンドを使います。

```
/opt/VRTSvcs/bin/hares -offline ServerResource -sys $nodename
```

- 非アクティブノードのアップグレード中に移行が行われないようにするために、NetBackup グループを凍結します。以下に示すコマンドを使います。

```
/opt/VRTSvcs/bin/hagrp -freeze group -persistent
```

- VCS クラスタが構成されている場合、Cluster Manager インターフェースまたはコマンドラインを使用して NetBackup グループを凍結できます。
 - クラスタのアップグレードに進む前に、他のクラスタアップグレード要件について『NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド』を参照してください。
<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>
- 4** アップグレードスクリプトを実行すると第1章で説明していない修正済み NetBackup スクリプトが削除されます。このトピックに関する詳細情報を参照できます。
- [p.28 の「アップグレードによるファイルの自動変更について」](#)を参照してください。
- 変更したファイルで、保持する必要があるファイルを保存します。
- 5** インストールイメージが存在する場所に移動します。次のコマンドを入力して、アップグレードスクリプトを開始します。
- ```
./install
```
- 6** インストールスクリプトのプロンプトに従って、NetBackup サーバーバイナリをインストールします。
- 7** (該当する場合: プライマリサーバーのみ) メッセージが表示されたら、ほとんどのデーモンを起動するために使用するサービスユーザー/アカウントの名前を指定します。このプロンプトは、インストーラが `bp.conf` ファイルからサービスユーザーの値を取得できない場合、またはサーバーユーザーが `root` の場合に表示されます。
- ```
Enter the name of the service user account to be used to start
most of the daemons
```
- 以下の点にご注意ください。
- サービスのユーザー名は 32 文字を超えることはできません。英語の文字のみを含めることができます。
 - `root` ユーザーをサービスユーザーとして使用しないことをお勧めします。
 - `nbwebsvc` ユーザーをサービスユーザーとして使用することはできません。
 - `nbwebgrp` グループはサービスユーザーのセカンダリグループである必要があります。
 - `/usr/openv` ディレクトリの所有権は、ここで指定する新しいサービスユーザー/アカウントに変更されます。
 - サービスアカウントを使用する場合、1 回限りの変換を行う必要があります。この変換により、カタログサイズに応じてアップグレード時間が大幅に増加する場合があります。
 - インストール後にサービスユーザー/アカウントを変更する場合は、`nbserviceusercmd --changeUser` コマンドを使用します。

サービスユーザー アカウントについて詳しくは、次を参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100048220>

- 8 (該当する場合: プライマリサーバーのみ) プロンプトが表示されたら、**root** 以外のデータベースユーザー名を指定します。このプロンプトは、サービスユーザーが **root** の場合にのみ表示されます。

```
ATTENTION! The NetBackup services currently use a root
system account, which is not recommended. NetBackup is unable to
use
this account for the new scale-out database server process.
Provide
an alternative account name that meets the following criteria:
- Root accounts are not allowed.
- The username must be 1-31 characters.
- The username must contain only English characters.
- The nbwebsvc user should not be used as the scale-out database
user.
```

- 9 (該当する場合) メッセージが表示されたら、NetBackup IT Analytics Data Collector に関する質問に答えます。プライマリサーバーがクラスタ化されている場合、この質問に対する応答は無視されます。クラスタに NetBackup IT Analytics Data Collector をインストールすることはできないためです。

```
NetBackup IT Analytics Data Collector is currently not installed
on
this host and can be optionally installed with NetBackup. Be aware
NetBackup IT Analytics Data Collector is currently not supported
for
clustered primary servers. It is excluded if this is a clustered
install no matter the response to the install Analytics Data
Collector question.
```

```
Do you want to install NetBackup IT Analytics Data Collector?
[y,n]
(y)
```

- 10** (該当する場合: プライマリサーバーのみ) メッセージが表示されたら、無制限の有効期限変換に関する質問に答えます。

NetBackup 9.0 and later versions support the retention periods that extend beyond the year 2038. To ensure compatibility with previous

NetBackup versions, all items with an infinite expiration date are updated to reflect the new infinite expiration date value. This conversion may extend the time that is required to complete the upgrade.

Review the following article for more information:

https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100048600

Date of collection: *date_time*
NetBackup state: *online|offline*
Records found: *records*
Conversion time estimate: *time (hh:mm)*

Please see the linked article to obtain a more accurate estimate of how long the conversion may take.

Would you like to continue with the upgrade? [y,n]

- 11** (該当する場合: メディアサーバーのみ) 環境で外部認証局を使用する場合は、表示されたプロンプトで外部認証局情報を入力します。

```
Enter the certificate file path or q to skip security
configuration:
/usr/eca/cert_chain.pem
```

```
Enter the trust store location or q to skip security
configuration:
/usr/eca/trusted/cacerts.pem
```

```
Enter the private key path or q to skip security configuration:
/usr/eca/private/key.pem
```

```
Enter the passphrase file path or q to skip security configuration
(default: NONE): /usr/eca/private/passphrase.txt
```

メモ: パスフレーズファイルのパスの入力は任意です。

- 12** (該当する場合: メディアサーバーのみ) プロンプトが表示されたら、CRL 構成に必要な情報を入力します。

```
Should a CRL be honored for the external certificate?
1) Use the CRL defined in the certificate.
2) Use the CRL from a file path.
3) Do not use a CRL.
q) skip security configuration
CRL option (1):
```

- 13** (該当する場合: メディアサーバーのみ) [ファイルパスの CRL を使用 (Use the CRL from a file path)]を指定した場合、CRL の場所のパスを入力する必要があります。

```
Enter the CRL location path or q to skip security configuration:
/usr/eca/crl
```

- 14** (該当する場合: メディアサーバーのみ) インストーラは入力された構成情報を再表示し、外部証明書の詳細の取得を試みます。

```
External CA values entered:  
Certificate file path: /usr/eca/cert_chain.pem  
Trust store file path: /usr/eca/trusted/cacerts.pem  
Private key file path: /usr/eca/private/key.pem  
Passphrase file path: /usr/eca/private/passphrase.txt  
CRL check level: Use the CRL from a file path.  
CRL location path: /usr/eca/crl  
  
Getting external CA certificate details  
Issued By : CN=IITFRMNUSINT,O=Acme,OU=iitf  
Subject Name : CN=cuomovm04,O=Acme,OU=iitf  
Expiry Date : Oct 31 17:25:59 2019 GMT  
SHA1 Fingerprint : 62:B2:C3:31:D5:95:15:85:9D:C9:AE:C6:EA:C2:  
DF:DF:6D:4B:92:5B  
Serial Number : 0x6c7fa2743072ec3eaae4fd60085d468464319a  
Certificate Path : /usr/eca/cert_chain.pem  
  
Validating host ECA certificate.  
NOTE: Depending on the network, this action may take a few  
minutes.  
To continue without setting up secure communication, press  
Ctrl+C.
```

- 15** (該当する場合: メディアサーバーのみ) 外部証明書を登録するための事前チェックが正常に完了した場合は、1を選択し、Enterキーを押して続行します。

```
The external certificate enrollment pre-check is successful.  
  
The external certificate is valid for use with primary server  
name  
How do you want to proceed?  
1) Continue the installation using this certificate.  
2) Modify the external CA values entered.  
3) Abort the installation.  
Default option (1):
```

- 16** (該当する場合: メディアサーバーのみ) 外部証明書の登録の事前チェックが失敗した場合は、表示される選択肢から選択します。デフォルトは 2 です。

The external certificate enrollment pre-check failed.

The external certificate is not valid for use with primary server
name

How do you want to proceed?

- 1) Continue the installation and set up external certificates later.
- 2) Modify the external CA values entered.
- 3) Abort the installation.

Default option (2):

- 17** (該当する場合: メディアサーバーのみ) プロンプトが表示されたら、アップグレードで Java GUI と JRE バイナリをどのように処理するかを指定します。

The Java GUI and JRE packages are currently *install_state* on this host.

The Java GUI and JRE can be optionally included with NetBackup. The Java GUI and JRE enable the NetBackup Administration Console and the Backup, Archive and Restore (BAR) GUI. Choose an option from the list below.

- 1) Update the Java GUI and JRE.
- 2) Remove the Java GUI and JRE.

1 を指定すると、サーバーの状態に基づいて Java および JRE のバイナリがインストールまたはアップグレードされます。2 を指定すると、サーバーの状態に基づいて Java および JRE のバイナリが削除または除外されます。

- 18** (該当する場合: プライマリサーバーを NetBackup 10.3 より前から NetBackup 10.3 以降にアップグレードする場合) メッセージが表示されたら、アップグレードでライセンス情報を処理する方法を指定します。

Are the license files downloaded from the Veritas licensing portal? (y/n) :

Cohesity Entitlement Management System ポータルからライセンスをダウンロードしていない場合は、n と応答します。その後、アップグレードに一時的な本番用ライセンスを使用するように求められます。インストーラは、ライセンスまたは一時的な本番用ライセンスなしでは続行できず、正常に終了します。詳しくは、
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

すでにライセンスをダウンロードしている場合は、y と入力します。その後、使用するライセンスのファイルパスの入力を求められます。ライセンスファイルパスを指定すると、NetBackup はファイルが存在すること、NetBackup で有効なファイルであること、コンテンツが変更されていないこと、期限切れでないことを検証します。

NetBackup でライセンスが有効であることが検証されると、インストーラによってライセンスの詳細が表示され、ユーザーにこのライセンスの追加を求めるメッセージが表示されます。ユーザーが y と答えた場合は、ライセンスが追加されます。無効なライセンスの場合、インストーラはファイルが無効である理由を提供し、新しいライセンスファイルパスの入力を求めます。

NetBackup 8.1.2 より前のバージョンからのアップグレードでは、VEMS または評価用ライセンスからダウンロードした本番用ライセンスのみがサポートされます。8.1.2 より前のバージョンから NetBackup をアップグレードする場合は、一時的な本番用ライセンスを使用できません。

追加のライセンスをインストールすることもできます。

- 19** NetBackup 11.0 以降、VRTSpddei.rpm は NetBackup に含まれなくなりました。VRTSpddei.rpm は、VMware イメージのインスタントアクセスとマルウェアスキャンを提供していました。NetBackup 11.0 以降では、libguestfs.rpm と python3-libguestfs.rpm がこの機能を提供します。VMware イメージのインスタントアクセスまたはマルウェアスキャン機能を引き続き使用するには、追加の手順が必要になる場合があります。アップグレードスクリプトの出力に表示されるこれらのメッセージのいずれかが表示された場合は、リストされた記事の手順に従ってください。

- Unable to remove VRTSpddei.rpm during upgrade. Remove this RPM manually after the upgrade finishes. For more details, see:
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100066233
- After the upgrade finishes, remove VRTSpddei.rpm. For more details, see:
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100066233

- After the upgrade finishes, remove VRTSPdrei.rpm and install the libguestfs RPMs. For more details, see:
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100066233

20 スクリプトが終了したら、バイナリが正常にインストールされています。

インストール後の手順に進みます。

詳細情報を参照できます。

p.80 の「NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順」を参照してください。

Linux での NetBackup プライマリサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード

ネイティブインストーラを使用して、NetBackup の Linux プライマリサーバーをアップグレードできます。NetBackup インストールスクリプトまたは優先するインストーラによる方法のいずれかを使用できます。

- Linux の場合: rpm、yum など

インストールまたはアップグレードに成功すると、/usr/openv/pack/install.history ファイルに記録されます。

メモ: パッケージ名の変更により、ネイティブインストーラによる方法でプライマリサーバーを NetBackup 7.7.3 以前から NetBackup 8.0 以降にアップグレードするには、追加の手順が必要です。プライマリサーバーを正しくアップグレードして NetBackup パッケージに変換するには、次の 2 つのオプションがあります。NetBackup インストーラを使用してプライマリサーバーを新しい NetBackup パッケージにアップグレードできます。または、ネイティブインストーラの手順に従って、該当する手順を実行します。詳細情報を参照できます。

p.74 の「ネイティブインストーラを使用して Linux プライマリサーバーバイナリをアップグレードするには:」を参照してください。

この両方のアップグレードオプションは同じ結果になります。NetBackup パッケージに正常にアップグレードすると、その後のアップグレードは各自が選択するインストーラを使用して実行できます。

ネイティブインストーラを使用して Linux プライマリサーバーバイナリをアップグレードするには:

- 1 root ユーザーとしてサーバーにログインします。
- 2 NetBackup 管理コンソールが開いている場合は、ここで閉じる必要があります。

3 (該当する場合) クラスタ環境では次のタスクを実行します。

- 必要に応じて、`bp.conf` と `vm.conf` ファイルを次のように編集します。
REQUIRED_INTERFACE エントリがある場合は、CLUSTER_NAME エントリに置換します。それ以外の場合は、新しい CLUSTER_NAME エントリを追加します。このエントリは仮想サーバー名として定義する必要があります。
プライマリサーバーの場合は、最初の SERVER エントリが `bp.conf` ファイルの CLUSTER_NAME エントリに一致することを確認してください。
- NetBackup グループをオフラインにします。以下に示すコマンドを使います。
`/opt/VRTSvcs/bin/hares -offline`
- 非アクティブノードのアップグレード中に移行が行われないようにするために、NetBackup グループを凍結します。以下に示すコマンドを使います。
`/opt/VRTSvcs/bin/hagrp -freeze group -persistent`
- VCS クラスタが構成されている場合、Cluster Manager インターフェースまたはコマンドラインを使用して NetBackup グループを凍結できます。
- クラスタのアップグレードに進む前に、他のクラスタアップグレード要件について『NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド』を参照してください。
<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

4 アップグレードスクリプトを実行すると第1章で説明していない修正済み NetBackup スクリプトが削除されます。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

p.28 の「アップグレードによるファイルの自動変更について」を参照してください。

変更したファイルで、保持する必要があるファイルを保存します。

5 プライマリサーバーの一時ディレクトリに NetBackup インストール応答ファイル (NBInstallAnswer.conf) を作成してください。そのディレクトリは通常、`/tmp` ディレクトリです。応答ファイルとその内容に関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「NetBackup 応答ファイルについて」を参照してください。

6 NBInstallAnswer.conf ファイルに省略可能なパラメータを追加できます。次に示すパラメータは、追加できるパラメータの例です。このマニュアルに含まれている NetBackup 応答ファイルのセクションを確認してください。

- LICENSE エントリ

LICENSE エントリはプライマリサーバーでのみ必要です。

NetBackup 10.3 より前から NetBackup 10.3 以降にアップグレードする場合は、LICENSE エントリが必要です。`LICENSE=TEMP_PRODUCTION | license_file_pathCohesity Entitlement Management` ポータルからライセンスをダウンロードしていない場合は、`TEMP_PRODUCTION` を使用できます。詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

NetBackup 10.3 以降のリリースからのアップグレードでは、有効で期限が切れていないライセンスがすでにインストールされている場合は、LICENSE エントリを入力する必要はありません。

- SERVER エントリ
- DATABASE_USER
- VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

7 (該当する場合) ユーザーまたはユーザーグループに RBAC セキュリティおよびバックアップ管理者の役割を割り当てる場合は、NBInstallAnswer.conf に次の必要な情報を指定します。

- RBAC_DOMAIN_TYPE
このフィールドを使用して、ユーザーまたはユーザーグループが属するドメイン形式を指定します。RBAC_DOMAIN_TYPE の NT, VX, UNIXPWD, LDAP 値がサポートされています。
- RBAC_DOMAIN_NAME
このフィールドを使用して、ユーザーまたはユーザーグループが属するドメインの名前を指定します。
- RBAC_PRINCIPAL_TYPE
このフィールドを使用して、USER または USERGROUP を指定します。
- RBAC_PRINCIPAL_NAME
このフィールドを使用して、ユーザー名またはユーザーグループを指定します。

RBAC_* オプションに関する詳しい情報を参照できます。

p.187 の「[RBAC ブートストラップについて](#)」を参照してください。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

8 十分な容量があるシステムに、サーバープラットフォームに一致するサーバーパッケージをダウンロードします。次に、そのサーバーパッケージファイルの内容を抽出します。

サーバーパッケージファイルの内容を抽出します。例:

- Linux Red Hat の場合:

```
tar -xzvf NetBackup_11.0_LinuxR_x86_64.tar.gz
```
- Linux SuSE の場合:

```
tar -xzvf NetBackup_11.0_LinuxS_x86_64.tar.gz
```

9 目的のオペレーティングシステムのディレクトリに移動し、パッケージをインストール先のコンピュータにコピーします。

オペレーティングシステムのディレクトリ:

- Linux Red Hat の場合:

NetBackup_11.0_LinuxR_x86_64/linuxR_x86/anb

- Linux SuSE の場合:

NetBackup_11.0_LinuxS_x86_64/linuxS_x86/anb

インストール先のマシンにパッケージをコピーします。

メモ: NetBackup 管理コンソールのインストールは省略可能です。インストールしない場合は、VRTSnbjava パッケージのコピーとインストールを省略します。

- VRTSnbcfg.rpm
- VRTSnbclibs.rpm
- VRTSnbclt.rpm
- VRTSnbjava.rpm
- VRTSnbjre.rpm
- VRTSnbmqbrkr.rpm
- VRTSnbpck.rpm
- VRTSnbprimary.rpm
- VRTSnblibs.rpm
- VRTSnbweb.rpm
- VRTSnetbp.rpm
- VRTSpbx.rpm
- VRTSpddea.rpm
- VRTSpddes.rpm
- VRTSspddeu.rpm
- VRTSpostgresql.rpm

- 10** (該当する場合) NetBackup 8.0 より前のバージョンからアップグレードする場合は、古い SYMC* パッケージを削除します。次の例は、SYMC RPM パッケージの削除に使用するコマンドを示しています。このプロセスでは、NetBackup の構成が保持されます。

```
rpm -e SYMCnbjava
rpm -e SYMCpddea
rpm -e SYMCnbclt
rpm -e SYMCnbjre
rpm -e SYMCnetbp
rpm -e SYMCpddes
```

- 11** (該当する場合): NetBackup 10.1.1 以前をアップグレードして NetBackup IT Analytics Data Collector をインストールする場合、またはアップグレードする NetBackup IT Analytics Data Collector が構成されていない場合:

- mkdir -p /usr/openv/tmp コマンドを使用して /usr/openv/tmp ディレクトリを作成します。
- メディアの /catalog/anb/ ディレクトリから /usr/openv/tmp に ita_dc.tar.gz tarball をコピーします。
- NBInstallAnswer.confNetBackup ファイルで INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR の値が YES に設定されていることを確認します。
IT Analytics Data Collector をインストールしない場合は、NBInstallAnswer.conf ファイルにある INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR の値が NO に設定されていることを確認します。

12 以下のコマンドを示されている順序で実行してファイルをインストールします。

RedHat Linux	rpm -U VRTSnbpck.rpm rpm -U VRTSpbx.rpm rpm -U VRTSnbclt.rpm rpm -U VRTSnblibs.rpm rpm -U VRTSnbjre.rpm rpm -U VRTSnbjava.rpm rpm -U VRTSpddes.rpm rpm -U VRTSpddeu.rpm rpm -U VRTSpddea.rpm rpm -U VRTSnbcfg.rpm rpm -U VRTSpostgresql.rpm rpm -U VRTSnetbp.rpm rpm -U VRTSnbprimary.rpm rpm -U VRTSnbmqbrkr.rpm rpm -U VRTSnbweb.rpm rpm -U VRTSnbslibs.rpm
-----------------	--

メモ: VRTSpddei パッケージは NetBackup 11.0 では提供されなくなりました。VM イメージのインスタントアクセスまたはマルウェアスキャンを引き続き使用する場合は、この rpm を削除し、libguestfs.rpm と python3-libguestfs.rpm をインストールします。

SuSE Linux	rpm -U VRTSnbpck.rpm rpm -U VRTSpbx.rpm rpm -U VRTSnbclt.rpm rpm -U VRTSnblibs.rpm rpm -U VRTSnbjre.rpm rpm -U VRTSnbjava.rpm rpm -U VRTSpddeu.rpm rpm -U VRTSpddea.rpm rpm -U VRTSpddes.rpm rpm -U VRTSnbcfg.rpm rpm -U VRTSpostgresql.rpm rpm -U VRTSnetbp.rpm rpm -U VRTSnbprimary.rpm rpm -U VRTSnbmqbrkr.rpm rpm -U VRTSnbweb.rpm rpm -U VRTSnbslibs.rpm
------------	--

- 13 アップグレードの完了後に NetBackup 管理コンソールをインストールする場合は、追加情報が利用可能です。

p.149 の「[アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除](#)」を参照してください。

NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順

「[NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順](#)」では、NetBackup をアップグレードしてイメージメタデータの移行を完了するためのインストール後の手順を説明します。

NetBackup 11.0 へのアップグレードのインストール後の手順

- 1 利用可能な NetBackup 11.0 メンテナンスリリースを確認します。メンテナンスリリースは NetBackup 11.0 の後にリリースされる非常に重要な修正が含まれます。アップグレードアクティビティ時に最新の利用可能なメンテナンスリリースをインストールすることをお勧めします。

最新の NetBackup 11.0 メンテナンスリリースにアクセスする方法

- NetBackup SORT の Web サイトに移動します。
<https://sort.veritas.com/netbackup>
- [インストールとアップグレードのチェックリスト (Installation and Upgrade Checklist)]セクション:
 - [製品 (Product)]で、正しい製品 (NetBackup Enterprise Server または NetBackup Server) を選択します。
 - [これからインストールまたはアップグレードする製品のバージョン (Product version you are installing or upgrading to)]で、NetBackup 最新バージョンを指定します。
 - [プラットフォーム (Platform)]で、アップグレードするサーバーのプラットフォームを選択します。
 - [プロセッサ (Processor)]で、サーバーのプロセッサを指定します。
 - [アップグレードされる製品のバージョン (Product version you are upgrading from (Optional))]で、アップグレードするサーバーの NetBackup の現在のバージョンを選択します。
 - [チェックリストの生成 (Generate Checklist)]をクリックします。
- [アップグレード情報 (Upgrade Information)]に *version_number*[ダウンロードリンク (Download Links)] のハイパーリンクがあります。メンテナンスリリースのハイパーリンクをクリックします。

- メンテナンスリリースが利用できない場合は、bprd を終了後に再起動します。bprd が再起動したら続行します。
Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin/bprd
Windows の場合: *install_path\NetBackup\bin\bprd*
 - メンテナンスリリースが利用可能な場合は、すぐにダウンロードします。
 - すべての NetBackup 处理およびサービスを停止して、インストールの準備をします。以下に示すコマンドを使います。
UNIX および Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all
Windows の場合: *install_path\NetBackup\bin\bpdown -f*
 - メンテナンスリリースをインストールします。
 - 以下のコマンドで NetBackup を再起動します。
UNIX および Linux システムの場合:
/usr/openv/netbackup/bin/bp.start_all
Windows システムの場合: *install_path\NetBackup\bin\bpup -f*
- 2** ディザスタリカバリパッケージのパスフレーズを設定します。パスフレーズを設定しないと、カタログバックアップが失敗します。詳細情報を参照できます。『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』にある、パスフレーズについての情報を参照してください。
- 3** 役割ベースのアクセス制御 (RBAC) を使用する場合は、セキュリティ管理者を指定する必要があります。詳細情報を参照できます。
p.150 の「[NetBackup Web ユーザーインターフェースについて](#)」を参照してください。
『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』を参照してください。
- 4** NetBackup とやり取りするシステムのアプリケーションを開始します。この手順には、バックアップ中のデータベースまたはシステムコンポーネントが含まれます。
- 5** (該当する場合) クラスタ化されたプライマリサーバーがある場合は、安全な通信のため非アクティブノードで証明書を生成します。詳細情報を参照できます。
p.146 の「[クラスタ化されたプライマリサーバーの非アクティブノードで証明書を生成する](#)」を参照してください。
- 6** (該当する場合) このサーバーがクラスタサーバーの場合は、クラスタ内の他のノードを更新します。次に示す標準のクラスタアップグレード処理により、クラスタ内のその他のプライマリサーバーノードを NetBackup 11.0 に更新できます。詳しくは、『[NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド](#)』を参照してください。
- NetBackup リソースがオンラインでない場合はオンラインにします。
- <http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

- 7 (該当する場合) 外部認証局 (ECA) を使用するプライマリサーバーまたは ECA 構成をスキップするメディアサーバーの場合は、今すぐ ECA を構成してください。詳細情報を参照できます。

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300

詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』で外部 CA と外部証明書の章を参照してください。

- 8 NetBackup 11.0 にアップグレードする必要があるメディアサーバーがある場合には、この時点でのアップグレードできます。メディアサーバーのアップグレードを開始したら、メディアサーバーのアップグレードが完了するまでこの手順を続行しないでください。

メモ: NetBackup では、特定のユースケースで正しく機能するようにメディアサーバーでセキュリティ証明書が必要です。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.27 の「NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について」](#)を参照してください。

このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.90 の「NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード」](#)を参照してください。

- 9 次の項目をこの順序で再度有効にします。

- すべてのディスクステージングストレージユニット。
- すべての NetBackup ポリシー。
- すべてのストレージライフサイクルポリシー (SLP)。

- 10 (該当する場合) お客様の環境でクラウドストレージを使用している場合、読み取りおよび書き込みのバッファサイズを更新する必要があります。詳細情報を参照できます。

[p.207 の「Amazon クラウドストレージサーバーのアップグレード後の手順」](#)を参照してください。

- 11 (該当する場合) NetApp クラスタを使っている場合は、追加の手順が必要なことがあります。詳細情報を参照できます。

[p.189 の「NetApp クラスタのためのアップグレード前の追加手順」](#)を参照してください。

- 12 (該当する場合) SSL が有効なクラウドストレージサーバーについては、CRL の検証はデフォルトで有効になっています。ストレージサーバーが実行中で、CRL 機能が正しく動作していることを確認します。詳細情報を参照できます。

[『NetBackup クラウド管理者ガイド』](#)を参照してください。

13 (該当する場合) Amazon の構成では、NetBackup と CloudPoint を最新バージョンにアップグレードした後、クレデンシャルを更新する必要があります。tpconfig -update コマンドを実行します。アップグレード後に、クレデンシャルが AWS IAM ロールのみをサポートするように更新されます。詳細情報を参照できます。

『[NetBackup Web UI クラウド管理者ガイド](#)』を参照してください。

14 バックアップ環境を監視し、通常の NetBackup 操作が再開されていることを確認します。

15 所要時間とバックアップ時間帯の許容範囲内で、まだアップグレードしていないメディアサーバーとクライアントをアップグレードします。クライアントをアップグレードする前に、メディアサーバーをアップグレードしてください。[NetBackup 8.1 クライアントを 8.1 以前のメディアサーバーにバックアップまたはリストアすることはできません。](#)

[p.90 の「NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード」](#)を参照してください。

クライアントのアップグレードはクライアントのインストールと同じです。インストールのヘルプについては、『[NetBackup インストールガイド - UNIX および Windows](#)』を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

メモ: すべてのスクリプトは、ローカルに格納してローカルで実行する必要があります。すべてのユーザーにスクリプトの書き込み権限を与えることは推奨しません。ネットワークまたはリモートの場所からスクリプトを実行することは許可されません。

NetBackup をアンインストールする際は、NetBackup の db_ext (UNIX の場合) または dbext (Windows の場合) に格納されている作成済みのスクリプトを保護する必要があります。

承認を受けた場所とスクリプトについて詳しくは、ナレッジベースの記事を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/000126002>

お使いのデータベースエージェントについて詳しくは、当該エージェントに関するマニュアルを確認してください。

<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

16 (該当する場合) NAT が有効になっている NetBackup 8.2 Linux クラスタを最新バージョンにアップグレードする場合、アップグレードによって NAT が無効になります。NAT を有効にし、NetBackup クラスタグループに追加された nbmqbroker サービスをクラスタで監視できるようにするには、次のコマンドを実行します。

- デフォルトのポートを使用して構成するには:

```
configureMQ -enableCluster -defaultPorts
```

- 特定のポートを使用して構成するには:


```
configureMQ -enableCluster -externalPort port1 -internalPorts
port2port3port4
```
- 17** VRTSpddei パッケージは、NetBackup 10.5 では提供されなくなりました。VM イメージのインストントアクセスまたはマルウェアスキャンを引き続き使用する場合は、この rpm を削除し、libguestfs.rpm と python3-libguestfs.rpm をインストールします。
- 18** その他のアップグレード手順を実行します。このトピックに関する詳細情報を参照できます。
[p.85 の「アップグレード後のシステムの更新」](#) を参照してください。

NetBackup の起動と停止のスクリプトについて

NetBackup をインストールするとき、インストールスクリプトは起動と停止のスクリプトの構成も実行します。起動スクリプトを使用して、システムがブートする際に NetBackup ディーモンを自動的に起動することができます。停止スクリプトを使用して、システムを停止する際に起動スクリプトを自動的に終了することができます。

インストール処理はオペレーティングシステムの適切な場所に NetBackup の起動と停止のスクリプトをコピーします。

非クラスタ環境でのアップグレードの場合、既存の NetBackup 関連の起動および停止スクリプトは保存され、新しいバージョンのスクリプトがインストールされます。

[表 3-1](#)には、NetBackup のインストール中にインストールされる各種のプラットフォームの起動スクリプトとシャットダウンスクリプトのリンクがリストされます。

表 3-1 プラットフォーム別の NetBackup の起動と停止のスクリプトのリンク

プラットフォーム	リンク
AIX	<p>/etc/rc.netbackup.aix</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ レベル 2 でのブート中にこのスクリプトが呼び出されるように、NetBackup のインストールスクリプトによって /etc/inittab ファイルが編集され、次に示すエントリが追加されました。 <pre>netbackup:2:wait:/etc/rc.netbackup.aix</pre> ■ 停止するには、次に示す行を /etc/rc.shutdown ファイルに追加します。 <pre>/etc/rc.netbackup.aix stop</pre>

プラットフォーム	リンク
Linux Debian	/etc/rc0.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/rc1.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/rc2.d/S95netbackup ->/etc/init.d/netbackup
Red Hat Linux	/etc/rc.d/rc0.d/K01netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup /etc/rc.d/rc1.d/K01netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup /etc/rc.d/rc2.d/S77netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup /etc/rc.d/rc3.d/S77netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup /etc/rc.d/rc5.d/S77netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup /etc/rc.d/rc6.d/K01netbackup ->/etc/rc.d/init.d/netbackup
SuSE Linux	/etc/init.d/rc0.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/init.d/rc2.d/S77netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/init.d/rc3.d/S77netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/init.d/rc5.d/S77netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/init.d/rc6.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup
Solaris	/etc/rc0.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/rc1.d/K01netbackup ->/etc/init.d/netbackup /etc/rc2.d/S77netbackup ->/etc/init.d/netbackup

アップグレード後のシステムの更新

サーバーおよびクライアントのアップグレード後に、NetBackup 環境の更新を完了するには、追加作業が必要となる場合があります。

ご使用の NetBackup 環境で、次のいずれかの手順を実行します。

プライマリサーバーの権限

`root` 以外のユーザーが **NetBackup** を管理することを許可されているプライマリサーバーをアップグレードした場合は、権限とグループを再構成する必要があります。新しくインストールされたファイルのデフォルトの権限およびグループでは、`root` ユーザーだけが **NetBackup** の管理を実行できます。

ターゲットの自動イメージレプリケーション (AIR) のリモートプライマリサーバー間の信頼関係を更新します。

ソースとターゲットの両方のプライマリサーバーを **8.0** 以前から **8.1** 以降にアップグレードした後に、信頼関係を更新する必要があります。 **NetBackup 8.1** から以降のバージョンにアップグレードする場合、信頼関係を再確立する必要はありません。信頼関係を再確立するには、ソースとターゲットの両方のプライマリサーバーで表示されているコマンドを実行します。

```
nbseccmd -setuptrustedmaster -update
```

詳細情報を参照できます。『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

アドオン製品

アップグレードされたすべてのクライアント上のアドオン製品 (**NetBackup** 言語パッケージなど) をアップグレードします。すべてのアドオン製品は **NetBackup** クライアントと同じバージョンである必要があります。

NetBackup スクリプト

アップグレード前に **NetBackup** スクリプトを変更した場合は、それらの変更を新しくアップグレードしたスクリプトに適用します。

外部認証局

外部認証局を構成します。セキュリティ構成をスキップすることを選択した場合、または環境で ECA を使用する場合は、ECA の構成が必要になる場合があります。ECA を構成する方法について詳しくは、次を参照してください。

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300

詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』で外部 CA と外部証明書の章を参照してください。

ストレージサーバーの更新

NetBackup は、ストレージが変更されるたびにストレージサーバーやディスクプールなどのオブジェクトを更新するわけではありません。ストレージの変更は、**NetBackup MSDP** の変更や、サードパーティの **OST** ベンダーソフトウェアのアップグレードによって発生する可能性があります。さらに、**SLP** レプリケーションで使用されるストレージ定義のレプリケーショントポロジーの変更や、インポート操作には更新が必要です。ユーザーは、`updatests` コマンドや `updatedp` コマンドを使用して、これらの変更を事前に確認する必要があります。**NetBackup** のアップグレードでは、使用環境で活用できる新機能が導入されることがあります。この新機能を使用するストレージサーバーやディスクプールで `updatests` コマンドや `updatedp` コマンドを実行することをお勧めします。`updatests` コマンドと `updatedp` コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

NetBackup アクセス制御

環境内で **NetBackup** アクセス制御が有効になっている場合は、プライマリサーバーのアップグレード後に `bpbat -login` コマンドを実行する必要があります。

NetBackup Kubernetes Operator

環境に **NetBackup Kubernetes Operator** が含まれる場合は、『[NetBackup for Kubernetes 管理者ガイド](#)』の **NetBackup Kubernetes Operator** のアップグレードに関するセクションで、オペレータのアップグレード方法を参照してください。

メディアサーバーのアップグレード

この章では以下の項目について説明しています。

- [メディアサーバーの NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順](#)
- [NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード](#)
- [Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード](#)

メディアサーバーの NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順

次に示す手順を使用して、メディアサーバーを NetBackup 11.0 にアップグレードします。

ガイド付き方式に必要な追加手順を実行できるようにするいくつかのツールを使用できます。詳しくは、Business Critical Services (BCS) の担当者にお問い合わせください。

NetBackup アップグレードに RHEL 7.5 へのアップグレードが含まれており、ファイバートラנסポートメディアサーバー (FTMS) を使用する場合には、追加の手順が必要になります。詳細情報を参照できます。

[p.40 の「NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイバートラنسポートメディアサーバーのサポートについて」](#)を参照してください。

メディアサーバーを NetBackup 11.0 にアップグレードするためのプレインストール手順

- 1 SORT ツールを使用して環境チェックを実行します。
[p.31 の「SORT のアップグレードのための推奨手順」](#) を参照してください。
- 2 すべてのオペレーティングシステムの更新プログラムとセキュリティ更新プログラムが適用されていることを確認します。
- 3 NetBackup メディアサーバーに関して通常実行するアップグレード前のタスクを実行します。例:
 - ウイルス対策ソフトウェアを無効にします。
ウイルス対策ソフトウェアを無効にできない場合、ウイルススキャンイベントから NetBackup ファイルとフォルダを除外します。NetBackup ファイルとフォルダの除外に関する詳細をご覧いただけます。
https://www.veritas.com/support/en_US/article.100004864
 - すべてのカスタマイズされたスクリプトやサードパーティのスクリプトを停止します。
- 4 (該当する場合) NetApp クラスタをノードスコープモードから Vserver モードに変更する場合は、各ファイルの詳しいイメージレポートを作成します。このレポートは bpimagerelist コマンドを使って生成できます。次に利用可能なオプションの一例を挙げます。環境に合わせて必要なオプションを使います。

```
bpimagerelist -client ndmp_host_name
```
- 5 NetBackup とやり取りするシステムのすべてのアプリケーションを停止します。この手順には、バックアップ中のデータベースまたはシステムコンポーネントが含まれます。これらのアプリケーションの停止に失敗すると、予期しない動作が発生する可能性があります。観測される動作には中止されたアップグレードやアプリケーションエラーが含まれます。
Oracle ユーザーの場合は、バックアップが実行されていないことを確認します。NetBackup をインストールする前に、RMAN のプロセスを停止します。AIX を使用する場合、RMAN プロセスを停止した後、root ユーザーとして /usr/bin/slibclean を実行する必要があります。
Oracle データベースを停止できない場合、手順は Oracle データベースがアクティブのままで NetBackup をインストールできる手順を利用できます。このトピックに関する詳細情報を参照できます。
<http://www.veritas.com/docs/TECH158276>
- 6 NetBackup のすべてのサービスを停止します。
 - UNIX および Linux システムの場合:
`/usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all`
 - Windows システムの場合: `install_path\NetBackup\bin\bpdown -f`

プレインストール手順は完了です。ご使用のプラットフォームに従って、NetBackup のバージョンのアップグレードに進みます。このトピックについて詳しくは、以下のページを参照してください。

[p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」](#) を参照してください。

[p.61 の「Windows システムでのサイレントアップグレードの実行」](#) を参照してください。

[p.66 の「NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード」](#) を参照してください。

[p.93 の「Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード」](#) を参照してください。

[p.120 の「VxUpdate について」](#) を参照してください。

NetBackup 11.0 への NetBackup メディアサーバーのアップグレード

メディアサーバーのアップグレード方法は、NetBackup アップグレードスクリプトによる方法、Linux のネイティブインストーラによる方法、VxUpdate による方法の 3 種類があります。NetBackup アップグレードスクリプトによる方法は標準的なアップグレード方法で、新規ユーザーにお勧めです。Linux のネイティブインストーラによる方法は難易度が高い場合があり、追加の手順も必要です。VxUpdate は、リモートインストール機能とユーザー定義のスケジュールによるアップグレード機能を備えています。

MSDP を使うメディアサーバーのアップグレードには、ローリングデータ変換が含まれます。ローリング変換は、システムがビジー状態ではないときに実行されます。つまり変換は、バックアップ、リストア、CRQP、CRC チェック、圧縮などが非アクティブのときに実行されます。この変換では、通常のシステム操作への影響は予想されていません。ローリング変換が完了すると、変換後のシステムと新しいインストールの間で違いはありません。

NetBackup では、メディアサーバーが正しく機能するためにセキュリティ証明書が必要とします。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.27 の「NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について」](#) を参照してください。

NetBackup には、NetBackup のサポート対象バージョンすべての管理コンソールが含まれています。NetBackup のサポート対象バージョンについて詳しくは、次を参照してください。

<https://sort.veritas.com/eos/>

NetBackup 8.1.2 アップグレードに RHEL 7.5 へのアップグレードが含まれており、ファイバートラנסポートメディアサーバー (FTMS) を使用する場合には、追加の手順が必要になります。詳細情報を参照できます。

p.40 の「NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイバートラنسポートメディアサーバーのサポートについて」を参照してください。

メモ: アップグレードを開始する前に、ウイルス対策ソフトウェアを無効にします。

ウイルス対策ソフトウェアを無効にできない場合、ウイルススキャンイベントから NetBackup ファイルとフォルダを除外します。NetBackup ファイルとフォルダの除外について詳細をご覧いただけます。https://www.veritas.com/support/en_US/article.100004864

表 4-1 メディアサーバーの移行手順

手順	作業	完了
1	メディアサーバーのアップグレードがプライマリサーバーのアップグレードに含まれる場合は、次のステップに進みます。 含まれない場合は、メディアサーバーを無効にします。	
2	NetBackup のすべてのサービスを停止します。 <ul style="list-style-type: none">■ Linux システムの場合: <code>/usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all</code>■ Windows システムの場合: <code>install_path\NetBackup\bin\bpdown -f</code>	
3	NetBackup バイナリをアップグレードします。このトピックについて詳しくは、以下のページを参照してください。 <ul style="list-style-type: none">■ p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」を参照してください。■ p.61 の「Windows システムでのサイレントアップグレードの実行」を参照してください。■ p.66 の「NetBackup 11.0 への Linux サーバーソフトウェアのアップグレード」を参照してください。■ p.93 の「Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード」を参照してください。■ p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。	
4	セキュリティ証明書を取得しなかった場合は、証明書を生成します。このトピックに関する詳細情報を参照できます。 p.27 の「NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について」を参照してください。	

手順	作業	完了
5	<p>利用可能な NetBackup 11.0 メンテナンスリリースを確認します。メンテナンスリリースは NetBackup 11.0 の後にリリースされる非常に重要な修正が含まれます。ベリタスはアップグレードアクティビティ時に最新の利用可能なメンテナンスリリースをインストールすることを推奨します。</p> <p>最新の NetBackup 11.0 メンテナンスリリースにアクセスする方法</p> <p>1 Cohesity SORT の Web サイトに移動します。</p> <p>https://sort.veritas.com/netbackup</p> <p>2 [インストールとアップグレードのチェックリスト (Installation and Upgrade Checklist)] セクション:</p> <ul style="list-style-type: none">■ [製品 (Product)] で、正しい製品 (NetBackup Enterprise Server または NetBackup Server) を選択します。■ [これからインストールまたはアップグレードする製品のバージョン (Product version you are installing or upgrading to)] で、NetBackup 最新バージョンを指定します。■ [プラットフォーム (Platform)] で、アップグレードするサーバーのプラットフォームを選択します。■ [プロセッサ (Processor)] で、サーバーのプロセッサを指定します。■ [アップグレードされる製品のバージョン (Product version you are upgrading from (Optional))] で、アップグレードするサーバーの NetBackup の現在のバージョンを選択します。■ [チェックリストの生成 (Generate Checklist)] をクリックします。 <p>3 [アップグレード情報 (Upgrade Information)] に <i>version_number</i> [ダウンロードリンク (Download Links)] のハイパーリンクがあります。メンテナンスリリースのハイパー リンクをクリックします。</p> <p>4 メンテナンスリリースが利用可能ではない場合は手順 6 に進みます。</p> <p>5 メンテナンスリリースが利用可能な場合は、すぐにダウンロードします。</p> <p>6 すべての NetBackup 処理およびサービスを停止して、インストールの準備をします。以下に示すコマンドを使います。</p> <p>Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all</p> <p>Windows の場合: <i>install_path\NetBackup\bin\bpdown -f</i></p> <p>7 メンテナンスリリースをインストールします。</p> <p>8 以下のコマンドで NetBackup を再起動します。</p> <p>Linux システムの場合: /usr/openv/netbackup/bin/bp.start_all</p> <p>Windows システムの場合: <i>install_path\NetBackup\bin\bpup -f</i></p>	

手順	作業	完了
6	(該当する場合) メディアサーバーのアップグレードがプライマリサーバーのアップグレードに含まれる場合は、このステップはスキップします。 メディアサーバーを再度アクティブにします。	
7	(該当する場合) メディアサーバーのアップグレードがプライマリサーバーのアップグレードに含まれる場合は、プライマリサーバーのアップグレード手順を再開します。	
8	環境に NetBackup Snapshot Manager を搭載したコンピュータが存在する場合は、メディアサーバーが正常にアップグレードされた後にこれらのコンピュータをアップグレードします。	

Linux での NetBackup メディアサーバーソフトウェアのサイレントアップグレード

ネイティブインストーラを使用して、NetBackup の Linux メディアサーバーをアップグレードできます。NetBackup インストールスクリプトまたは優先するインストーラによる方式のいずれかを使用できます。

Linux の場合: rpm、yum など

インストールまたはアップグレードに成功すると、/usr/openv/pack/install.history ファイルに記録されます。

注意: ネイティブインストーラを使用して NetBackup Red Hat と SUSE Linux をアップグレードする前に、NetBackup Nutanix プラグインパッケージを削除する必要があります。Nutanix プラグインと NetBackup は同じライブラリを同じ場所にインストールするため、削除しないとアップグレードに失敗します。アップグレードが失敗すると、「install of package_name conflicts with file from package package_name」というエラーメッセージが表示されます。

NetBackup をアップグレードする前に、次のコマンドを使用してプラグインをアンインストールします。

```
rpm -e VRTSnbntnxahv*
```

ネイティブインストーラを使用して Linux メディアサーバーバイナリをアップグレードするには:

- 1 メディアサーバーの /tmp ディレクトリに NetBackup インストール応答ファイル (NBInstallAnswer.conf) を作成してください。応答ファイルとその内容に関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 2 (該当する場合) お使いの環境で NetBackup 認証局を使用しており、メディアサーバーがすでに NetBackup 認証局に対して構成されている場合、4 に進みます。それ以外の場合は、NBInstallAnswer.conf に次の必要な情報を指定します。

CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT=*fingerprint*

例 (指紋の値は読みやすくするために折り返されています):

```
CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT=01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67:  
89:AB:CD:EF:01:23:45:67
```

お使いの NetBackup 環境のセキュリティ構成に応じて、応答ファイルに AUTHORIZATION_TOKEN オプションを追加する必要があります。
AUTHORIZATION_TOKEN オプションに関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 3 (該当する場合) お使いの環境で外部認証局を使用しており、メディアサーバーがすでに外部認証局に対して構成されている場合、4 に進みます。それ以外の場合は、NBInstallAnswer.conf に次の必要な情報を指定します。

- ECA_CERT_PATH

このフィールドを使用して、外部証明書ファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

- ECA_TRUST_STORE_PATH

このフィールドを使用して、トラストストアの場所を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

- ECA_PRIVATE_KEY_PATH

このフィールドを使用して、秘密鍵を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

- ECA_KEY_PASSPHRASEFILE

このフィールドを使用して、キーストアにアクセスするためのパスフレーズを含むファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは省略可能で、ファイルから外部証明書を設定する場合にのみ適用されます。

- ECA_CRL_CHECK_LEVEL

このフィールドを使用して、**CRL** モードを指定します。このフィールドは必須です。サポートされる値は次のとおりです。

- **USE_CDP:** 証明書に定義されている **CRL** を使用します。
 - **USE_PATH:** **ECA_CRL_PATH** で指定されたパスにある **CRL** を使用します。
 - **DISABLED:** **CRL** を使用しません。
 - **ECA_CRL_PATH**
このフィールドを使用して、外部 CA 証明書に関連付けられている **CRL** へのパスを指定します。このフィールドは、**ECA_CRL_CHECK_LEVEL** が **USE_PATH** に設定されている場合にのみ必要です。該当しない場合は、このフィールドを空のままにします。
- 4** また、**NBInstallAnswer.conf** ファイルに表示される省略可能なパラメータを追加できます。
- 追加の SERVER エントリ
各オプションに関する詳細情報を参照できます。
[p.151 の「NetBackup 応答ファイルについて」](#) を参照してください。
- 5** 十分な容量があるシステムに、サーバープラットフォームに一致するサーバーパッケージをダウンロードします。次に、必要なサーバーパッケージを抽出します。
サーバーパッケージファイルの内容を抽出します。例:
- **Linux Red Hat の場合:**

```
tar -xzvf NetBackup_11.0_LinuxR_x86_64.tar.gz
```
 - **Linux SuSE の場合:**

```
tar -xzvf NetBackup_11.0_LinuxS_x86_64.tar.gz
```
- 6** 目的のオペレーティングシステムのディレクトリに移動し、パッケージをメディアサーバーにコピーします。
オペレーティングシステムのディレクトリ:
 - **Linux Red Hat の場合:**

```
NetBackup_11.0_LinuxR_x86_64/linuxR_x86/anb
```
 - **Linux SuSE の場合:**

```
NetBackup_11.0_LinuxS_x86_64/linuxS_x86/anb
```

サーバーのファイルを、インストール先のコンピュータにコピーします。

メモ: Java GUI と JRE のアップグレードは省略可能です。アップグレードしない場合は、VRTSnbjava と VRTSnbjre パッケージのコピーとインストールを省略します。

アップグレードしないことを選択した場合は、古い Java GUI および JRE パッケージを削除します。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#) を参照してください。

- VRTSnbcfg.rpm
- VRTSnbclibs.rpm
- VRTSnbclt.rpm
- VRTSnbjava.rpm
- VRTSnbjre.rpm
- VRTSnbpck.rpm
- VRTSnblibs.rpm
- VRTSnetbp.rpm
- VRTSpbx.rpm
- VRTSpddearpm
- VRTSpddes.rpm
- VRTSpddeu.rpm

7 Cohesity 事前チェックパッケージをインストールします。

Linux: rpm -U VRTSnbpck.rpm

8 (該当する場合) NetBackup 8.0 より前のバージョンからアップグレードする場合は、古い SYMC* パッケージを削除します。次の例は、SYMC RPM パッケージの削除に使用するコマンドを示しています。このプロセスでは、NetBackup の構成が保持されます。

```
rpm -e SYMCnbjava
rpm -e SYMCpddea
rpm -e SYMCnbclt
rpm -e SYMCnbjre
rpm -e SYMCpddes
rpm -e SYMCnetbp
```

- 9 以下のコマンドを示されている順序で実行してファイルをインストールします。

メモ: Java GUI と JRE のアップグレードは省略可能です。アップグレードしない場合は、VRTSnbjava と VRTSnbjre パッケージのコピーとインストールを省略します。

アップグレードしないことを選択した場合は、古い Java GUI および JRE パッケージを削除します。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#) を参照してください。

```
RedHat      rpm -U VRTSpbx.rpm
Linux       rpm -U VRTSnbclt.rpm
            rpm -U VRTSnbclibs.rpm
            rpm -U VRTSnbjre.rpm
            rpm -U VRTSnbjava.rpm
            rpm -U VRTSpddes.rpm
            rpm -U VRTSspdieu.rpm
            rpm -U VRTSpddea.rpm
            rpm -U VRTSnbcfg.rpm
            rpm -U VRTSnetbp.rpm
            rpm -U VRTSnblibs.rpm
```

メモ: VRTSspdiei パッケージは NetBackup 11.0 では提供されなくなりました。VM イメージのインスタントアクセスまたはマルウェアスキャンを引き続き使用する場合は、この rpm を削除し、libguestfs.rpm と python3-libguestfs.rpm をインストールします。

```
SuSE Linux  rpm -U VRTSpbx.rpm
              rpm -U VRTSnbclt.rpm
              rpm -U VRTSnbclibs.rpm
              rpm -U VRTSnbjre.rpm
              rpm -U VRTSnbjava.rpm
              rpm -U VRTSspdieu.rpm
              rpm -U VRTSpddea.rpm
              rpm -U VRTSpddes.rpm
              rpm -U VRTSnbcfg.rpm
              rpm -U VRTSnetbp.rpm
              rpm -U VRTSnblibs.rpm
```

- 10 古いバージョンの Java GUI と JRE を使う予定がない場合は、削除することをお勧めします。

■ Linux の場合:

```
rpm -e VRTSnbjava.rpm
```

```
rpm -e VRTSnbjre.rpm
```

NetBackup の MSDP のアップグレード

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup 8.1 での MSDP のアップグレードの考慮事項](#)
- [MSDP ローリングデータ変換について](#)
- [MSDP 指紋アルゴリズムの変更について](#)

NetBackup 8.1 での MSDP のアップグレードの考慮事項

NetBackup 8.1 での MSDP の指紋アルゴリズムの変更により、アップグレードパスの計画時に MSDP 環境を検討する必要があります。指紋アルゴリズムが刷新されるため、NetBackup 8.0 以前のホストは NetBackup 8.1 の MSDP にアクセスできません。NetBackup ジョブの失敗は、この条件を計画しなかったことによるものである可能性があります。

8.1 MSDP ストレージサーバーのメディアサーバーリストに 8.0 以前のサーバーが含まれる場合、アルゴリズムが刷新されたことにより不具合が生じる可能性があります。8.1 と 8.0 のサーバーの共通のメディアサーバーが 8.0 のサーバーである場合、ジョブが失敗する可能性があります。Client Direct を使用する場合、クライアントを 8.1 にアップグレードする必要があります。アップグレードしない場合、Client Direct リストアでエラーが発生する可能性があります。これらの不具合は、8.0 以前のホストが 8.1 のサーバーにアクセスできないことが原因です。

MSDP 環境の一部として複数のメディアサーバーが存在する場合、アップグレードを計画するときに次に示すオプションを検討します。

- アクセス権を相互に共有するすべての MSDP メディアサーバーをアップグレードします。これらの MSDP ディスクプールへの Client Direct を使用するすべてのクライアントをアップグレードします。
このオプションでは、環境で中断が発生することはありません。
- 環境で Client Direct を使用できて設定を変更しない場合、Client Direct を使用して MSDP メディアサーバーとクライアントをアップグレードします。
選択した共通メディアサーバーが NetBackup 8.1 サーバーではない場合、リストア、検証、インポート、最適化複製が失敗するリスクがあります。古いクライアントで Client Direct を使用する場合、Client Direct リストアでエラーが発生する可能性があります。この不具合は、アルゴリズムが変更されたことにより発生します。
- 環境で Client Direct を使用できる場合、Client Direct を使用して MSDP メディアサーバーとクライアントをアップグレードします。アップグレードされるストレージサーバーが NetBackup 8.1 サーバーのみ含むように、クレデンシャルを持つメディアサーバーリストを修正します。
この処理によって、アップグレードされないサーバーがアップグレードされるサーバーにアクセスする権限が効果的に無効になります。アクセス権限の変更により、以前設定された操作が動作を停止するリスクがあります。このオプションを選択する場合、すべてのメディアサーバーがアップグレードされた後、変更を戻せるように、設定変更を詳細に書き留めてください。
複製ジョブが 8.1 MSDP から 8.0 以前の MSDP に複製する場合、以前の MSDP のストレージユニットを作成します。その新しいストレージユニットの[メディアサーバー (Media Servers)]リストを 8.1 ホストに制限します。ストレージライフサイクルポリシー (SLP) が管理する複製ジョブが 8.0 以前の MSDP ホストから 8.1 MSDP ホストに複製する場合、それらのジョブを変更する必要があります。複製ステージの[代替読み込みサーバー (Alternate Read Server)]を 8.1 メディアサーバーに設定します。

MSDP ローリングデータ変換について

NetBackup 8.0 では、既存の Blowfish アルゴリズムに置き換わる AES 暗号化アルゴリズムが導入されました。NetBackup 8.1 では、既存の MD5 のようなアルゴリズムに換わる SHA2 指紋アルゴリズムが導入されました。暗号化と指紋アルゴリズムの双方へのアップグレードは、データのセキュリティを向上させるために設計されています。

NetBackup 8.1 にアップグレードされた環境には、新しい形式に変換する必要がある Blowfish で暗号化されたデータと MD5 のような指紋が含まれている場合があります。変換を処理してデータを保護するには、新しい内部タスクで現在のデータコンテナを AES 暗号化と SHA-2 指紋アルゴリズムに変換します。この新しいタスクは、ローリングデータ変換と呼ばれます。

ローリングデータ変換は、すべての既存のデータコンテナを処理します。Blowfish アルゴリズムを使ってデータが暗号化されている場合、データは AES アルゴリズムを使って再暗号化されます。それから、新しい SHA-2 指紋が生成されます。変換後、データコン

テナには、.bhd と .bin ファイルに加えて、.map 拡張子を持つ新しいファイルが収められます。.map ファイルには、SHA-2 と MD5 に似たアルゴリズムの指紋間のマッピングが含まれています。.bhd ファイルには、SHA-2 指紋が含まれています。

NetBackup 8.1 の新規インストールでは、ローリングデータ変換は [完了 (Finished)] としてマークされ、それ以降は起動しません。NetBackup 8.1 へのアップグレード場合は、ローリングデータ変換はデフォルトでは有効であり、MSDP 変換の完了後にバックグラウンドで動作します。変換されるのは、アップグレードの前に存在していたデータのみです。すべての新しいデータは新しい SHA-2 の指紋を使用するため、変換の必要がありません。

crcontrol コマンドを使用してローリングデータ変換を管理および監視できます。使用方法に関する詳細情報を参照できます。

『NetBackup 重複排除ガイド』および『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

MSDP 指紋アルゴリズムの変更について

NetBackup 8.1 では、メディアサーバー重複排除プール (MSDP) によりセキュアな指紋アルゴリズムが導入されます。既存の MD5 のようなアルゴリズムは、SHA2 アルゴリズムに換わりました。NetBackup 8.1 は両方の指紋の種類を処理できるため、新しいサーバーは古いクライアントおよび古いサーバーと互換性があります。変換は、古いクライアントおよび古いサーバーと新しいサーバー間の通信中に発生します。指紋の変換には、追加の計算時間が必要になります。古いクライアントと古いサーバーおよび新しいサーバー間の通信は、クライアントとサーバーの両方が新しい場合よりも低速になります。

MD5 のようなアルゴリズムと SHA-2 アルゴリズムの両方を使用する混在環境のメディアサーバーの場合、最初のバックアップでは重複排除率が低下する可能性があります。アルゴリズムによりメディアサーバーを分割して、それぞれのサーバーに異なるストレージユニットを作成することを推奨します。

詳細情報を参照できます。

『NetBackup 重複排除ガイド』

クライアントのアップグレード

この章では以下の項目について説明しています。

- クライアントのアップグレードについて
- クライアントの NetBackup 11.0 へのアップグレードのプレインストール手順
- NetBackup アップグレードスクリプトによる UNIX および Linux クライアントのアップグレード
- ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード

クライアントのアップグレードについて

クライアントコンピュータのプライマリサーバーとメディアサーバーをアップグレードすると、クライアントコンピュータをアップグレードできます。関連付けられたプライマリサーバーとメディアサーバーをアップグレードする前に、クライアントコンピュータをアップグレードしないでください。

NetBackup の観点から見ると、クライアントコンピュータのアップグレードに関連する懸念はごくわずかです。クライアントコンピュータには最小の NetBackup バイナリしか存在せず、NetBackup データベースは存在しませんが、お客様によっては、クライアントコンピュータでミッションクリティカルなデータベースまたはビジネス固有の一意のアプリケーションをホストできると考える場合もあります。そのため、クライアントコンピュータを確認し、重要なデータベースやアプリケーションへのアクセスが中断されないように、リソースを追加する必要があるかどうかを判断してください。

NetBackup は、次の 4 つのクライアントアップグレード方法をサポートしています。

- NetBackup アップグレードスクリプト。NetBackup アップグレードスクリプトによる方法は標準的なアップグレード方法で、新規ユーザーにお勧めです。詳細情報を参照できます。

- p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」を参照してください。
- p.105 の「NetBackup アップグレードスクリプトによる UNIX および Linux クライアントのアップグレード」を参照してください。
- UNIX および Linux のネイティブインストーラ。UNIX および Linux のネイティブインストーラによる方法は難易度が高い場合があり、追加の手順も必要です。詳細情報を参照できます。
p.107 の「ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード」を参照してください。
 - VxUpdate。VxUpdate は LiveUpdate に代わるもので、クライアントコンピュータのクライアントアップグレードをスケジュール設定できます。詳細情報を参照できます。
p.120 の「VxUpdate について」を参照してください。
 - Ansible プレイブック。詳細情報を参照できます。
p.12 の「NetBackup 用のサポートされる Ansible プレイブック」を参照してください。

メモ: アップグレードを開始する前に、ウイルス対策ソフトウェアを無効にします。

ウイルス対策ソフトウェアを無効にできない場合、ウイルススキャンイベントから NetBackup ファイルとフォルダを除外します。NetBackup ファイルとフォルダの除外について詳細をご覧いただけます。https://www.veritas.com/support/en_US/article.100004864

クライアントの NetBackup 11.0 へのアップグレードの プレインストール手順

次に示す手順を使用して、クライアントを NetBackup 11.0 にアップグレードします。

ガイド付き方式に必要な追加手順を実行できるようにするいくつかのツールを使用できます。詳しくは、Business Critical Services (BCS) の担当者にお問い合わせください。

NetBackup アップグレードに RHEL 7.5 へのアップグレードが含まれており、ファイバートラנסポートメディアサーバー (FTMS) を使用する場合には、追加の手順が必要になります。詳細情報を参照できます。

p.40 の「NetBackup 11.0 による RHEL 7.5 以降でのファイバートラنسポートメディアサーバーのサポートについて」を参照してください。

クライアントを NetBackup 11.0 にアップグレードするためのプレインストール手順

1 SORT ツールを使用して環境チェックを実行します。

p.31 の「SORT のアップグレードのための推奨手順」を参照してください。

2 すべてのオペレーティングシステムの更新プログラムとセキュリティ更新プログラムが適用されていることを確認します。

3 NetBackup クライアントに関して通常実行するアップグレード前のタスクを実行します。例:

- ウイルス対策ソフトウェアを無効にします。
ウイルス対策ソフトウェアを無効にできない場合、ウイルススキャンイベントから NetBackup ファイルとフォルダを除外します。NetBackup ファイルとフォルダの除外に関する詳細をご覧いただけます。

https://www.veritas.com/support/en_US/article.100004864

- すべてのカスタマイズされたスクリプトやサードパーティのスクリプトを停止します。

4 (該当する場合) NetApp クラスタをノードスコープモードから Vserver モードに変更する場合は、各ファイラの詳しいイメージレポートを作成します。このレポートは bpimagedlist コマンドを使って生成できます。次に利用可能なオプションの一例を挙げます。環境に合わせて必要なオプションを使います。

`bpimagedlist -client ndmp_host_name`

5 NetBackup とやり取りするシステムのすべてのアプリケーションを停止します。この手順には、バックアップ中のデータベースまたはシステムコンポーネントが含まれます。これらのアプリケーションの停止に失敗すると、予期しない動作が発生する可能性があります。観測される動作には中止されたアップグレードやアプリケーションエラーが含まれます。

Oracle ユーザーの場合は、バックアップが実行されていないことを確認します。NetBackup をインストールする前に、RMAN のプロセスを停止します。AIX を使用する場合、RMAN プロセスを停止した後、root ユーザーとして /usr/bin/slibclean を実行する必要があります。

Oracle データベースを停止できない場合、手順は Oracle データベースがアクティブのままで NetBackup をインストールできる手順を利用できます。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

<http://www.veritas.com/docs/TECH158276>

6 NetBackup のすべてのサービスを停止します。

- UNIX および Linux システムの場合:
`/usr/openv/netbackup/bin/bp.kill_all`
- Windows システムの場合: `install_path\NetBackup\bin\bpdown -f`

プレインストール手順は完了です。ご使用のプラットフォームに従って、NetBackup のバイナリのアップグレードに進みます。このトピックについて詳しくは、以下のページを参照してください。

p.49 の「Windows システムでローカルサーバー、リモートサーバー、クラスタサーバーのアップグレードを実行する」を参照してください。

p.105 の「NetBackup アップグレードスクリプトによる UNIX および Linux クライアントのアップグレード」を参照してください。

[p.107 の「ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード」](#)を参照してください。

[p.120 の「VxUpdate について」](#)を参照してください。

NetBackup アップグレードスクリプトによる UNIX および Linux クライアントのアップグレード

UNIX および Linux クライアントで NetBackup 11.0 にアップグレードするには、次の手順を使用します。

NetBackup アップグレードスクリプトを使用して UNIX および Linux クライアントをアップグレードするには

- 1 root ユーザーとしてクライアントにログインします。
- 2 ESD イメージ(ダウンロード済みファイル)がある場所に移動し、次のコマンドを入力します。
./install
- 3 次のメッセージが表示されたら、Enter キーを押して続行します。

```
NetBackup Installation Script
Copyright (c) 2025 Cohesity, Inc. All rights reserved
```

Installing NetBackup Client Software

Please review the VERITAS SOFTWARE LICENSE AGREEMENT located on the installation media before proceeding. The agreement includes details on the NetBackup Product Improvement Program.

For NetBackup installation and upgrade information specific to your platform and to find out if your installed EEBs or hot fixes are contained in this release, check the Installation and Upgrade checklists and the Hot Fix and EEB Release Auditor, both available on the Veritas Services and Operations Readiness Tools (SORT) page:
<https://sort.veritas.com/netbackup>.

Do you wish to continue? [y,n] (y)

- 4 NetBackup で必要なシステム条件を確認したら、Enter キーを押して続行します。

```
Do you want to install the NetBackup client software for this
client? [y,n] (y)
```

- 5 (該当する場合) 環境で NetBackup 認証局を使用する場合は、インストーラによって証明書の詳細が取得され、情報の確認を求められます。認証局の情報を確認すると、認証トークンの情報の入力を求められます。

- 6 環境で外部認証局を使用する場合は、表示されたプロンプトで外部認証局の情報を入力します。

```
Enter the certificate file path or q to skip security
configuration:
/usr/eca/cert_chain.pem
```

```
Enter the trust store location or q to skip security
configuration:
/usr/eca/trusted/cacerts.pem
```

```
Enter the private key path or q to skip security configuration:
/usr/eca/private/key.pem
```

```
Enter the passphrase file path or q to skip security configuration
(default: NONE): /usr/eca/private/passphrase.txt
```

メモ: パスフレーズファイルのパスの入力は任意です。

- 7 プロンプトが表示されたら、アップグレードで Java GUI と JRE バイナリをどのように処理するかを指定します。

```
The Java GUI and JRE packages are currently install_state on this
host.
```

```
The Java GUI and JRE can be optionally included with NetBackup.
The Java GUI and JRE enable the Backup, Archive and Restore (BAR)
GUI. Choose an option from the list below.
```

- 1) Update the Java GUI and JRE.
- 2) Remove the Java GUI and JRE.

1 を指定すると、サーバーの状態に基づいて Java および JRE のバイナリがインストールまたはアップグレードされます。2 を指定すると、サーバーの状態に基づいて Java および JRE のバイナリが削除または除外されます。

- 8 問題がない場合、インストーラはエラーなしで終了します。

ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード

ネイティブインストーラを使用して、NetBackup の UNIX および Linux クライアントをアップグレードできます。NetBackup インストールスクリプトまたは優先するインストーラによる方法のいずれかを使用できます。ただし、Debian パッケージを使用するクライアントには当てはまりません。これらのクライアントは、NetBackup インストールスクリプトを使用してアップグレードする必要があります。

- AIX の場合: lsLpp、installp
- Linux の場合: rpm、yum など
- Solaris の場合: pkginfo、pkgadd

インストールまたはアップグレードに成功すると、/usr/openv/pack/install.history ファイルに記録されます。

注意: ネイティブインストーラを使用して NetBackup Red Hat と SUSE Linux をアップグレードする前に、NetBackup Nutanix プラグインパッケージを削除する必要があります。Nutanix プラグインと NetBackup は同じライブラリを同じ場所にインストールするため、削除しないとアップグレードに失敗します。アップグレードが失敗すると、「install of package_name conflicts with file from package package_name」というエラーメッセージが表示されます。

NetBackup をアップグレードする前に、次のコマンドを使用してプラグインをアンインストールします。

```
rpm -e VRTSnbntnxahv*
```

ネイティブインストーラを使用して UNIX または Linux クライアントバイナリをアップグレードするには

- 1 クライアントの /tmp ディレクトリに NetBackup インストール応答ファイル (NBInstallAnswer.conf) を作成してください。応答ファイルとその内容に関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 2 (該当する場合) お使いの環境で NetBackup 認証局を使用しており、クライアントがすでに NetBackup 認証局に対して構成されている場合、5 に進みます。それ以外の場合は、NBInstallAnswer.conf に必要な情報 () を指定します。

CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT=*fingerprint*

例 (指紋の値は読みやすくするために折り返されています):

```
CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT=01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67:  
89:AB:CD:EF:01:23:45:67
```

お使いの NetBackup 環境のセキュリティ構成に応じて、応答ファイルに AUTHORIZATION_TOKEN オプションを追加する必要があります。

AUTHORIZATION_TOKEN オプションに関する詳しい情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 3 (該当する場合) お使いの環境で外部認証局を使用しており、クライアントがすでに外部認証局に対して構成されている場合、5 に進みます。それ以外の場合は、NBInstallAnswer.conf に必要な情報 () を指定します。

■ SET ECA_CERT_PATH=*path*

このフィールドを使用して、外部証明書ファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_TRUST_STORE_PATH=*path*

このフィールドを使用して、トラストストアの場所を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_PRIVATE_KEY_PATH=*path*

このフィールドを使用して、秘密鍵を示すファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは、ファイルから外部証明書を設定する場合に必要です。

■ SET ECA_KEY_PASSPHRASEFILE=*path*

このフィールドを使用して、キーストアにアクセスするためのパスフレーズを含むファイルのパスとファイル名を指定します。このフィールドは省略可能で、ファイルから外部証明書を設定する場合にのみ適用されます。

■ SET ECA_CRL_CHECK_LEVEL=*value*

このフィールドを使用して、**CRL** モードを指定します。このフィールドは必須です。サポートされる値は次のとおりです。

- **USE_CDP:** 証明書に定義されている **CRL** を使用します。
- **USE_PATH:** **ECA_CRL_PATH** で指定されたパスにある **CRL** を使用します。
- **DISABLED:** **CRL** を使用しません。
- **SET ECA_CRL_PATH=path**
このフィールドを使用して、外部 CA 証明書に関連付けられている **CRL** へのパスを指定します。このフィールドは、**ECA_CRL_CHECK_LEVEL** が **USE_PATH** に設定されている場合にのみ必要です。該当しない場合は、このフィールドを空のままにします。

- 4** (該当する場合) ネットワークアドレス変換 (NAT) クライアントをサポートするように NetBackup プライマリサーバーが構成されている場合、次の必要な情報を **NBInstallAnswer.conf** に入力します。

ACCEPT_REVERSE_CONNECTION=TRUE

詳細情報を参照できます。p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 5** また、**NBInstallAnswer.conf** ファイルに表示される省略可能なパラメータを追加できます。

- **SERVICES=no**
- **MERGE_SERVER_LIST=value**

各オプションに関する詳細情報を参照できます。

p.151 の「[NetBackup 応答ファイルについて](#)」を参照してください。

- 6** 適切なクライアントパッケージから必要なクライアントファイルを抽出して、クライアントコンピュータにコピーします。

- 十分な容量があるシステムに **UNIX** クライアント用の **CLIENTS1** パッケージをダウンロードする
- 十分な容量があるシステムに **Linux** クライアント用の **CLIENTS2** パッケージをダウンロードする
- **CLIENTS1** ファイルまたは **CLIENTS2** ファイルの内容を抽出する
例:

AIX	<code>gunzip NetBackup_11.0_CLIENTS1.tar.gz; tar -xvf NetBackup_11.0_CLIENTS1.tar</code>
Linux	<code>tar -xzvf NetBackup_11.0_CLIENTS2.tar.gz</code>
Solaris	<code>tar -xzvf NetBackup_11.0_CLIENTS1.tar.gz</code>

- 目的のオペレーティングシステムのディレクトリに移動します。

例:

AIX CLIENTS1/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/RS6000/AIX7.1/

Linux Linux Red Hat の場合:

CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/Linux/RedHat4.18.0/

Linux SuSE の場合:

CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/Linux/SuSE5.3.18

Linux - Linux-s390x Red Hat の場合:

s390x CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/
Linux-s390x/IBMzSeriesRedHat4.18.0/

Linux-s390x SuSE の場合:

CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/
Linux-s390x/IBMzSeriesSuSE5.3.18

Linux - Linux-ppc64le Red Hat の場合:
ppc64le

CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/
Linux-ppc64le/IBMpSeriesRedHat4.18.0/

Linux-ppc64le SuSE の場合:

CLIENTS2/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/
Linux-ppc64le/IBMpSeriesSuSE5.3.18

Solaris Solaris SPARC の場合:

CLIENTS1/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/Solaris/Solaris10/

Solaris x86 の場合:

CLIENTS1/NBClients/anb/Clients/usr/openv/netbackup/client/Solaris/Solaris_x86_10_64/

- 以下に示すファイルをクライアントコンピュータにコピーします。

メモ: サポートされる場合、Java GUI と JRE のアップグレードは省略可能です。アップグレードしない場合は、VRTSnbjava と VRTSnbjre パッケージのコピーとインストールは行わないでください。アップグレードしないことを選択した場合は、古い Java GUI および JRE パッケージを削除します。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#)を参照してください。

AIX	VRTSnbpck.image VRTSpbx.image.gz VRTSnbclt.image.gz VRTSnbclibs.image.gz VRTSnbjre.image.gz VRTSnbjava.image.gz VRTSpddea.image.gz VRTSnbcfg.image.gz
Linux	VRTSnbpck.rpm VRTSpbx.rpm VRTSnbclt.rpm VRTSnbclibs.rpm VRTSnbjre.rpm VRTSnbjava.rpm VRTSpddeu.rpm VRTSpddea.rpm VRTSnbcfg.rpm

メモ: VRTSnbjre.rpm、VRTSnbjava.rpm、VRTSpddea.rpm の各ファイルは、IBM pSeries クライアントではサポートされません。

メモ: VRTSpddeu.rpm パッケージはオプションで、IBM 社の pSeries および zSeries クライアントではサポートされません。

Solaris	.pkg_defaults VRTSnbpck.pkg.gz VRTSpbx.pkg.gz VRTSnbclt.pkg.gz VRTSnbclibs.pkg.gz VRTSpddea.pkg.gz VRTSnbcfg.pkg.gz
---------	---

メモ: Solaris クライアントバイナリには .pkg_defaults という非表示の管理ファイルが含まれます。この管理ファイルには、デフォルトのインストール処理が含まれています。

メモ: VRTSnbjre.pkg.gz ファイルと VRTSnbjava.pkg.gz ファイルは Solaris クライアントではサポートされないことに注意してください。

メモ: z/Architecture クライアント用の VRTSpddea.rpm はないことに注意してください。

メモ: VRTSnbjre.rpm、VRTSnbjava.rpm、VRTSpddea.rpm の各ファイルは、IBM pSeries クライアントではサポートされないことに注意してください。

- 7 (該当する場合) Solaris および AIX でのみ、次のコマンドを使用して圧縮パッケージファイルを抽出します。

```
gunzip VRTS*.*
```

この処理で、以下に示すすべてのパッケージファイルが抽出されます。

```
VRTSnbpck.pkg
VRTSpbx.pkg
VRTSnbclt.pkg
VRTSnbclibs.pkg
VRTSnbjre.pkg
VRTSnbjava.pkg
VRTSpddea.pkg
VRTSnbcfg.pkg
```

メモ: VRTSnbjre.pkg.gz ファイルと VRTSnbjava.pkg.gz ファイルは Solaris クライアントではサポートされないため、これらのファイルは含まれません。

- 8 Cohesity 事前チェックパッケージをインストールします。

- AIX: installp -ad VRTSnbpck.image all
- Linux: rpm -U VRTSnbpck.rpm
- Solaris: pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbpck.pkg VRTSnbpck

- 9 (該当する場合) NetBackup 8.0 より前のバージョンからアップグレードする場合は、古い SYMC* パッケージを削除します。次の例は、SYMC RPM パッケージの削除に使用するコマンドを示しています。このプロセスでは、NetBackup の構成が保持されます。

```
rpm -e SYMCnbjava
rpm -e SYMCpddea
rpm -e SYMCnbclt
rpm -e SYMCnbjre
```

- 10 以下のコマンドを示されている順序で実行してファイルをインストールします。

メモ: Java GUI と JRE のアップグレードは省略可能です。アップグレードしない場合は、VRTSnbjava と VRTSnbjre パッケージのコピーとインストールを省略します。

アップグレードしないことを選択した場合は、古い Java GUI および JRE パッケージを削除することをお勧めします。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#) を参照してください。

AIX installp -ad VRTSpbx.image all
 installp -ad VRTSnbclt.image all
 installp -ad VRTSnbclibs.image all
 installp -ad VRTSnbjre.image all
 installp -ad VRTSnbjava.image all
 installp -ad VRTSpddeu.image all
 installp -ad VRTSnbcfg.image all

次のコマンドのみを使用してすべてのパッケージをインストールすることもできます。

installp -ad *folder_name* all

Linux rpm -U VRTSpbx.rpm
 rpm -U VRTSnbclt.rpm
 rpm -U VRTSnbclibs.rpm
 rpm -U VRTSnbjre.rpm
 rpm -U VRTSnbjava.rpm
 rpm -U VRTSpddeu.rpm
 rpm -U VRTSpddeu.rpm
 rpm -U VRTSnbcfg.rpm

メモ: VRTSnbjre.rpm、VRTSnbjava.rpm、VRTSpddeu.rpm の各ファイルは、IBM pSeries クライアントではサポートされません。

メモ: VRTSpddeu.rpm パッケージはオプションで、IBM 社の pSeries および zSeries クライアントではサポートされません。

Solaris 以下に示す `pkgadd -a admin -d device [pkgid]` コマンドを使用してファイルをインストールします。

```
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSpbx.pkg VRTSpbx
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbclt.pkg VRTSnbclt
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbclibs.pkg VRTSnbclibs
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbjre.pkg VRTSnbjre
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbjava.pkg VRTSnbjava
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSpddea.pkg VRTSpddea
pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbcfg.pkg VRTSnbcfg
```

- `VRTSnbjre.pkg.gz` ファイルと `VRTSnbjava.pkg.gz` ファイルは Solaris クライアントではサポートされないことに注意してください。
- `-a` オプションでは、デフォルトの管理ファイルの代わりに使用する特定の `admin(.pkg_defaults)` を指定します。管理ファイルにはデフォルトのインストール処理が含まれます。
- `-d` デバイスオプションでは、ソフトウェアパッケージのソースを指定します。デバイスには、デバイス、ディレクトリ、またはスプールディレクトリのパスを指定できます。
- `pkgid` パラメータを使用して、インストールするパッケージの名前を指定します。このパラメータは必要に応じて指定します。

11 (該当する場合) 応答ファイルがないか、正しく構成されていない場合は、次のエラーメッセージが表示されます。

```
WARNING: There is no answer file present and no valid bp.conf.
Therefore, security configuration is not complete. Manual steps
are required before backups and restores can occur. For more
information:
```

https://www.veritas.com/support/en_US/article.000127129

/usr/openv/netbackup/bin/private ディレクトリに変更し、`nb_init_cfg` コマンドを実行して `bp.conf` ファイルを構成します。手動で `bp.conf` ファイルを構成することもできます。セキュリティと証明書の構成を手動で設定しなければならない場合があります。詳細情報を参照できます。

https://www.veritas.com/support/en_US/article.000127129

12 古いバージョンの Java GUI と JRE を使用する予定がない場合、またはサポートされなくなった場合は、削除することをお勧めします。

- **Linux** の場合:

```
rpm -e VRTSnbjava.rpm
rpm -e VRTSnbjre.rpm
```

- **Solaris** の場合:

```
pkgrm VRTSnbjava
```

```
pkgrm VRTSnbjre
```

■ AIX

```
installpp -u VRTSnbjre
installpp -u VRTSnbjava
```

UNIX クライアントと Linux クライアントに NetBackup インストールスクリプトを使用する場合は、インストールの動作に 1 つだけ変更点があります。NetBackup インストールスクリプトは、インストールパッケージをクライアントの /usr/openv/pack/ ディレクトリにコピーしなくなりました。インストールまたはアップグレードに成功すると、/usr/openv/pack/install.history ファイルに記録されます。

UNIX、Linux のインストールエラーメッセージ、エラーの原因、その解決策

ここに示されている手順とは異なるインストールを試みると、エラーメッセージが表示されることがあります。表 6-1 に、処理およびそれによって生成されるメッセージをいくつか示します。

表 6-1 インストールのエラーメッセージと解決策

インストール処理	エラーメッセージ	解決方法
AIX の場合		
同じバージョンのバイナリが存在するのにバイナリをインストールしようとする。	# installpp -ad VRTSnbpck.image all package VRTSnbpck.image is already installed	lslpp -L package_name コマンドを使ってインストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。
誤った順序でバイナリをインストールしようとする。	# installpp -ad VRTSnbcfg.image all error: Failed dependencies: VRTSnbclt >= 8.1.0.0 is needed by VRTSnbcfg-version-platform	イメージパッケージの正しいインストール順序については、マニュアルを参照してください。依存パッケージの一覧表示のエラーで、詳しい情報を取得することもできます。 p.108 の「 ネイティブインストーラを使用して UNIX または Linux クライアントバイナリをアップグレードするには 」を参照してください。
新しいバージョンのバイナリが存在する場合に古いバージョンのバイナリをインストールしようとする。	# installpp -d VRTSnbclt.image all WARNING: file /usr/openv/lib/java/nbvmwaretags.jar from install of VRTSnbclt-version-platform conflicts with file from package VRTSnbclt-version-platform	lslpp -L package_name コマンドを使ってインストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。

インストール処理	エラーメッセージ	解決方法
Linux の場合		
同じバージョンのバイナリが存在するのにバイナリをインストールしようとする。	# rpm -U VRTSnbpck.rpm package VRTSnbpck.rpm-<version>-<platform> is already installed	rpmコマンドを使ってインストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。
誤った順序でバイナリをインストールしようとする。	# rpm -U VRTSnbcfg.rpm error: Failed dependencies: VRTSnbclt >= 8.1.0.0 is needed by VRTSnbcfg-<version>-<platform>	マニュアルを参照して、RPMの正しいインストール順序を確認します。詳細情報を参照できます。 p.108の「ネイティブインストーラを使用して UNIX または Linux クライアントバイナリをアップグレードするには」 を参照してください。
新しいバージョンのバイナリが存在する場合に古いバージョンのバイナリをインストールしようとする。	# rpm -U VRTSnbclt.rpm file /usr/openv/lib/java/nbvmwaretags.jar from install of VRTSnbclt-<version>-<platform> conflicts with file from package VRTSnbclt-<version>-<platform>	rpmコマンドを使ってインストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。
Solaris の場合		

インストール処理	エラーメッセージ	解決方法
同じバージョンのバイナリが存在するのにバイナリをインストールしようとする		<p><code>pkginfo</code>コマンドを使用して、現在インストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。</p> <p>または、パッケージに付属する管理ファイルを使用して、パッケージを再インストールします。</p>

インストール処理	エラーメッセージ	解決方法
	<pre>pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbpck.pkg VRTSnbpck Processing package instance <VRTSnbpck> from </root/packages/Solaris/ Solaris_x86_10_64/VRTSnbpck.pkg> NetBackup Pre-Check(i386) 8.1.0.0 This appears to be an attempt to install the same architecture and version of a package which is already installed. This installation will attempt to overwrite this package. Copyright (c) 2025 Cohesity, Inc. All rights reserved. ## Executing checkinstall script. Using </> as the package base directory. ## Processing package information. ## Processing system information. 6 package pathnames are already properly installed. ## Verifying disk space requirements. Installing NetBackup Pre-Check as <VRTSnbpck> ## Executing preinstall script. Wednesday, May 10, 2017 03:15:44 PM IST: Installing package VRTSnbpck. Installing NB-Pck.</pre>	

インストール処理	エラーメッセージ	解決方法
	<pre>## Installing part 1 of 1. [verifying class <NBclass>] ## Executing postinstall script. Wednesday, May 10, 2017 03:15:45 PM IST: Install of package VRTSnbpck was successful.</pre>	
誤った順序でバイナリをインストールしようとする。	<pre># pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbclt.pkg VRTSnbclt ERROR: VRTSnbpck >=8.1.0.0 is required by VRTSnbclt. checkinstall script suspends</pre>	<p>パッケージの正しいインストール順序については、マニュアルを参照してください。詳細情報を参照できます。</p> <p>p.108の「ネイティブインストーラを使用して UNIX または Linux クライアントバイナリをアップグレードするには」を参照してください。</p>
新しいバージョンのバイナリが存在する場合に古いバージョンのバイナリをインストールしようとする。	<pre># pkgadd -a .pkg_defaults -d VRTSnbclt.pkg VRTSnbclt Processing package instance <VRTSnbclt> from </root/80packages/Solaris/ Solaris_x86_10_64/VRTSnbclt.pkg> NetBackup Client(i386) 8.0.0.0 The following instance(s) of the <VRTSnbclt> package are already installed on this machine: 1 VRTSnbclt NetBackup Client (i386) 8.1.0.0 Do you want to overwrite this installed instance [y,n,?,q]</pre>	<p>pkginfoコマンドを使用して、現在インストールされているパッケージの名前を特定します。このパッケージをアンインストールしてから操作を再試行します。</p>

VxUpdate を使用した NetBackup 配備の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [VxUpdate について](#)
- [VxUpdate で使用するコマンド](#)
- [リポジトリの管理](#)
- [配備ポリシーの管理](#)
- [VxUpdate を使用したプライマリサーバーからのアップグレードの手動による開始](#)
- [VxUpdate を使用したメディアサーバーまたはクライアントからのアップグレードの手動による開始](#)
- [配備ジョブの状態](#)
- [EEB 管理ビュー](#)

VxUpdate について

VxUpdate は、メディアサーバーとクライアント向けのポリシーベースのアップグレードツールを提供します。NetBackup はメディアサーバーおよびクライアントのアップグレード用の簡略化されたツールを提供します。追加の外部ツールを必要とせず、バックアップポリシーに類似した、使い慣れたポリシーベース形式の構成になっています。署名済みパッケージが検証され、プライマリサーバー上の VxUpdate リポジトリにインストールされます。パッケージがインストールされると、配備ポリシーで利用可能になります。さらに、配備ポリシーを使用して、NetBackup Emergency Engineering Binary のインストールを自動化できます。

p.139 の「[EEB 管理ビュー](#)」を参照してください。

配備ポリシーを使用すると、配備アクティビティをスケジュールに従って構成および実行したり、クライアントホストの所有者が、必要に応じてアップグレードを実行したりできます。さらに、配備アクティビティを細分化して、小規模のタスクに分割できます。事前チェック、ステージング、インストールのタスクを、それぞれに固有の配備時間帯を設定した異なるスケジュールを持つ個別のアクティビティとしてスケジュール設定できます。

メモ: キューに登録された配備ジョブのみをキャンセルできます。VxUpdate ジョブがアクティブ状態になるとキャンセルできません。

配備ポリシーは、NetBackup 管理コンソールの他のポリシーと同じ場所にはありません。配備ポリシーは、NetBackup 管理コンソールの[配備の管理 (Deployment Management)]、[配備ポリシー (Deployment Policies)]にあります。

配備ポリシーを正常に作成して使用する方法:

表 7-1

手順	処理	追加情報
1	NetBackup リポジトリへの配置	p.122 の「リポジトリの管理」を参照してください。
2	配備ポリシーの作成	p.125 の「配備ポリシーの管理」を参照してください。
3	(オプション) プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントからのアップグレードの手動による実行	<p>p.131 の「VxUpdate を使用したプライマリサーバーからのアップグレードの手動による開始」を参照してください。</p> <p>p.135 の「VxUpdate を使用したメディアサーバーまたはクライアントからのアップグレードの手動による開始」を参照してください。</p>

VxUpdate で使用するコマンド

NetBackup では、2 つのコマンドを使用して NetBackup パッケージリポジトリを変更し、コマンドラインからポリシーを開始できます。コマンドラインを使用したポリシーの開始は、スクリプトが使用されている環境で役立ちます。コマンドは次のとおりです。

- nbrepo

nbrepo コマンドは、NetBackup パッケージリポジトリの管理に使用します。パッケージの追加、検証、削除ができるほか、リポジトリ内のパッケージ識別子や、パッケージに関するその他の情報を取得できます。このコマンドはプライマリサーバーにのみあります。

- nbinstallcmd

nbinstallcmd コマンドは、コマンドラインから配備ポリシーを開始するために使用します。オンデマンドの配備ジョブを開始するためにも、このコマンドを使用できます。このコマンドは、NetBackup 環境内のすべてのホストにあります。

これらのコマンドと、その他の関連するコマンドの詳細が利用可能です。

[『NetBackup コマンドリファレンスガイド』](#)

リポジトリの管理

VxUpdate はプライマリサーバー上に存在するリポジトリを使用します。リポジトリには、メディアサーバーとクライアントにデプロイできるすべてのパッケージが含まれています。リポジトリには、アップグレードパッケージ、緊急エンジニアリングバイナリ、Hotfix を含めることができます。

VxUpdate パッケージには、デジタル署名が含まれています。非公式の、または署名のない NetBackup パッケージをリポジトリに配置しようとすると失敗します。これらのパッケージは、ターゲットホストに NetBackup をインストールする配備ポリシーで参照されます。

追加されたパッケージに応じて、リポジトリが大きくなる可能性があります。NetBackup Web UI または nbrepo コマンドを使用してリポジトリへの配置を行う場合は、必要なディスク容量に注意してください。ご使用の環境に必要なすべてのパッケージに対して、プライマリサーバーに十分な領域があることを確認します。プライマリサーバーには、配備ポリシーで指定された NetBackup のバージョンとプラットフォーム向けパッケージを格納するために十分なディスク容量が確保されている必要があります。

Linux の場合、リポジトリは /usr/openv/var/global/repo にあります。Windows の場合、リポジトリは install_path\NetBackup\var\global\repo にあります。

リポジトリにロードできるパッケージには、次の種類があります。

- VxUpdate メディアサーバーとクライアントパッケージ

VxUpdate を使用して、NetBackup メディアサーバーとクライアントを新しいバージョンの NetBackup にアップグレードできます。これらのパッケージは、標準の NetBackup メディアサーバーおよびクライアントパッケージとは少し異なります。さまざまな VxUpdate 操作をサポートするための追加コンポーネントがパッケージに含まれます。

- 緊急エンジニアリングバイナリ (EEB) と Hotfix

VxUpdate を使用して、緊急エンジニアリングバイナリと Hotfix を NetBackup 8.1.2 以降のメディアサーバーとクライアントに配備できます。従来の EEB を取得するのと同じ方法で、VxUpdate 形式の EEB をサポートから取得できます。これらの EEB は、NetBackup バージョン 8.1.2 以降専用です。NetBackup 8.1.2 以降のリリース向けのすべてのメディアサーバーまたはクライアントの Hotfix には、VxUpdate 形式の修正が含まれています。

NetBackup 承認済みメディアサーバーおよびクライアントパッケージのダウンロードについて

VxUpdate 形式のパッケージは、[myveritas.com](#) のライセンスポートアルから入手できます。緊急バイナリと Hotfix は、標準の場所から取得できます。これらのパッケージの VxUpdate バージョンをダウンロードし、プライマリサーバーにアクセスできる場所、または Web UI を実行中のホストに配置する必要があります。アクセス可能になったら、NetBackup パッケージリポジトリにそれらを追加できます。

承認済みパッケージをダウンロードするには:

- 1 [myveritas.com](#) ライセンスポートアルに移動します。
- 2 ユーザー名とパスワードを入力します。
- 3 [ライセンス (Licensing)]を選択します。
- 4 アカウント番号を選択または入力します。
- 5 [フィルタの適用 (Apply Filters)]を選択します。
- 6 表示されるテーブルから、アカウント番号を選択します。

この処理により、資格の一覧が表示されます。ここから、関連するソフトウェアをダウンロードできます。

- 7 [ダウンロード (Downloads)]を選択します。
- 8 フィルタオプションを使用して、NetBackup 製品ラインと該当する製品のバージョンに結果を絞り込みます。

フィルタを追加して、[フィルタの適用 (Apply Filters)]を選択します。

- 9 [処理 (Actions)]からダウンロードアイコンを選択します。
- 10 表示されるテーブルで VxUpdate パッケージを選択し、[ダウンロード (Download)]を選択します。

メディアサーバーとクライアントの両方のバイナリが含まれているパッケージの命名規則は、`vxupdate_nb_version_operatingsystem_platform.sja` です。

- 11 ファイルをダウンロードして、コンピュータの一時的な場所に抽出します。
- 関連するすべてのパッケージをコンピュータにダウンロードし、抽出が完了したら、NetBackup パッケージリポジトリにパッケージを追加します。このトピックに関する詳細情報をお読みください。

[p.123 の「NetBackup パッケージリポジトリへのパッケージの追加について」](#) を参照してください。

NetBackup パッケージリポジトリへのパッケージの追加について

VxUpdate では、NetBackup Web UI と `nbrepo` コマンドがパッケージリポジトリの管理を制御します。NetBackup Web UI や `nbrepo` コマンドを使用せずに、手動でリポジトリ

を変更または更新しないでください。NetBackup Web UI と nbrepo コマンドは、リポジトリを検証し、NetBackup パッケージを配置します。

VxUpdate では、NetBackup パッケージリポジトリに追加した、署名済みパッケージのみを使用できます。nbrepo コマンドまたは NetBackup Web UI を使用してリポジトリにパッケージを追加します。これらのオプションは、EMM データベースにメタデータを追加し、ファイルシステム上のリポジトリのディレクトリ構造にパッケージを配置します。これらのいずれかのオプションを使用して、パッケージリポジトリの内容や、個々のパッケージに関する詳細を一覧表示できます。

NetBackup コマンドを使用してリポジトリに nbrepo パッケージを追加するには:

- 1 コマンドプロンプトから admincmd ディレクトリに移動します。

Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd`

- 2 nbrepo オプションを指定して -a コマンドを使用します。

`nbrepo -a package_path`

例: `nbrepo -a C:\temp\nbclient_8.1.2_windows_x64.sja`

- 3 パッケージが正常に検証されリポジトリに追加されると、コマンドは成功メッセージを返します。

- 4 nbrepo コマンドについての詳細情報を参照できます。

[『NetBackup コマンドリファレンスガイド』](#)

- 5 使われなくなったパッケージがリポジトリ内に存在する場合は、パッケージを削除します。詳細情報を参照できます。

p.125 の [「NetBackup パッケージリポジトリからのパッケージの削除について」](#) を参照してください。

NetBackup Web UI を使用して NetBackup パッケージリポジトリにパッケージを追加するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。

- 2 [ホスト (Hosts)]、[配備の管理 (Deployment management)]、[パッケージリポジトリ (Package Repository)] の順に選択します。

- 3 プロンプトが表示されたら、プライマリサーバーまたは Web UI を実行しているホストからパッケージを追加するかどうかを指定します。

- 4 他の必要な操作を実行します。
- 5 使われなくなったパッケージがリポジトリ内に存在する場合は、パッケージを削除します。詳細情報を参照できます。
p.125の「[NetBackupパッケージリポジトリからのパッケージの削除について](#)」を参照してください。

NetBackupパッケージリポジトリからのパッケージの削除について

パッケージが不要になった場合や、ディスク容量を節約するために、リポジトリからパッケージを削除できます。たとえば、すべてのクライアントが NetBackup 8.1.2 バージョンにアップグレードされたら、このバージョンのパッケージを削除します。nbrepo コマンドを使用して、パッケージを削除します。-pkgDetails オプションを使用すると、ファイルシステムのパスやその他のパッケージ属性などの、パッケージの詳細が表示されます。パッケージが削除されたことを確認するには、nbrepo コマンドを使用して、すべてのパッケージを一覧表示します。パッケージがリポジトリになくなかったことを確認できます。パッケージがファイルシステムのパスになくなつたことも確認できます。

NetBackupパッケージリポジトリからパッケージを削除するには:

- 1 コマンドプロンプトから admincmd ディレクトリに移動します。

Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin/admincmd

Windows の場合: *install_path\NetBackup\bin\admincmd*

- 2 -l オプションを指定して nbrepo コマンドを使用し、すべてのパッケージとそれらの識別子を一覧表示します。

nbrepo -l

- 3 -d オプションを指定して nbrepo コマンドを使用し、使用されていないパッケージを削除します。

nbrepo -d *package_identifier*

例: nbrepo -d 6

- 4 nbrepo コマンドについての詳細情報を参照できます。

[『NetBackupコマンドリファレンスガイド』](#)

配備ポリシーの管理

以下に示す手順を使用して、配備ポリシーを作成、変更、削除します。

配備ポリシーの作成

メモ: 作業用配備ポリシーを作成する前に、VxUpdate リポジトリにパッケージを追加する必要があります。リポジトリ内にパッケージを追加せずに配備ポリシーを作成できますが、このようなポリシーは正常に実行できません。

パッケージの追加について詳しくは、『NetBackup アップグレードガイド』の「リポジトリの管理」セクションを参照してください。

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[配備の管理 (Deployment Management)]、[配備ポリシー (Deployment Policies)] の順に選択します。
- 2 [処理 (Actions)] メニューで [新しい配備ポリシー (New Deployment Policy)] を選択します。
- 3 新しいポリシー用の一意の名前を [新しい配備ポリシーの追加 (Add a New Deployment Policy)] ダイアログボックスに入力します。
- 4 [OK] をクリックします。
- 5 [配備ポリシーの変更 (Change Deployment Policy)] ウィンドウの [属性 (Attributes)] タブに表示されている情報を指定します。
 - [パッケージ (Package)]: 配備するパッケージをドロップダウンメニューから選択します。[準備完了 (Ready)] 状態のパッケージのみを使用できます。

メモ: 外部認証局の証明書をサポートするパッケージを指定すると、[セキュリティ (Security)] という追加タブが表示されます。このタブについては、この手順で後ほど説明します。

- [メディアサーバー (Media server)]: メディアサーバーをドロップダウンメニューから指定します。指定したメディアサーバーは、ポリシーに含まれている NetBackup ホストに接続してファイルを転送するために使用します。メディアサーバーは NetBackup リポジトリからファイルのキャッシュも行います。メディアサーバーは、NetBackup 8.1.2 以降のバージョンでなければなりません。リポジトリはプライマリサーバーに存在するため、メディアサーバーフィールドのデフォルト値はプライマリサーバーになります。
メディアサーバーをアップグレードするとき、[メディアサーバー (Media server)] ドロップダウンは自動的にプライマリサーバーに設定され、変更できません。
- Java GUI および JRE: ターゲットシステムで Java GUI と JRE をアップグレードするかどうかを指定します。3 つのオプションがあります。
 - [含める (INCLUDE)]: 指定したコンピュータで Java GUI と JRE コンポーネントをインストールまたはアップグレードします。

- [除外する (EXCLUDE)]: 指定したコンピュータから Java GUI と JRE コンポーネントを除外します。既存の NetBackup Java GUI および JRE パッケージがすべて削除されます。
- [一致 (Match)]: Java GUI と JRE コンポーネントの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在する場合、コンポーネントはアップグレードされます。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在しない場合、コンポーネントはインストールされません。
- (該当する場合): [同時ジョブ数の制限 (Limit simultaneous jobs)]オプションを選択し、[ジョブ (Jobs)]の値を指定して、一度に実行できる同時ジョブの合計数を制限します。最小値は 1 で、最大値は 999 です。
チェックボックスにチェックマークが付いている場合、デフォルト値は 3 です。
チェックボックスのチェックマークをはずした場合は、アップグレードの同時ジョブに制限は適用されません。
コマンドラインインターフェースで値を 0 に設定すると、同時アップグレードジョブを無制限に設定できます。
- [ホストを選択 (Select hosts)]: [利用できるホスト (Available hosts)]リストからホストを選択し、[追加 (Add)]を選択して配備ポリシーにホストを追加します。リストは、ホストデータベースとバックアップポリシーのホストから生成されます。[追加 (Add)]を選択すると、[選択したホスト (Selected hosts)]にホストが表示されます。
配備ポリシーには、メディアサーバーまたはクライアントのいずれかを含められますが、両方は含められません。インストールが必要なパッケージを選択するときは、利用可能なホストのリストが、メディアサーバーまたはクライアントにフィルタ処理されます。

メモ: 8.0 メディアサーバーをアップグレードするには、メディアサーバーがバックアップポリシーに含まれている必要があります。ポリシーがアクティブである必要はありません。また、ポリシーを実行する必要はありません。メディアサーバーを NetBackup 8.1 以降にアップグレードしたら、ポリシーを削除できます。ポリシーは、クライアントリストにメディアサーバーを含めるためだけに必要です。ファイルリスト、スケジュール、またはその他のポリシー属性を指定する必要はありません。

ポリシー内にメディアサーバーが含まれていない場合、メディアサーバーのオペレーティングシステムが[不明 (Unknown)]として表示されます。この問題はパッケージの不足であることがツールのヒントで示されます。選択されたホストのオペレーティングシステム用のパッケージがありません。nbrepo コマンドラインを使用して、不足している必要なパッケージをリポジトリに追加してください。実際にリポジトリにパッケージがない可能性がありますが、メディアサーバーをバックアップポリシーに追加する必要があります。メディアサーバーをポリシーに追加してもツールのヒントが表示される場合は、必要なパッケージの追加が必要な可能性があります。

- 6 [配備ポリシーの変更 (Change Deployment Policy)] ウィンドウの [スケジュール (Schedules)] タブを選択します。

そのポリシー内の、すべてのスケジュールの概略を確認できます。

- 7 [新規 (New)] を選択します。

- 8 [配備スケジュールの追加 (Add Deployment Schedule)] ウィンドウに表示される情報を指定します。

- [名前 (Name)]: 新しいスケジュールの名前を入力します。

- [形式 (Type)]: 作成するスケジュールの形式を指定します。

スケジュール形式:

- 事前チェック

更新のための十分な領域がクライアントにあるかどうかの確認など、さまざまな事前チェック操作を実行します。事前チェックのスケジュール形式は、EEB パッケージ向けには存在しません。

- 段階

更新パッケージをクライアントに移動します。インストールは行いません。事前チェック操作も実行します。

- インストール

指定したパッケージをインストールします。また、事前チェック操作とステージ パッケージ操作も実行します。ステージパッケージ操作を実行済みの場合、インストールスケジュールによってパッケージが再度移動されることはありません。

メモ: 複数の異なるスケジュール形式を、同じ配備スケジュール時間帯に追加すると、予測できない結果が生じることに注意してください。VxUpdate には、最初にどのスケジュール形式を実行するかを判断するための動作が定義されていません。単一の配備スケジュール時間帯に事前チェック、ステージ、およびインストールのジョブがある場合、それらの実行順序を指定する方法はありません。事前チェックまたはステージのスケジュールが失敗することもありますが、インストールは正常に完了します。事前チェック、ステージ、インストールのスケジュールを使うことを計画している場合は、それぞれに個別のスケジュールと時間帯を作成することをお勧めします。

- [開始 (Starts)]: ポリシーの開始日時を、テキストフィールドに、または日時のスピナを使用して指定します。カレンダーアイコンをクリックして表示されるウィンドウで、日時を指定することもできます。ウィンドウ下部に表示される 3 カ月のカレンダー上でクリックおよびドラッグすると、スケジュールを選択できます。
- [終了 (Ends)]: 開始時刻を指定したように、ポリシーを終了する日時を指定します。

- [期間 (Duration)]: 必要に応じて、ポリシーの終了時刻ではなく、日、時間、分、秒で期間を指定できます。最小値は5分で、最大値は99日です。
 - [追加 (Add)]または[OK]を選択すると、スケジュールが作成されます。[OK]を選択して、ポリシーを保存して作成します。
- 9** [セキュリティ (Security)]タブは、外部認証局のサポートを含む配備パッケージを選択すると表示されます。

デフォルトでは、[可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)]オプションが選択されています。このオプションは、既存のNetBackup CA証明書または外部CA証明書が利用可能な場合はそれを使用するようにNetBackupに指示します。

メモ: このオプションを指定した状態で証明書が使用できない場合、アップグレードは失敗します。

[可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)]オプションを選択解除すると、UNIX/LinuxコンピュータおよびWindowsコンピュータの外部認証局情報の場所を指定できます。

このオプションを選択解除すると、ユーザーはアップグレード中にセキュリティ構成の設定を変更できません。

- 10** Windowsクライアントはデフォルトで、[Windows証明書ストアの使用 (Use Windows certificate store)]が選択されています。

証明書の場所は、*Certificate Store Name*¥*Issuer Distinguished Name*¥*Subject Distinguished Name*のように入力する必要があります。

メモ: 証明書ストアを指定するときは、任意の名前に対して\$hostname変数を使用できます。実行時に\$hostname変数はローカルホストの名前を評価します。このオプションを使用すると、NetBackupソフトウェアを多数のクライアントにプッシュインストールするときに柔軟性が高まります。

あるいは、Windows証明書の場所をカンマ区切りのリストで指定できます。たとえば、MyCertStore¥IssuerName1¥SubjectName,
MyCertStore¥IssuerName2¥SubjectName2,
MyCertStore4¥IssuerName1¥SubjectName5のように指定できます。

次に、表示されるラジオボタンから、証明書失効リスト(CRL)オプションを選択します。

- [CRLは使用しない (Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
- [証明書に定義されているCRLを使用する (Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。

- [次のパスにある CRL を使用する (Use the CRL at the following path)]: CRL のパスを入力するように求められます。
- 11** [証明書ファイルパスから (ファイルベースの証明書の場合) (From certificate file path (for file-based certificates))] オプションを選択しているメディアサーバーとクライアントの両方に対して、次のように情報を指定します。
- [証明書ファイル (Certificate file)]: このフィールドには、証明書ファイルへのパスと証明書のファイル名を指定する必要があります。
 - [トラストストアの場所 (Trust store location)]: このフィールドには、トラストストアへのパスとトラストストア名を指定する必要があります。
 - [秘密鍵のパス (Private key path)]: このフィールドには、秘密鍵ファイルへのパスと秘密鍵のファイル名を指定する必要があります。
 - [パスフレーズファイル (Passphrase file)]: このフィールドでは、パスフレーズファイルへのパスとパスフレーズのファイル名を指定する必要があります。このフィールドは必要に応じて指定します。
 - お使いの環境の正しい CRL オプションを指定します。
 - [CRL は使用しない (Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
 - [証明書に定義されている CRL を使用する (Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。
 - [次のパスにある CRL を使用する (Use the CRL at the following path)]: CRL のパスを入力するように求められます。

配備ポリシーを変更するには

- 1** 配備ポリシーを右クリックして、[変更 (Change)]を選択します。
- 2** 配備ポリシーの各タブを参照して、ポリシーに必要な変更を加えます。
- 3** [OK]を選択すると、ポリシーが更新されます。

配備ポリシーの削除

- 1** 配備ポリシーを右クリックして、[削除 (Delete)]を選択します。
- 2** [OK]を選択します。
- 3** ポリシーの削除を確認します。

VxUpdateを使用したプライマリサーバーからのアップグレードの手動による開始

2つの方法のいずれかを使用して、VxUpdateでアップグレードを手動で開始できます。既存のポリシーに基づいて、アップグレードを手動で開始できます。また、ポリシーを関連付けずにアップグレードを開始することもできます。

ローカルでプライマリサーバーにログインし、即時に更新を強制実行する必要がある場合は、配備ポリシーを手動で開始します。または、緊急バイナリ用に、即時のアップグレードを開始できます。VxUpdateを使用すると、コマンドラインを使用してメディアサーバーまたはクライアントからもアップグレードを起動できます。詳細情報を参照できます。

[p.135の「VxUpdateを使用したメディアサーバーまたはクライアントからのアップグレードの手動による開始」](#)を参照してください。

管理コンソールからポリシー内のすべてのメディアサーバーまたはクライアントのアップグレードを手動で開始するには

- 1 NetBackup管理コンソールで、[配備の管理 (Deployment Management)]、[配備ポリシー (Deployment Policies)]の順に移動します。
- 2 中央ペインで、プライマリサーバーを展開して、実行するポリシーを選択します。
- 3 開始するポリシーを右クリックして、[手動配備 (Manual Deployment)]を選択します。
- 4 または、実行するポリシーを選択したら、[処理 (Actions)]、[手動配備 (Manual Deployment)]の順に選択できます。

管理コンソールからポリシー内の特定のホストのアップグレードを手動で開始するには

- 1 NetBackup管理コンソールで、[NetBackupの管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[メディアサーバー (Media Servers)]または[NetBackupの管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[クライアント (Clients)]の順に選択します。
- 2 右ペインで、アップグレードするホストを右クリックします。
- 3 [ホストをアップグレード (Upgrade Host)]を選択します。
- 4 [ホストをアップグレード (Upgrade Host)]ダイアログボックスで、次のようにします。
 - [パッケージ (Package)]ドロップダウンリストから、使用するパッケージを選択します。[準備完了 (Ready)]状態のパッケージのみを使用できます。

メモ: 外部認証局証明書がサポートされているパッケージを指定すると、追加の[構成 (Configure)]ボタンが表示されます。このボタンについては、次の手順で説明します。

- [形式 (Type)] ドロップダウンリストから、実行するスケジュール形式を指定します。
- [メディアサーバー (Media server)] ドロップダウンリストから、使用するメディアサーバーを選択します。
メディアサーバーをアップグレードするとき、[メディアサーバー (Media server)] ドロップダウンは自動的にプライマリサーバーに設定され、変更できません。
- アップグレードするホストが [選択したホスト (Selected hosts)] にあることを確認します。

5 (該当する場合) 存在する場合、[構成 (Configure)] ボタンをクリックして、外部認証局情報を構成します。

デフォルトでは、[可能な場合は既存の証明書を使用します。 (Use existing certificates when possible)] オプションが選択されています。このオプションは、証明書が利用可能な場合、既存の NetBackup CA または外部 CA 証明書を使用するように NetBackup に指示します。

メモ: このオプションを指定して証明書が利用できない場合、アップグレードは失敗します。

[可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)] オプションを選択解除すると、UNIX/Linux コンピュータおよび Windows コンピュータの外部認証局情報の場所を指定できます。

このオプションを選択解除すると、ユーザーはアップグレード中にセキュリティ構成の設定を変更できません。

6 Windows クライアントはデフォルトで、[Windows 証明書ストアの使用 (Use Windows certificate store)] が選択されています。

証明書の場所は、*Certificate Store Name*¥*Issuer Distinguished Name*¥*Subject Distinguished Name* のように入力する必要があります。

メモ: 証明書ストアを指定するときは、任意の名前に対して \$hostname 変数を使用できます。実行時に \$hostname 変数はローカルホストの名前を評価します。このオプションを使用すると、NetBackup ソフトウェアを多数のクライアントにプッシュインストールするときに柔軟性が高まります。

あるいは、Windows 証明書の場所をカンマ区切りのリストで指定できます。たとえば、MyCertStore¥IssuerName1¥SubjectName, MyCertStore¥IssuerName2¥SubjectName2, MyCertStore4¥IssuerName1¥SubjectName5 のように指定できます。

次に、表示されるラジオボタンから、証明書失効リスト(CRL)オプションを選択します。

- [CRLは使用しない(Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
- [証明書に定義されているCRLを使用する(Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。
- [次のパスにあるCRLを使用する(Use the CRL at the following path)]: CRLのパスを入力するように求められます。

7 [証明書ファイルパスから(ファイルベースの証明書の場合)]オプションを選択しているUNIXおよびLinuxクライアント、Windowsクライアントの両方に対して、次のように情報を指定します。

- [証明書ファイル(Certificate file)]: このフィールドには、証明書ファイルへのパスと証明書のファイル名を指定する必要があります。
- [トラストストアの場所(Trust store location)]: このフィールドには、トラストストアへのパスとトラストストア名を指定する必要があります。
- [秘密鍵のパス(Private key path)]: このフィールドには、秘密鍵ファイルへのパスと秘密鍵のファイル名を指定する必要があります。
- [パスフレーズファイル(Passphrase file)]: このフィールドでは、パスフレーズファイルへのパスとパスフレーズのファイル名を指定する必要があります。このフィールドは必要に応じて指定します。
- お使いの環境の正しいCRLオプションを指定します。
 - [CRLは使用しない(Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
 - [証明書に定義されているCRLを使用する(Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。
 - [次のパスにあるCRLを使用する(Use the CRL at the following path)]: CRLのパスを入力するように求められます。

8 [OK]を選択して、アップグレードを起動します。

メモ: NetBackup管理コンソールの[ポリシー(Policies)]セクションからも、クライアントのアップグレードジョブを起動できます。NetBackup管理コンソールで[NetBackupの管理(NetBackup Management)]、[ポリシー(Policies)]の順に選択します。中央ペインで、[クライアント(Clients)]を選択します。右ペインでアップグレードするクライアントを右クリックして、[ホストをアップグレード(Upgrade Host)]を選択します。示されている手順に従います。この手順は、メディアサーバーではなくクライアントにのみ適用できます。

ポリシー内のすべてのメディアサーバーまたはクライアントに対してコマンドラインからアップグレードを手動で開始するには

ポリシー内のすべてのメディアサーバーまたはクライアントのアップグレードを手動で開始するには、この手順を使用します。

メモ: この手順は、指定したポリシーのすべてのメディアサーバーまたはクライアントのアップグレードを開始します。選択したメディアサーバーまたはクライアントで、アップグレードを開始できます。詳細情報を参照できます。

[「ポリシー内の選択したホストに対してコマンドラインからアップグレードを手動で開始するには」](#)

- 1 コマンドプロンプトを開いて、次のディレクトリに移動します。

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin`

UNIX または Linux の場合: `/usr/openv/NetBackup/bin`

- 2 次に示すように、`nbinstallcmd` コマンドを使用してポリシーを起動します。

```
nbinstallcmd -policy policy_name -schedule schedule
[-master_server primary]
```

ここで、`policy_name` は配置ポリシーの名前、`schedule` はスケジュールの名前、`primary` はプライマリサーバーの名前です。

ポリシー内の選択したホストに対してコマンドラインからアップグレードを手動で開始するには

ポリシー内の選択したホストのアップグレードを手動で開始するには、この手順を使用します。

メモ: この手順は、指定したポリシーの選択したメディアサーバーとクライアントのアップグレードを開始します。ポリシー内のすべてのメディアサーバーとクライアントのアップグレードを開始できます。詳細情報を参照できます。

[「ポリシー内のすべてのメディアサーバーまたはクライアントに対してコマンドラインからアップグレードを手動で開始するには」](#)

- 1 コマンドプロンプトを開いて、次のディレクトリに移動します。

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin`

UNIX または Linux の場合: `/usr/openv/NetBackup/bin`

- 2 次に示すように、`nbinstallcmd` コマンドを使用します。

```
nbinstallcmd -policy policy_name -schedule schedule  
{-host_filelist filename|-hosts client1, client2, clientN}
```

以下はその説明です。

- *policy_name* は配備ポリシーの名前です。
- *schedule* はスケジュールの名前です。
- *filename* は、アップグレードするメディアサーバーまたはクライアントのリストが含まれるファイルの名前です。
- *client1, client2, clientN* は、アップグレードするメディアサーバーまたはクライアントのリストです。

ポリシーを関連付けずにコマンドラインから 1 つのクライアントのアップグレードを手動で開始できます。nbinstallcmd コマンドに対して必要なオプションは、セキュリティの構成によって異なります。すべての利用可能なオプションとコマンドの使用例のリストについては、nbinstallcmd コマンドのマニュアルを参照してください。

[『NetBackup コマンドリファレンスガイド』](#)

VxUpdate を使用したメディアサーバーまたはクライアントからのアップグレードの手動による開始

ローカルでメディアサーバーまたはクライアントにログインし、即座に更新を強制実行するには、配備ジョブを手動で開始します。配備ポリシーを使用してすぐにアップグレードを開始するか、ポリシーを関連付けずにアップグレードを指定できます。アップグレードは、NetBackup バージョンの更新、または緊急バイナリなどの他のアップグレードの目的で使用できます。

VxUpdate を使用してメディアサーバーまたはクライアントからアップグレードを開始する理由には、特定の保守期間が設けられたミッションクリティカルシステムがあります。このようなシステムの一例は、ダウントIMEが限られているデータベースサーバーです。

メモ: 更新は、ローカルメディアサーバーまたはクライアントでのみ起動できます。メディアサーバーまたはクライアントで nbinstallcmd コマンドを使用し、他のメディアサーバーまたはクライアント上でジョブを起動することはできません。他のメディアサーバーまたはクライアントで更新を起動するには、プライマリサーバーからそれらを開始する必要があります。

VxUpdate を使用すると、コマンドラインを使用してプライマリサーバーからアップグレードを起動することもできます。詳細情報を参照できます。

[p.131 の「VxUpdate を使用したプライマリサーバーからのアップグレードの手動による開始」](#) を参照してください。

ターゲットクライアントまたはメディアサーバーで非ポリシーベースのアップグレードを直接開始した場合、旧バージョンのホストの nbinstallcmd バージョンは現在の nbinstallcmd バージョンではありません。nbinstallcmd コマンドの正確な形式については、現在インストールされているバージョンの **NetBackup** についての『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

この古いバージョンの nbinstallcmd により、通常の **VxUpdate** 動作で次のような例外が発生します。

- プライマリサーバーで **NetBackup** 証明書と外部証明書の両方を使用しており、ターゲットメディアサーバーまたはクライアントが **NetBackup 8.1.2** にある場合、ターゲットホストで非ポリシーベースのアップグレードを直接実行することはサポートされていません。次に示すオプションのいずれかを使用してアップグレードする必要があります。
 - **VxUpdate** を使用して、プライマリサーバーからクライアントまたはメディアサーバーをアップグレードします。
 - プライマリサーバー上でポリシーを作成します。次に、ターゲットクライアントまたはメディアサーバーでポリシーベースの nbinstallcmd を実行します。
 - ターゲットホストで非ポリシーベースのアップグレードを開始する前に、プライマリサーバーの外部証明書を無効にします。外部証明書は、アップグレードが正常に完了した後で有効にできます。
- クライアントまたはメディアサーバーが **NetBackup 8.2** 以前のバージョンにある場合、-components フラグは利用できません。このフラグは、**NetBackup Java GUI** と **JRE** のオプションインストールを有効にするために **NetBackup 8.3** で導入されました。**NetBackup 8.2** 以前のクライアントまたはメディアサーバーでアドホックの nbinstallcmd を実行すると、-components javagui_jre オプションはデフォルト値の MATCH に設定されます。この値を指定すると、アップグレード前のホストの **Java GUI** と **JRE** の状態と一致するようにアップグレードされます。アップグレード前のホストに **Java GUI** と **JRE** がインストールされている場合、アップグレード後もインストールされたままになります。アップグレード前のホストに **Java GUI** と **JRE** がインストールされていない場合、アップグレード後もインストールされません。

既存のポリシーに基づいてメディアサーバーまたはクライアントが開始した配備ジョブを開始するには

- 1 コマンドプロンプトからバイナリのディレクトリに移動します。

UNIX または Linux の場合: /usr/openv/netbackup/bin

Windows の場合: *install_path\NetBackup\bin*

- 2 nbinstallcmd を次のように使用します。

```
nbinstallcmd -policy policy -schedule schedule -master_server  
name
```

例: nbinstallcmd -policy all_clients -schedule install1812
-master_server primary1

ジョブが正常に開始された場合は、エラーメッセージは表示されずにコマンドプロンプトに戻ります。

メモ: nbinstallcmd コマンドを使用してメディアサーバーのアップグレードを開始する場合、-master_server と -media_server の両方のオプションを含める必要があります。この場合、これら両方のオプションの値が同じである必要があります。

- 3 NetBackup 管理者とともに、NetBackup 管理コンソールのアクティビティモニターを使用してアップグレード状態を監視します。

コマンドラインから、ポリシーを関連付けずにメディアサーバーまたはクライアントが開始した配備ジョブを起動できます。nbinstallcmdコマンドに必要なオプションは、セキュリティ構成およびアップグレードするコンピュータの NetBackup バージョンによって異なります。すべての利用可能なオプションとコマンドの使用例のリストについては、nbinstallcmd コマンドのマニュアルを参照してください。

[『NetBackup コマンドリファレンスガイド』](#)

配備ジョブの状態

アクティビティモニターで、配備ジョブの状態を監視および確認します。配備ジョブ形式は、VxUpdate ポリシーの新しい形式です。状態コード 0(ゼロ)で終了する配備ポリシーの親ジョブは、すべての子ジョブが正常に完了したことを示します。状態コード 1 で終了する親ジョブは、1つ以上の子ジョブが成功し、少なくとも1つが失敗したことを見ます。その他の状態コードは、エラーを示します。子ジョブの状態を確認して、失敗した理由を判断します。それ以外は、配備ジョブと他の NetBackup ジョブとの間に違いはありません。

配備コードの状態コードが 224 になる場合もあります。このエラーは、クライアントのハードウェアとオペレーティングシステムが誤って指定されていることを示します。このエラー

は、次の場所にある `bpplclients` コマンドを使用して配備ポリシーを変更することで修正できます。

Linux の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd`

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd`

次の構文を使用します。

```
bpplclients deployment_policy_name -modify client_to_update -hardware
new_hardware_value -os new_os_value
```

配備ポリシーは、オペレーティングシステムとハードウェアの値に、簡素化した命名スキームを使用します。`bpplclients` コマンドに示すように値を使用します。

表 7-2 配備ポリシーのオペレーティングシステムとハードウェア

オペレーティングシステム	ハードウェア
debian	x64
redhat	x64
suse	x64
redhat	ppc64le
suse	ppc64le
redhat	zseries
suse	zseries
aix	rs6000
solaris	sparc
solaris	x64
windows	x64

[証明書配備のセキュリティレベル (Security level for certificate deployment)]が[最高 (Very High)]に設定されている場合、セキュリティ証明書は VxUpdate アップグレードの一環としては配置されません。この設定は、[グローバルセキュリティ (Global security)] 設定にあります。

クライアントのアップグレードに VxUpdate を使用した後で、クライアントと通信できなくなった場合は、アップグレード中に適切なセキュリティ証明書が発行されたことを確認してください。証明書の手動配備が必要な場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

https://www.veritas.com/content/support/ja_JP/article.100039650

配備ジョブの状態コードが **7207** になる場合もあります。このエラーは、NetBackup 事前チェックまたはアップグレードのプロセスが完了するまでに予想より長い時間がかかる、または完了しない場合に発生する可能性があります。プライマリサーバーの NetBackup 構成で次の値を定義すると、ジョブが状態 **7207** で終了するまでに VxUpdate が待機する時間を構成できます。

VXUPDATE_CLIENT_READ_TIMEOUT_SECONDS

この値は、事前チェック操作とクライアントのアップグレード操作に許容される時間(秒)を制御します。デフォルト値は **1800 (30 分)** です。最短 **600 (10 分)**、または最長 **3600 (60 分)** まで設定できます。

VXUPDATE_SERVER_READ_TIMEOUT_SECONDS

この値は、サーバーのアップグレード操作に許容される時間(秒)を制御します。デフォルト値は **2700 (45 分)** です。最短 **600 (10 分)**、または最長 **5400 (90 分)** まで設定できます。

bpsetconfig コマンドを使用してプライマリサーバーの NetBackup 構成に値を追加する方法について詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

EEB 管理ビュー

[配備の管理 (Deployment management)]にある[EEB 管理 (EEB management)]タブには、環境で NetBackup EEB (Emergency Engineering Binary) を使用するためのウィンドウが表示されます。[EEB 管理 (EEB management)]タブには、NetBackup 環境内に配備されたすべての EEB が表示されます。

各 EEB には、問題の説明と、問題が解決された正式な NetBackup リリースが一覧表示されます。特定の EEB がインストールされているホストとインストールされていないホストのいずれかを表示できます。レビューと分析のために、EEB の情報を CSV ファイルにエクスポートできます。

個々の EEB を確認し、特定の EEB がインストールされているホストを判断できます。説明の情報と同様に、これらの詳細を CSV ファイルにエクスポートできます。

説明と修正されたバージョンの情報を表示するには、NetBackup Web UI を実行しているコンピュータがインターネットにアクセスできる必要があります。この情報は、NetBackup SORT Web サイトの最新データから収集されます。SORT API に問題がある場合は、SORT 監査サイトの URL が表示されます。

[EEB の管理 (EEB Management)]ビューには、NetBackup 11.0 以降の NetBackup アプライアンスホストにインストールされているすべての EEB を表示できます。

[EEB 管理 (EEB Management)]ビューは VxUpdate の[今すぐ配備 (Deploy Now)]と統合されているため、EEB をインストールしていないホストに EEB を配備できます。

8.0 以前のクライアントとメディアサーバーでは、この機能を使用できないことに注意してください。

参照先

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成](#)
- [NetBackup データベースユーザー](#)
- [クラスタ化されたプライマリサーバーの非アクティブノードで証明書を生成する](#)
- [NetBackup Java Runtime Environment について](#)
- [アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除](#)
- [NetBackup Web ユーザーインターフェースについて](#)
- [NetBackup 応答ファイルについて](#)
- [プライマリサーバーからクライアントへのクライアントソフトウェアのプッシュインストールについて](#)
- [NetBackup IT Analytics Data Collector について](#)
- [NetBackup IT Analytics Data Collector バイナリの手動によるインストールまたはアンインストール](#)
- [NetBackup IT Analytics Data Collector の手動構成](#)
- [NetBackup IT Analytics Data Collector の手動でのアップグレード](#)
- [維持される Java Virtual Machine のオプション](#)
- [RBAC ブートストラップについて](#)
- [NetBackup ソフトウェアの入手について](#)
- [NetApp クラスタのためのアップグレード前の追加手順](#)
- [Replication Director を使用した NetApp ディスクアレイの使用](#)

- [NetBackup のバージョン間の互換性について](#)
- [UNIX および Linux の場合のアップグレード要件](#)
- [Windows および Windows クラスタのアップグレード要件](#)
- [Windows クラスタのアップグレードの要件](#)
- 新しいメディアサーバーに全データを移行してクラスタ化されたメディアサーバーを削除する
- [Amazon クラウドストレージサーバーのアップグレード後の手順](#)
- サーバーのアップグレード後のクライアントのアップグレード
- アップグレードエラーのロールバック手順
- [NetBackup プライマリサーバーとドメインのサイズについてのガイダンス](#)

NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成

NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウント要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。

メモ: セキュリティのため、管理者またはスーパーユーザー権限を持つ Web サーバーユーザーまたはグループは作成しないでください。

多数の手順を実行すると、オペレーティングシステムでユーザーとグループを作成できます。特定のいくつかの方法を示していますが、他の方法でも同じ目標を達成できる可能性があります。ホームディレクトリのパス、ユーザー名、およびグループ名はハードコードされていないため、変更することができます。デフォルトのローカルユーザー名は nbwebsvc、デフォルトのローカルグループ名は nbwebgrp です。ユーザーとグループには、デーモンを実行するための十分なアクセス権がある必要があります。

このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.197 の「UNIX および Linux の場合のアップグレード要件」](#) を参照してください。

オペレーティングシステム固有のアカウントとグループの要件に注意してください。

- Linux のクラスタ環境では、すべてのクラスタノードでローカルアカウントが一貫して定義されていることを確認します。UID は、ローカルアカウントごとに同じである必要があります。UNIX で LDAP アカウントを使うことができます。
- Windows のクラスタ化されたプライマリサーバーでは、ドメインアカウントを使用する必要があります。非クラスタ環境ではドメインアカウントを使用できますが、必須ではありません。
- Windows のクラスタ化されたプライマリサーバーでは、ドメイングループを使用する必要があります。

これらの要件のいずれかが満たされない場合、NetBackup プライマリサーバーのインストールは失敗します。Windows では、インストールプロセスの一部として、ユーザーアカウントのパスワードを指定するように求められます。

メモ: Web サーバーアカウントに関連付けられたパスワードの期限が初期構成後に切れた場合、NetBackup はパスワードの期限が切れたことを通知しません。アカウントとパスワードはオペレーティングシステムが管理するため、この動作は正常であり、想定どおりです。

Web サーバーがアクティブなままであるかぎり、アカウントと Web サーバーは正常に動作し続けます。

Web サーバーを再起動したときや、nbwmc サービスを再起動しようとした場合、サービスは期限切れのパスワードが原因で失敗します。オペレーティングシステムの該当する領域に移動し、正しいパスワードを入力して、サービスを再起動します。

Web サービスアカウントとグループに関する詳しい情報を参照できます。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』および Web サービスアカウントのセクションを参照してください。

ユーザーとローカルグループを作成する方法:

1 ローカルグループを作成します。

- Linux の場合: # groupadd nbwebgrp
- Windows の場合: c:>net localgroup nbwebgrp /add

2 ローカルユーザーを作成します。

- Linux の場合: # useradd -g nbwebgrp -c 'NetBackup Web Services account' -d /usr/openv/wmc nbwebsvc
- Windows の場合: c:>net user nbwebsvc strong_password /add

3 (該当する場合) Windows の場合のみ、ユーザーをグループのメンバーにします。

```
C:>net localgroup nbwebgrp nbwebsvc /add
```

4 (該当する場合) Windows の場合のみ、[サービスとしてログオン] 権限をユーザーに付与します。

- [コントロールパネル]、[管理ツール]、[ローカルセキュリティポリシー]の順に進みます。
- [セキュリティの設定]で、[ローカルポリシー]、[ユーザー権利の割り当て]の順にクリックします。
- [サービスとしてログオン]を右クリックして[プロパティ]を選択します。
- ローカルユーザーを追加します。デフォルトのローカルユーザー名は nbwebsvc です。
- 変更を保存して[サービスとしてログオン]の[プロパティ]ダイアログボックスを閉じます。

NetBackup データベースユーザー

NetBackup 10.2 アップグレードの一環として、NetBackup データベースは新しいデータベースに変換されます。このデータベースは、権限が制限されているユーザー アカウントで動作します。Linux の場合、このアカウントは root 以外のユーザーである必要があります。このアカウントは、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）上にある必要があります。

メモ: セキュリティのため、管理者またはスーパーユーザー権限を持つアカウントは作成しないでください。ユーザーを sudoer リストに追加しないでください。

このユーザーは、さまざまな方法を使用して作成できます。特定のいくつかの方法を示していますが、他の方法でも同じ目標を達成できる可能性があります。このユーザーには、 демон を実行するための十分なアクセス権がある必要があります。このトピックに関する詳細情報を参照できます。

[p.197 の「UNIX および Linux の場合のアップグレード要件」](#) を参照してください。

オペレーティングシステム固有のアカウントの要件に注意してください。

- サービスアカウントが root である場合にのみ、Linux では別のデータベースユーザー アカウントが必要です。サービスアカウントが root 以外の場合は、追加のユーザーを作成する必要はありません。
- Linux のクラスタ環境では、すべてのクラスタノードでローカルアカウントが一貫して定義されていることを確認します。UID は、ローカルアカウントごとに同じである必要があります。UNIX で LDAP アカウントを使うことができます。

- Windows のクラスタ化されたプライマリサーバーでは、ドメインアカウントを使用する必要があります。非クラスタ環境ではドメインアカウントを使用できますが、必須ではありません。

これらの要件が満たされない場合、NetBackup プライマリサーバーのインストールは失敗します。Windows では、インストールプロセスの一部として、ユーザー アカウントのパスワードを指定するように求められます。

メモ: アカウントに関連付けられたパスワードの期限が初期構成後に切れた場合、NetBackup はパスワードの期限が切れたことを通知しません。アカウントとパスワードはオペレーティングシステムが管理するため、この動作は正常であり、想定どおりです。

NetBackup カタログがアクティブである間は、NetBackup は正常に動作し続けます。

NetBackup の再起動を試みると、パスワードが期限切れのため再起動に失敗します。オペレーティングシステムの該当する領域に移動し、正しいパスワードを入力して、サービスを再起動します。

データベースユーザー アカウントを作成するには

1 ローカルユーザーを作成します。

- Linux の場合: `useradd -c 'NetBackup database user account'
username`
- Windows の場合: `c:\>net user username strong_password /add`

2 (該当する場合) Windows の場合のみ、[サービスとしてログオン] 権限をユーザーに付与します。

- [コントロールパネル]、[管理ツール]、[ローカルセキュリティポリシー] の順に進みます。
- [セキュリティの設定] で、[ローカルポリシー]、[ユーザー権利の割り当て] の順にクリックします。
- [サービスとしてログオン] を右クリックして [プロパティ] を選択します。
- ローカルユーザーを追加します。
- 変更を保存して [サービスとしてログオン] の [プロパティ] ダイアログボックスを閉じます。

クラスタ化されたプライマリサーバーの非アクティブノードで証明書を生成する

クラスタ化されたプライマリサーバーのインストールまたはアップグレードが完了したら、すべての非アクティブノードで証明書を生成する必要があります。この手順は、クラスタの非アクティブノードのバックアップおよびリストアを成功させるために必要です。

クラスタ化されたプライマリサーバーの非アクティブノードで証明書を生成する

メモ: 特に明記しない限り、すべてのコマンドは非アクティブノードから発行します

- 1 (該当する場合) すべての非アクティブノードをクラスタに追加します。

クラスタのすべてのノードが現在クラスタの一部ではない場合、最初にこれらをクラスタに追加します。このプロセスについて詳しくは、オペレーティングシステムのクラスタの手順を参照してください。

- 2 nbcertcmdコマンドを実行し、非アクティブノードに認証局の証明書を格納します。

Linux の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/nbcertcmd -getCACertificate`

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\nbcertcmd -getCACertificate`

- 3 nbcertcmd コマンドを実行し、非アクティブノードでホスト証明書を生成します。

`nbcertcmd -getCertificate`

- 4 (該当する場合) nbcertcmd -getCertificateコマンドが失敗し、トークンが必要なことを示すエラーメッセージが表示される場合は、認証局からのトークンが必要です。表示されている手順を使用してトークンを取得し、正しく使用します。

- アクティブノードで、必要な変更を許可するように、示されているとおりにbpnbatコマンドを使用します。認証ブローカーを要求するメッセージが表示されたら、ローカルノード名ではなく、仮想サーバー名を入力します。

`bpnbat -login -loginType WEB`

- アクティブノードで、nbcertcmd コマンドを使用してトークンを作成します。

`nbcertcmd -createToken -name token_name`

この手順ではトークン名は重要ではありません。コマンドを実行すると、トークン文字列値が表示されます。次のコマンドで必要になるため、この値をメモします。

- 非アクティブノードで、nbcertcmd コマンドとともに認証トークンを使用して、ホスト証明書を格納します。

`nbcertcmd -getCertificate -token`

このコマンドでは、トークン文字列値が求められます。`nbcertcmd -createToken` コマンドから入手したトークン文字列値を入力します。

証明書に関する詳しい情報を参照できます。『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で、プライマリサーバーノードでの証明書の配備に関するセクションを参照してください。

NetBackup Java Runtime Environment について

次の製品のいずれかをインストールするときに、NetBackupはカスタマイズされたバージョンの Java Runtime Environment (JRE) をインストールします。カスタマイズされたバージョンの JRE には、標準 JRE インストールに含まれる man、plugin など、すべてのディレクトリが含まれているわけではありません。

JRE をインストールする製品は、次のとおりです。

- NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、UNIX および Linux クライアントソフトウェア
- NetBackup Java リモート管理コンソール

NetBackup 8.3 以降、Linux メディアサーバーと Windows メディアサーバー、および UNIX クライアントと Linux クライアントでは、Java GUI と JRE パッケージはオプションです。

以前のリリースと同様に、Java GUI および JRE パッケージは必須であるため、すべてのプライマリサーバーに自動的にインストールされます。Java GUI と JRE は、Windows クライアントのデフォルトインストールの一部ではありません。Windows クライアントでこの機能が必要な場合は、Java リモート管理コンソールをインストールしてください。

NetBackup のさまざまなインストール方法が用意されているため、ユーザーは Java GUI や JRE のパッケージをインストールするかどうかを選択できます。インストールまたはアップグレード後の Java GUI や JRE のインストールまたは削除についての詳しい情報も参照できます。

[p.149 の「アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除」](#)を参照してください。

以前は、NetBackup と共にインストールされる JRE パッケージは、ソフトウェアを以降のリリースにアップグレードした場合にのみ更新されました。nbcomponentupdate ユーティリティを使用して、JRE を以下の製品でサポートされているバージョンに更新することができます。

- NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、UNIX および Linux クライアントソフトウェア
- NetBackup Java リモート管理コンソール

メモ: このユーティリティを使用して、NetBackup Plug-in for VMware vCenter の JRE を更新することはできません。

システムで NetBackup 8.0 以降を実行している場合、表 A-1 を使用して、nbcomponentupdate ユーティリティの場所を特定します。

表 A-1 JRE 更新ユーティリティの場所

製品	オペレーティングシステム	パス
NetBackup	Windows	<code>install_path\NetBackup\java\nbcomponentupdate.exe</code>
	UNIX または Linux	<code>/usr/openv/java/nbcomponentupdate</code>
NetBackup Java リモート管理コンソール	Windows	<code>install_path\java\nbcomponentupdate.exe</code>

NetBackupとともにインストールされる JRE は、その NetBackup リリースに対してサポートされているメジャーバージョンです。サポートされているメジャー JRE バージョンのマイナーバージョンに更新するには、このユーティリティを使用します。たとえば、NetBackup 8.0 が JRE 1.8.0.31 をインストールした場合、サポート対象のメジャーバージョンは 1.8 です。JRE 1.8.0.92 に更新するには、このユーティリティを使用します。

JRE ベンダーがインストール済みの JRE バージョンに対しライフサイクル終了を宣言した場合にのみ別のメジャー JRE バージョンに更新します。お使いの環境にインストール済みの JRE バージョンでもある JRE 1.8 に対し、JRE ベンダーがライフサイクル終了を宣言した場合は、JRE 1.9 に更新します。

JRE を更新しようとする前に、NetBackup などの製品を終了します。更新時に製品が実行中である場合、ユーティリティが終了し、製品を終了するように求めるエラーメッセージが表示されます。

注意: JRE 更新が進行中の場合、ユーティリティを停止しないでください。このアクションにより、JRE を使用する NetBackup などの製品が不安定になる可能性があります。

追加バージョンの JRE がその他のアプリケーションに対してシステムにインストールされている場合、NetBackup JRE はそれらの JRE と干渉しません。NetBackup JRE は Web ブラウザとの統合を行ったり、Java アプレットまたは Web Start の実行を許可したりするものではありません。したがって、NetBackup JRE は Java アプレットまたは Web Start の脆弱性を利用するタイプのブラウザベースの攻撃で使用されることはありません。

NetBackup JRE アラートに関する詳しい情報を参照できます。

<http://www.veritas.com/docs/TECH50711>

アップグレード後の Java コンポーネントの追加または削除

アップグレードが完了したら、Java コンポーネントを追加または削除できます。プライマリサーバーで、アップグレードの完了後に NetBackup 管理コンソールを追加または削除できます。メディアサーバー、UNIX クライアントおよび Linux クライアントでは、アップグレード後に NetBackup 管理コンソールおよび JRE を追加または削除できます。メディアサーバー、UNIX クライアントおよび Linux クライアントでは、NetBackup 管理コンソールおよび JRE の両方と一緒に追加または削除することをお勧めします。

Java GUI および JRE の追加

パッケージを追加するには、次に示すオプションのいずれかを使用します。

- (メディアサーバーおよびクライアント) VxUpdate ポリシー (アドホック操作) を作成して実行し、Java GUI および JRE パッケージを含めるように指定します。
- UNIX の場合は、アップグレードメディアにアクセスし、次に示すコマンドを実行します。

Linux rpm -U VRTSnbjre.rpm
 rpm -U VRTSnbjava.rpm

AIX installpp -ad VRTSnbjre.image all
 installpp -ad VRTSnbjava.image all

Debian Debian インストールスクリプトを再実行し、正しい値を指定して、Java GUI と JRE パッケージを追加します。

- Windows の場合は、インストールメディアにアクセスし、次に示すパッケージを実行します。
 - Cohesity NetBackup JRE.msi
 - Cohesity NetBackup Java GUI.msi

Java GUI および JRE の削除

パッケージを削除するには、次に示すオプションのいずれかを使用します。

- (メディアサーバーおよびクライアント) VxUpdate ポリシー (アドホック操作) を作成して実行し、Java GUI および JRE パッケージを除外するように指定します。
- UNIX の場合、次のコマンドを実行します。

Linux	rpm -e VRTSnbjava rpm -e VRTSnbjre
AIX	installp -u VRTSnbjre installp -u VRTSnbjava
Debian	Debian インストールスクリプトを再実行し、正しい値を指定して、Java GUI と JRE パッケージを削除します。

■ Windows の場合

- スタートメニューで[設定]、[コントロールパネル]の順に選択します。
- [コントロールパネル]ウインドウで、インストール済みのプログラムとアプリケーションの適切なユーティリティを選択します。
- [現在インストールされているプログラム]のリストで[Cohesity NetBackup Java]を選択し、[削除]をクリックします。
- [現在インストールされているプログラム]のリストで[Cohesity NetBackup JRE]を選択し、[削除]をクリックします。

NetBackup Web ユーザーインターフェースについて

バージョン 8.1.2 で、NetBackup は NetBackup で使用する新しい Web ユーザーインターフェースを導入しました。新しいインターフェースは、使いやすさと機能が向上するように設計されています。現時点では、NetBackup 管理コンソールの一部の機能は、新しいインターフェースで利用可能になっていません。

NetBackup は、新しいインターフェースの通信を暗号化するために、トランスポート層セキュリティ (TLS) プロトコルを使用します。NetBackup Web サーバーで TLS を有効にするには、NetBackup ホストを識別する TLS 証明書が必要です。NetBackup は、クライアントとホストの検証に自己署名証明書を使用します。自己署名証明書は、Web ブラウザと NetBackup Web サーバー間の TLS 通信を有効にするため、インストール時に自動的に生成されます。NetBackup Web サービスをサポートするために、サードパーティの証明書を作成して実装して、自己署名証明書の代わりに使用できます。証明書は TLS 暗号化と認証で使用されます。詳しくは、『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup Web UI から NetBackup プライマリサーバーへの初回サインイン

NetBackup のインストール後に、root ユーザーまたは管理者が NetBackup Web UI に Web ブラウザからサインインして、ユーザー向けに RBAC の役割を作成する必要があります。役割は、組織のユーザーの役割に基づいて、Web UI を通じて NetBackup 環境

にアクセスするためのアクセス権をユーザーに付与します。一部のユーザーは、デフォルトで Web UI にアクセスできます。

権限を持つユーザー、役割の作成、Web UI へのサインインとサインアウトについて詳しくは、『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 応答ファイルについて

NetBackup では、事前定義された一連の構成オプションを使用して、無人インストール、サイレントインストール、アップグレードを実行する方法を提供します。これらのオプションを使うと、次のことが可能になります。

- 一部のデフォルト値を上書きします。
- 対話式のインストール時の質問への回答を回避します。

UNIX と Linux では、プライマリ、メディア、およびクライアントのテンプレートは、<https://www.myveritas.com> ライセンシングポータルからダウンロードした、NetBackup インストールイメージの最上位で利用可能です。これらのテンプレートは、必要に応じて変更し、インストール時とアップグレード時に使用できるように /tmp/NBInstallAnswer.conf に配置する必要があります。

Windows では、プライマリ、メディア、およびクライアントのテンプレートは、<https://www.myveritas.com> ライセンスポータルからダウンロードした、NetBackup インストールイメージの最上位にある windows_x64 ディレクトリで利用可能です。これらのテンプレートはそれぞれ、silentprimary.cmd, silentmedia.cmd, silentclient.cmd と呼ばれます。

インストールスクリプトを実行する前にターゲットホストに NetBackup 応答ファイルを設定します。ファイルが存在しない場合はファイルを作成します。サポート対象のエントリを関連する情報とともに示します。

表 A-2 テンプレートのすべてのオプションと必要なコンピュータ

オプション	NetBackup の役割	プラットフォーム	アップグレードに必要かどうか
「ABORT_INSTALL」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「ACCEPT_EULA」	プライマリ、メディア、およびクライアント	UNIX および Linux	不要
「ACCEPT_REVERSE_CONNECTION」	クライアント	すべて	不要
「ADDITIONALSERVERS」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要

オプション	NetBackup の役割	プラットフォーム	アップグレードに必要かどうか
「ALLOW_LONG_NBDB_MIGRATION_TIME」	プライマリ	Windows および Linux	必要
「ALLOW_PRE_90_UPGRADE」	プライマリ	すべて	詳しくは、オプションを参照してください。
「APPLICATION_FOLDER」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「AUTHORIZATION_TOKEN」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「CLIENT」	クライアント	Windows	必要
「CLIENT_NAME」	メディアおよびクライアント	UNIX および Linux	不要
「DATABASE_USER」	プライマリ	Linux	詳しくは、「DATABASE_USER」を参照してください。
「ECA_CERT_PATH」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「ECA_CERT_STORE」	メディアおよびクライアント	Windows	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「ECA_CRL_CHECK_LEVEL」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「ECA_CRL_PATH」	メディアおよびクライアント	すべて	ECA_CRL_CHECK_LEVEL=USE_PATH が指定された場合のみ。
「ECA_KEY_PASSPHRASEFILE」	メディアおよびクライアント	すべて	不要
「ECA_PRIVATE_KEY_PATH」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。
「ECA_TRUST_STORE_PATH」	メディアおよびクライアント	すべて	詳しくは、「セキュリティ構成の注意事項について」を参照してください。

オプション	NetBackup の役割	プラットフォーム	アップグレードに必要かどうか
「 <code>IGNORE_MISSING_CATALOG_BACKUP</code> 」	プライマリ	すべて	不要
「 <code>INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE</code> 」	メディアおよび UNIX クライアント	すべて	UNIX および Linux のメディアサーバーとクライアント: 不要 Windows メディアサーバー: 必要
「 <code>INCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY</code> 」	プライマリ	すべて	Linux: 不要 Windows: 必要
「 <code>INCLUDE_VRTSPDDEU_CLIENT</code> 」	クライアント	Linux	不要 役割とプラットフォームについて詳しくは、オプションの詳細を参照してください。
「 <code>INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR</code> 」	プライマリ	すべて	不要
「 <code>INSTALL_PATH</code> 」	プライマリ、メディア、およびクライアント	UNIX および Linux	不要。追加情報について詳しくは、オプションの詳細を参照してください。
「 <code>LICENSE</code> 」	プライマリ	すべて	詳しくは、オプションを参照してください。
「 <code>MACHINE_ROLE</code> 」	メディアおよびクライアント	UNIX および Linux	不要
「 <code>MEDIA_SERVER</code> 」	クライアント	UNIX および Linux	不要
「 <code>MEDIASERVER</code> 」	メディア	Windows	不要
「 <code>MERGE_SERVERS_LIST</code> 」	クライアント	UNIX および Linux	不要
「 <code>PRIMARYSERVER</code> 」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	必要
「 <code>PROCEED_WITH_INSTALL</code> 」	プライマリ、メディア、およびクライアント	UNIX および Linux	不要
「 <code>RBAC_DOMAIN_NAME</code> 」	プライマリ	Linux	不要
「 <code>RBAC_DOMAIN_TYPE</code> 」	プライマリ	Linux	不要
「 <code>RBAC_PRINCIPAL_NAME</code> 」	プライマリ	Linux	不要
「 <code>RBAC_PRINCIPAL_TYPE</code> 」	プライマリ	Linux	不要

オプション	NetBackup の役割	プラットフォーム	アップグレードに必要かどうか
「SECURITY_CONFIGURATION」	メディアおよびクライアント	すべて	不要
「SERVER」	メディアおよびクライアント	UNIX および Linux	不要
「SERVICES」	クライアント	UNIX および Linux	不要
「SERVICESTARTTYPE」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「SERVICE_USER」	プライマリ	Linux	必要
「START_JOB_DAEMONS」	プライマリ	Linux	不要
「STOP_NB_BEFORE_VCREDIST」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「STOP_NBU_PROCESSES」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「VCREDIST_ATTEMPT_PREFERENCE」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「VCREDIST_RESTART_PREFERENCE」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「VNEDTD_PORT」	プライマリ、メディア、およびクライアント	Windows	不要
「VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT」	プライマリ	すべて	不要
「WEBSVC_DOMAIN」	プライマリ	Windows	必要
「WEBSVC_GROUP」	プライマリ	すべて	UNIX および Linux: 不要 Windows: 必要
「WEBSVC_PASSWORD_PLAIN」	プライマリ	Windows	必要
「WEBSVC_USER」	プライマリ	すべて	UNIX および Linux: 不要 Windows: 必要

プラットフォームおよび役割別の応答ファイルオプション

これらの表には、プラットフォームと役割に基づいて利用可能な応答ファイルオプションが示されています。一覧に示されているオプションの一部は必須ではありません。詳しくは、[表 A-2](#) またはオプションの詳細を参照してください。

表 A-3 プラットフォームと役割

役割	Windows コンピュータ	UNIX および Linux コンピュータ
プライマリ	ABORT_REBOOT_INSTALL ADDITIONALSERVERS ALLOW_LONG_NBDB_MIGRATION_TIME ALLOW_PRE_90_UPGRADE APPLICATION_FOLDERINCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY IGNORE_MISSING_CATALOG_BACKUP INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR LICENSE PRIMARYSERVER SERVICESSTARTTYPE STOP_NB_BEFORE_VCREDITIST STOP_NBU_PROCESSES VCREDITIST_ATTEMPT_PREFERENCE VCREDITIST_RESTART_PREFERENCE VNETD_PORT VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT WEBSVC_DOMAIN WEBSVC_GROUP WEBSVC_PASSWORD_PLAIN WEBSVC_USER	ACCEPT_EULA ALLOW_LONG_NBDB_MIGRATION_TIME ALLOW_PRE_90_UPGRADE CLIENT_NAME DATABASE_USER INCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY IGNORE_MISSING_CATALOG_BACKUP INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR LICENSE MACHINE_ROLE MEDIA_SERVER PROCEED_WITH_INSTALL RBAC_DOMAIN_NAME RBAC_DOMAIN_TYPE RBAC_PRINCIPAL_NAME RBAC_PRINCIPAL_TYPE SERVER SERVICE_USER START_JOB_DAEMONS VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT WEBSVC_GROUP WEBSVC_USER

役割	Windows コンピュータ	UNIX および Linux コンピュータ
メディア	ABORT_REBOOT_INSTALL ADDITIONALSERVERS APPLICATION_FOLDER AUTHORIZATION_TOKEN CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT ECA_CERT_PATH ECA_CERT_STORE ECA_CRL_CHECK_LEVEL ECA_CRL_PATH ECA_KEY_PASSPHRASEFILE ECA_PRIVATE_KEY_PATH ECA_TRUST_STORE_PATH INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE MEDIASERVER PRIMARYSERVER SERVICESTARTTYPE STOP_NB_BEFORE_VCREDIST STOP_NBU_PROCESSES VCREDIST_ATTEMPT_PREFERENCE VCREDIST_RESTART_PREFERENCE VNETD_PORT	ACCEPT_EULA AUTHORIZATION_TOKEN CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT CLIENT_NAME ECA_CERT_PATH ECA_CRL_CHECK_LEVEL ECA_CRL_PATH ECA_KEY_PASSPHRASEFILE ECA_PRIVATE_KEY_PATH ECA_TRUST_STORE_PATH INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE MACHINE_ROLE PROCEED_WITH_INSTALL SERVER
クライアント	ABORT_REBOOT_INSTALL ACCEPT_REVERSE_CONNECTION ADDITIONALSERVERS APPLICATION_FOLDER AUTHORIZATION_TOKEN CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT CLIENT ECA_CERT_PATH ECA_CERT_STORE ECA_CRL_CHECK_LEVEL ECA_CRL_PATH ECA_KEY_PASSPHRASEFILE ECA_PRIVATE_KEY_PATH ECA_TRUST_STORE_PATH PRIMARYSERVER SERVICESTARTTYPE STOP_NB_BEFORE_VCREDIST STOP_NBU_PROCESSES VCREDIST_ATTEMPT_PREFERENCE VCREDIST_RESTART_PREFERENCE VNETD_PORT	ACCEPT_EULA ACCEPT_REVERSE_CONNECTION AUTHORIZATION_TOKEN CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT CLIENT_NAME ECA_CERT_PATH ECA_CRL_CHECK_LEVEL ECA_CRL_PATH ECA_KEY_PASSPHRASEFILE ECA_PRIVATE_KEY_PATH ECA_TRUST_STORE_PATH INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE INCLUDE_VRTSPDDEU_CLIENT MACHINE_ROLE MEDIA_SERVER MERGE_SERVERS_LIST PROCEED_WITH_INSTALL SERVER SERVICES

セキュリティ構成の注意事項について

NetBackup のバージョンおよび実行される操作によって、テンプレートファイルに必要なセキュリティパラメータが決まります。

初期インストールまたは 8.1 より前のバージョンのアップグレードでのセキュリティ構成に関する注意事項

この操作が初回インストール、または 8.1 より前のバージョンからのアップグレードの場合は、少なくとも 1 セットのセキュリティ構成パラメータを指定する必要があります。セキュリティ構成はスキップできますが、スキップした場合は、インストールまたはアップグレード後に各ターゲットホストで手順を手動で実行する必要があります。

NetBackup プライマリサーバーを認証局として使用するには、プライマリサーバーの CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT を指定する必要があります。プライマリサーバーのセキュリティレベル、またはこのコンピュータがプライマリサーバーですでに構成されているかどうかに応じて、AUTHORIZATION_TOKEN オプションが必要になることがあります。詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.000127129 を参照してください。

UNIX および Linux で外部認証局を使用するには、ECA_CERT_PATH、ECA_CRL_CHECK_LEVEL、ECA_PRIVATE_KEY_PATH、ECA_TRUST_STORE_PATH の値が必須です。詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300 を参照してください。

詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で外部 CA と外部証明書の章を参照してください。

Windows で外部認証局を使用するには、ECA_CERT_STORE と ECA_CRL_CHECK_LEVEL の値を指定するか、UNIX と Linux で以前に指定したすべての値を指定します。

ECA_CRL_PATH と ECA_KEY_PASSPHRASEFILE の値は省略可能です。詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300 を参照してください。

詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で外部 CA と外部証明書の章を参照してください。

NetBackup 8.1 以降のアップグレードのセキュリティ構成に関する注意事項

すでに安全な通信が構成されているバージョンの NetBackup からアップグレードする場合 (NetBackup 8.1 以降)、CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT と AUTHORIZATION_TOKEN の値は無視されます。

NetBackup 8.2 以降のアップグレードのセキュリティ構成に関する注意事項

ECA がすでに構成されているバージョンの NetBackup からアップグレードする場合 (NetBackup 8.2 以降)、すべての ECA* パラメータは無視されます。

外部認証局の構成のスキップについて

認証局を構成せずにインストールまたはアップグレードを続行するには、`SECURITY_CONFIGURATION` キーを含め、そのキーを `SKIP` に設定します。`CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT`、`AUTHORIZATION_TOKEN`、およびすべての `ECA_` 値を応答ファイルから削除します。必要な認証局コンポーネントを構成せずにインストールまたはアップグレードを続行すると、バックアップとリストアが失敗します。

`ABORT_REBOOT_INSTALL`

- 説明: このオプションは、使用中の 1 つ以上のファイルに対して再起動が必要になるような上書きがされている場合に、残りの手順を続行するかどうかを指定します。1 に設定すると、インストールは停止し、システムは元の状態にリストアされ、再起動の必要はありません。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: 0
- 必要/不要: 不要。
- `ABORT_REBOOT_INSTALL 0 | 1`
- [表 A-2](#) に戻ります。

`ACCEPT_EULA`

- 説明: このオプションは、**EULA** の条項に同意し、インストールまたはアップグレードを続行するかどうかを指定します。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux**
- デフォルト値: なし
- 必要/不要: 不要
- `ACCEPT_EULA = yes | no`
- [表 A-2](#) に戻ります。

`ACCEPT_REVERSE_CONNECTION`

- 説明: NAT クライアントと NetBackup ホストとの接続方法を識別する場合に、このオプションを使用します。許可される値は `TRUE` と `FALSE` です。NetBackup で NAT をサポートする場合はこのオプションを `TRUE` に、それ以外の場合は `FALSE` に設定します。次の場合、`ACCEPT_REVERSE_CONNECTION=FALSE` を設定します。
 - NetBackup で NAT クライアントをサポートしない場合。
 - NetBackup クライアントがファイアウォールの背後に存在しない場合。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** と **Windows** の両方。

- デフォルト値: FALSE
- ACCEPT_REVERSE_CONNECTION=TRUE | FALSE
- [表 A-2](#) に戻ります。

ADDITIONALSERVERS

- 説明: このオプションは、プライマリサーバーにセキュリティ要求をプロキシするために使用される NetBackup メディアサーバーを含める場合に使用します。このホストの前回のインストール以降に追加されたサーバーのみを一覧表示します。インストール処理では、既存のサーバーのセットが新しいものと統合されています。IP アドレスの使用はサポートされていません。有効な入力値は、完全修飾コンピュータ名のカンマで区切られたリストです。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- ADDITIONALSERVERS server1,server2,servern
- [表 A-2](#) に戻ります。

ALLOW_LONG_NBDB_MIGRATION_TIME

- 説明: このオプションは、NetBackup 11.0 より前のプライマリサーバーからのアップグレードを続行できるかどうかを指定します。NetBackup 11.0 以降のバージョンでは、新しいスケールアウトデータベースを使用します。NetBackup 11.0 より前の場合、アップグレードに時間がかかることがあります。時間がかかることで、NetBackup の新しいデータベースへの移行が可能になります。この値はプライマリサーバーにのみ適用できます。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** と **Windows** の両方。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 必要。
- ALLOW_LONG_NBDB_MIGRATION_TIME = yes | no
- [表 A-2](#) に戻ります。

ALLOW_PRE_90_UPGRADE

- 説明: このフィールドはプライマリサーバーのみを対象としています。この値は、9.0 より前のリリースの NetBackup から NetBackup 9.0 以降へのアップグレードを続行できるかどうかを判定します。アップグレードには、無制限の有効期限変換プロセスが含まれます。この変換は、9.0 より前の NetBackup から 9.0 以降の NetBackup にアップグレードするときにのみ行われます。アップグレードの動作とこのオプションの必要性は、プライマリサーバーのプラットフォームによって異なります。

- Windows

この値は、Windows プライマリサーバーのサイレントアップグレードに必要です。アップグレードを続行する場合は 1 を指定し、アップグレードを停止する場合は 0 を指定します。この値は、対話形式の Windows プライマリサーバーのアップグレード中は無視されます。NetBackup カタログのサイズと必要な変換時間によっては、アップグレードを続行するかどうかを確認するメッセージが表示されることがあります。

- Linux

Linux プライマリサーバーの場合は、yes または no を指定するとユーザーに確認メッセージが表示されなくなります。無制限の有効期限変換によってアップグレードプロセスが延長されることが予想される場合、値 yes はアップグレードを続行することを意味します。値 no はアップグレードが停止することを意味します。この値を指定しない場合、アップグレードを続行するかどうかを確認するメッセージが NetBackup によって表示されます。

NetBackup 9.0 以降のバージョンでは、2038 年より先の有効期限がサポートされています。NetBackup の以前のバージョンとの互換性を確保するために、無制限の有効期限が設定されたすべての項目は、新しい無制限の有効期限の値を反映するようになります。この変換によって、アップグレードを完了するために必要な時間が長くなる場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

https://www.veritas.com/content/support/en_US/article.100048600

- 該当するプラットフォーム: UNIX と Windows の両方。
- デフォルト値: なし
- 必要/不要: プラットフォームおよびアップグレード方法に依存します。
- ALLOW_PRE_90_UPGRADE=yes|no (UNIX)
ALLOW_PRE_90_UPGRADE=1|0 (Windows)
- 表 A-2 に戻ります。

APPLICATION_FOLDER

- 説明: このオプションは、NetBackup のアプリケーションフォルダを指定します。ベースディレクトリへの完全修飾パスが必要です。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要
- APPLICATION_FOLDER=C:\Program Files\Veritas
- 表 A-2 に戻ります。

AUTHORIZATION_TOKEN

- 説明: このオプションは、NetBackup がホスト証明書の取得時に認証トークンまたは再発行トークンを自動的に使用するかを指定します。AUTHORIZATION_TOKEN は大文字で 16 文字です。一部の環境では、バックアップおよびリストアが正常に動作するために認証トークンが必要です。この情報が必要な場合に、応答ファイルに指定されていないと、インストールは失敗します。SKIP を指定すると、インストーラはトークンを含まずにホスト証明書を取得しようとします。環境によっては、この選択により、インストール後に手動による追加の手順が必要となる場合があります。
AUTHORIZATION_TOKEN は、次のいずれかの条件では無視されることに注意してください。
 - ECA がプライマリサーバーで使用されている
 - プライマリサーバーのセキュリティレベルが High より低い値に設定されている
- 該当するプラットフォーム: UNIX と Windows の両方。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- AUTHORIZATION_TOKEN=*ABCDEFIGHJKLMNOP* | SKIP
- [表 A-2](#) に戻ります。

CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT

- 説明: このオプションは、認証局 (CA) 証明書の指紋を指定します。SHA-1 指紋と SHA-256 指紋の両方がサポートされます。証明書の指紋は、インストールまたはアップグレード中に CA から取得されます。指紋形式は 59 文字または 95 文字であり、0 から 9 の数字、A から F の英字およびコロンの組み合わせです。たとえば、01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67 となります。指紋の値は、最初の SERVER=*server_name* オプションに指定されているサーバーの指紋と一致する必要があります。
CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT は、次のいずれかの条件では無視されることに注意してください。
 - ECA がプライマリサーバーで使用されている
 - プライマリサーバーのセキュリティレベルが High より低い値に設定されている
- 該当するプラットフォーム: UNIX と Windows の両方。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT=*fingerprint*
- [表 A-2](#) に戻ります。

CLIENT

- 説明: このオプションは、NetBackup がこのクライアントホストの識別に使用する名前を指定します。%COMPUTERNAME% 値により、ローカルホストがコンピュータ名を提供できるようになります。この値を使用すると、単一のプライマリサーバーメイン内のすべてのコンピュータに同じ応答ファイルを使用できます。IP アドレスの使用はサポートされていません。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 必要。
- CLIENT=*client_name* | %COMPUTERNAME%
- [表 A-2](#) に戻ります。

CLIENT_NAME

- 説明: このオプションは、NetBackup がこのコンピュータの識別に使用する名前を指定します。XLOCALHOSTX 値により、ローカルホストがコンピュータ名を提供できるようになります。この値を使用すると、単一のプライマリサーバーメイン内のすべてのコンピュータに同じ応答ファイルを使用できます。この値は、bp.conf ファイルに追加されます。
アップグレードで CLIENT_NAME が指定されている場合、応答ファイルで指定される名前が bp.conf ファイルで構成されている値と一致することを検証するチェックが行われます。
- 該当するプラットフォーム: UNIX および Linux のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要
- CLIENT_NAME=*name* | XLOCALHOSTX
- [表 A-2](#) に戻ります。

DATABASE_USER

- 説明: このオプションは、NetBackup スケールアウトデータベースインスタンスを所有するアカウントのユーザー名を指定します。
このユーザーはシステムに存在している必要があります。DATABASE_USER は root にできません。DATABASE_USER には、sudo ユーティリティへのアクセス権を持つアカウントを指定できません。指定が root に解決される場合、インストールは失敗します。以前に定義した SERVICE_USER が root でない場合は、SAME_AS_SERVICE_USER を指定できます。それ以外の場合は、root 以外のユーザー名を指定します。

- 該当するプラットフォーム: **Linux**
- デフォルト値: `SAME_AS_SERVICE_USER`
- 必要/不要: 該当する場合。
この値は、サービスユーザーが `root` の場合に必要です。また、この値は、`DATABASE_USER` が `bp.conf` ファイルに存在せず、構成された `SERVICE_USER` エントリが `root` である場合に必要です。値が指定され、`DATABASE_USER` が `bp.conf` に存在する場合、この値はマシンの構成済みデータベースユーザーと一致する必要があります。
- `DATABASE_USER = username | SAME_AS_SERVICE_USER`
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_CERT_PATH

- 説明: このオプションは、外部証明書ファイルのパスとファイル名を指定します。ECA がホストで構成されている場合、またはプライマリサーバーで **NBCA** のみが使用されている場合、アップグレード時に `ECA_CERT_PATH` オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- `ECA_CERT_PATH=path_and_file_name`
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_CERT_STORE

- 説明: このオプションは、**Windows** 証明書ストアの外部証明書の場所を指定します。このオプションは、**Windows** 証明書ストアから外部証明書を設定する場合に必要です。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- `ECA_CERT_STORE=store_name\issuer_distinguished_name\subject`
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_CRL_CHECK_LEVEL

- 説明: このオプションは **CRL** モードを指定します。サポートされる値は次のとおりです。

- USE_CDP: 証明書に定義されている CRL を使用します。
- USE_PATH: ECA_CRL_PATH で指定されたパスにある CRL を使用します。
- DISABLED: CRL を使用しません。
- ECA がホストですでに構成されている場合、またはプライマリサーバーで NBCA のみが使用されている場合、アップグレード時に ECA_CERT_PATH オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- ECA_CRL_CHECK_LEVEL=*value*
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_CRL_PATH

- 説明: このオプションは、外部 CA 証明書に関連付けられている CRL のパスとファイル名を指定します。
ECA がホストですでに構成されている場合、またはプライマリサーバーで NBCA のみが使用されている場合、アップグレード時に ECA_CERT_PATH オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: ECA_CRL_CHECK_LEVEL=USE_PATH が指定された場合のみ。
- ECA_CRL_PATH=*path*
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_KEY_PASSPHRASEFILE

- 説明: このオプションは、キーストアにアクセスするためのパスフレーズを含むファイルのパスとファイル名を指定します。
ECA がホストですでに構成されている場合、またはプライマリサーバーで NBCA のみが使用されている場合、アップグレード時に ECA_CERT_PATH オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要
- ECA_KEY_PASSPHRASEFILE=*path/filename*

- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_PRIVATE_KEY_PATH

- 説明: このオプションは、秘密鍵を示すファイルのパスとファイル名を指定します。
ECA がホストですでに構成されている場合、またはプライマリサーバーで NBCA のみが使用されている場合、アップグレード時に ECA_CERT_PATH オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- ECA_PRIVATE_KEY_PATH=*path/filename*
- [表 A-2](#) に戻ります。

ECA_TRUST_STORE_PATH

- 説明: このオプションは、トラストストアの場所を示すファイルのパスとファイル名を指定します。
ECA がホストですでに構成されている場合、またはプライマリサーバーで NBCA のみが使用されている場合、アップグレード時に ECA_CERT_PATH オプションは無視されます。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 詳しくは、「[セキュリティ構成の注意事項について](#)」を参照してください。
- ECA_TRUST_STORE_PATH=*path/filename*
- [表 A-2](#) に戻ります。

IGNORE_MISSING_CATALOG_BACKUP

- 説明: このオプションは、10.1.1 以前のプライマリサーバーからのアップグレードを続行できるかどうかを指定します。NetBackup 10.2 以降のバージョンでは、カタログバックアップが過去 24 時間以内に実行されたかどうかを確認します。
- 該当するプラットフォーム: すべて
- デフォルト値: なし
- 必要/不要: 不要
- IGNORE_MISSING_CATALOG_BACKUP = YES | NO
- [表 A-2](#) に戻ります。

INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE

- 説明: インストール時またはアップグレード時にオプションの **Java** および **JRE** コンポーネントを処理する方法を決定するために使用します。サポートされる値は次のとおりです。
 - **INCLUDE:** **Java GUI** と **JRE** をインストールまたはアップグレードの一部として含めます。
 - **EXCLUDE:** **Java GUI** と **JRE** を除外します。このオプションを指定すると、以前のすべてのバージョンの **Java GUI** と **JRE** がホストに存在する場合、それらも削除されます。
 - **MATCH:** ホスト上の既存の構成を照合します。初期インストールでこのオプションを指定すると、コンポーネントはインストールされません。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし
- 必要/不要: **UNIX** および **Linux** の場合は不要、**Windows** メディアサーバーの場合は必要。
- **INCLUDE_JAVA_GUI_AND_JRE = INCLUDE | EXCLUDE**
- [表 A-2](#) に戻ります。

INCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY

- 説明: NetBackup Java GUI のインストールは、NetBackup プライマリサーバーでは省略可能です。このオプションは、**Java GUI** をインストール、アップグレード、または削除するかどうかを指定します。サポートされる値は次のとおりです。
 - **INCLUDE = NetBackup** をインストールまたはアップグレードするときに **Java GUI** パッケージを含めます。
 - **EXCLUDE = NetBackup** をインストールまたはアップグレードするときに **Java GUI** パッケージを除外します。既存の NetBackup Java GUI パッケージがすべて削除されます。
 - **MATCH =** ホスト上の既存の構成を照合します。初期インストールでこの値を指定しても、NetBackup Java GUI パッケージはインストールされません。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: **UNIX**: **MATCH**、**Windows**: なし。
- 必要/不要: **UNIX**: 不要、**Windows**: 必要。
- **INCLUDE_JAVA_GUI_ON_PRIMARY = INCLUDE | EXCLUDE | MATCH**
- [表 A-2](#) に戻ります。

INCLUDE_VRTSPDDEU_CLIENT

- 説明: このオプションは VRTSpddeu パッケージがクライアントにインストールされるかどうかを指定します。このオプションは、pSeries または zSeries 以外の Red Hat クライアントインストールにのみ影響します。VRTSpddeu パッケージのインストールは省略可能です。オプションでサポートされる値は、次のとおりです。
 - MATCH: クライアントの現在の構成と照合します。初期インストールでこの値を指定すると、VRTSpddeu パッケージはインストールされません。
 - INCLUDE: クライアントのインストールまたはアップグレードに VRTSpddeu パッケージを含めます。
 - EXCLUDE: クライアントのインストールまたはアップグレードから VRTSpddeu パッケージを除外します。
- 該当するプラットフォーム: Linux。具体的には、pSeries または zSeries ではない Red Hat Linux クライアントです。
- デフォルト値: MATCH
- 必要/不要: 不要
- INCLUDE_VRTSPDDEU_CLIENT = INCLUDE | EXCLUDE | MATCH
- 表 A-2 に戻ります。

INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR

- 説明: このオプションは、NetBackup IT Analytics Data Collector オプションを処理する方法を決定します。指定可能な値は 1 (インストールする) または 0 (インストールしない) です。インストーラの動作は NetBackup のバージョンに基づいています。NetBackup 10.1 以前の場合、アップグレードの動作は NetBackup IT Analytics Data Collector のインストールおよび構成状態によって異なります。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされていない場合、インストーラは INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR の値を優先します。1 を指定すると、このオプションがインストールされます。0 を指定すると、このオプションはインストールされません。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされている場合、NetBackup ではこの値は無視され、NetBackup IT Analytics Data Collector オプションの状態が維持されます。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector が存在し、構成されていない場合、NetBackup によってアップグレードされます。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector が存在し、構成されている場合は、NetBackup によってそのまま維持されます。NetBackup IT Analytics Data

Collector は、Alta ポータルで管理され、必要に応じてバイナリがアップグレードされます。

NetBackup 10.1.1 以降の場合、`INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR` 値は無視されます。アップグレードにより、NetBackup IT Analytics Data Collector オプションの状態が維持されます。

- NetBackup IT Analytics Data Collector が存在しない場合、NetBackup によってインストールされません。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector が存在し、構成されていない場合、NetBackup によってアップグレードされます。
 - NetBackup IT Analytics Data Collector が存在し、構成されている場合、NetBackup によってそのまま維持されます。NetBackup IT Analytics Data Collector は Alta ポータルで管理され、必要に応じてバイナリがアップグレードされます。
- アップグレードの一環として NetBackup IT Analytics Data Collector オプションをアンインストールすることはできません。
- 該当するプラットフォーム: すべて
 - デフォルト値: Windows: 1、UNIX および Linux: Yes
 - 必要/不要: 不要
 - `INSTALL_ITA_DATA_COLLECTOR=1|0`
 - [表 A-2](#) に戻ります。

INSTALL_PATH

- 説明: このオプションは、NetBackup バイナリをインストールする場所を指定します。アップグレード時に `INSTALL_PATH` オプションが無視されることに注意してください。このオプションは、アップグレード中に NetBackup の場所を変更する目的では使用できません。このオプションに必要なのは、ベースディレクトリへの絶対パスのみです。インストーラは `/openv` を自動的に追加します。
- 該当するプラットフォーム: UNIX および Linux のみ。
- デフォルト値: `/usr`
- 必要/不要: 不要。`INSTALL_PATH` オプションはアップグレード時に無視されます。
- `INSTALL_PATH = path`
- [表 A-2](#) に戻ります。

LICENSE

- 説明: このオプションは、プライマリサーバーに適用するライセンスファイルのパスを指定します。Linux の場合、ライセンスをさらに適用する場合は、追加の「LICENSE」行

を追加できます。Windows の場合、複数のライセンスファイルパスをセミコロンで区切って单一の「LICENSE」行を使用します。このオプションは追加のキーのみを追加します。競合するライセンスはすべて削除されます。

すべてのアップグレードに、VEMS からダウンロードした本番用ライセンスを使用します。本番用ライセンスにアクセスできない場合は、ダウンロードされていない組み込みライセンスのいずれかを使用できます。使用するライセンスは、NetBackup のバージョンによって異なります。

評価用ライセンス (EVALUATION) は、アップグレード時に NetBackup 8.1.2 より前の NetBackup バージョンからアップグレードする場合にのみ使用されます。評価版ライセンスは 60 日間有効です。アップグレードの直後に、評価用の残りの日数を示すアラートが Web UI に表示されます。

一時ライセンス (TEMP_PRODUCTION) は、NetBackup 8.1.2 以降から NetBackup 10.3 以降へのアップグレードで使用されます。一時ライセンスは 60 日間有効です。アップグレードの直後に、一時ライセンスの期限が切れるまでの残りの日数を示すアラートが Web UI に表示されます。

メモ: NetBackup 10.3 以降へのアップグレード後、既存 NetBackup のライセンスは使用されなくなります。これらは license.txt ファイルに残ります。このファイルは、Linux の場合は /usr/openv/var/、Windows の場合は `install_path\NetBackup\var` にあります。

- 該当するプラットフォーム: すべて
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: NetBackup のバージョンによって異なる。
 - NetBackup 10.3 より前から NetBackup 10.3 以降へのアップグレードの場合: 必要(プライマリサーバーの場合)。メディアサーバーとクライアントの場合は不要。

メモ: 8.1.2 より前の NetBackup バージョンからアップグレードする場合は、一時的な本番用ライセンスを使用できません。NetBackup 8.1.2 より前のバージョンからのアップグレードでは、VEMS または評価用ライセンスからダウンロードされた本番用ライセンスのみがサポートされます。

- NetBackup 10.3 からそれ以降のリリースへのアップグレードの場合: 不要(プライマリサーバーに有効なライセンスがある場合)。メディアサーバーとクライアントの場合は不要。
詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。
- LICENSE = TEMP_PRODUCTION | self_filepath | EVALUATION

詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。

- 表 A-2 に戻ります。

MACHINE_ROLE

- 説明: このオプションは、このコンピュータでインストールおよび構成を実行するための NetBackup の役割を指定します。アップグレードの場合、この値はコンピュータに構成されている役割と一致する必要があります。
- デフォルト値: なし。サポートされる値は、PRIMARY、MEDIA、CLIENT です。
- 該当するプラットフォーム: UNIX および Linux のみ。
- 必要/不要: 不要。
- MACHINE_ROLE = PRIMARY | MEDIA | CLIENT
- 表 A-2 に戻ります。

MEDIA_SERVER

- 説明: このオプションは、指定したホストを NetBackup が使用してこのクライアントに対するセキュリティ保護された Web 要求をトンネリングするように指定します。クライアントとプライマリサーバー上の NetBackup Web サービスの間の通信が遮断される場合、トンネルが必要です。この通信は、NetBackup のインストールまたはアップグレード時にホスト証明書入手するために必要です。応答ファイルには複数の MEDIA_SERVER エントリを含めることができます。
- 該当するプラットフォーム: UNIX および Linux のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- MEDIA_SERVER=media_server_name
- 表 A-2 に戻ります。

MEDIASERVER

- 説明: このオプションは、このコンピュータがメディアサーバーとして認識するホストの名前を指定します。IP アドレスの使用はサポートされていません。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- MEDIASERVER=media_server_name
- 表 A-2 に戻ります。

MERGE_SERVERS_LIST

- 説明: プライマリ上の `bp.conf` にあるサーバーを、このクライアントの `bp.conf` に格納されているサーバーリストに統合します。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- デフォルト値: NO
- 必要/不要: 不要。
- `MERGE_SERVERS_LIST = yes | no`
- [表 A-2](#) に戻ります。

PRIMARYSERVER

- 説明: このオプションは、このコンピュータが現在の NetBackup プライマリサーバーとして認識するサーバー名を指定します。このホストがプライマリサーバーの場合は、`%COMPUTERNAME%` を値に使用できます。IP アドレスの使用はサポートされていません。ADDITIONALSERVERS オプションを使用すると、追加のプライマリサーバーを指定できます。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 必要。
- `PRIMARYSERVER=primary_server_name`
- [表 A-2](#) に戻ります。

PROCEED_WITH_INSTALL

- 説明: このオプションは、NetBackup のインストールまたはアップグレード中に表示される可能性のある 2 つのプロンプトに対する回答を指定します。最初のプロンプトは、重要なインストール前チェックに合格した後に NetBackup がインストールまたはアップグレードを続行するかどうかを判断します。ディスク容量に潜在的な問題がある場合は、2 番目のプロンプトが表示されることがあります。いずれの場合も、YES であればインストールまたはアップグレードは続行し、NetBackup と Media Manager ファイルがファイルシステムにインストールされます。NO の場合、インストールまたはアップグレードは停止し、ユーザーによる変更が可能です。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux**
- デフォルト値: なし
- 必要/不要: 不要
- `PROCEED_WITH_INSTALL = yes | no`
- [表 A-2](#) に戻ります。

RBAC_DOMAIN_NAME

- 説明: このオプションは、管理者の役割に、役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 権限が構成されているプリンシパルのドメイン名を指定します。
- デフォルト値: なし。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- 必要/不要: 不要
- **RBAC_DOMAIN_NAME = domain_name**
- [表 A-2](#) に戻ります。

RBAC_DOMAIN_TYPE

- 説明: このオプションは、管理者の役割に、役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 権限が構成されているプリンシパルのドメイン形式を指定します。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要
- **RBAC_DOMAIN_TYPE = domain_type**
- [表 A-2](#) に戻ります。

RBAC_PRINCIPAL_NAME

- 説明: このオプションは、管理者の役割に、役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 権限が構成されているプリンシパルの名前を指定します。このユーザーまたはユーザーグループがシステムに存在する必要があります。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要
- **RBAC_PRINCIPAL_NAME = principal_name**
- [表 A-2](#) に戻ります。

RBAC_PRINCIPAL_TYPE

- 説明: このオプションは、管理者の役割に、役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 権限が構成されているプリンシパルの形式を指定します。
- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- デフォルト値: なし。

- 必要/不要: 不要
- RBAC_PRINCIPAL_TYPE = USER | USERGROUP
- [表 A-2](#) に戻ります。

SECURITY_CONFIGURATION

- 説明: ホストで NetBackup 認証局も外部認証局も構成されていない場合にのみ適用できます。NBCA または ECA を使用するようにホストを構成せずにインストールまたはアップグレードを続行するには、このオプションを SKIP に設定します。セキュリティをスキップした場合は、インストールまたはアップグレードが完了したときにすべてのターゲットホストで追加の手順を手動で実行する必要があります。このオプションが SKIP に設定されている場合、CA_CERTIFICATE_FINGERPRINT、AUTHORIZATION_TOKEN、ECA_ オプションには値を指定できません。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- SECURITY_CONFIGURATION = SKIP
- [表 A-2](#) に戻ります。

SERVER

- 説明: このオプションは、このコンピュータが現在の NetBackup プライマリサーバーとして認識するサーバー名を指定します。認識する必要のあるサーバーが他にある場合は、追加の SERVER= 行を追加できます。SERVER= 行が複数ある場合、最初に表示されるのがプライマリサーバーです。これらのエントリは、bp.conf ファイルに追加されます。
- 該当するプラットフォーム: UNIX および Linux のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- SERVER=*primary_server_name*
- [表 A-2](#) に戻ります。

SERVICES

- 説明: このオプションは、クライアントのインストールまたはアップグレードの完了時に NetBackup サービスを起動するかどうかを指定します。起動しないことを指定すると、NetBackup サービスは起動しません。インストールまたはアップグレードの終了後、NetBackup サービスが起動する前に、手動による追加手順の実行が必要になる場合があります。

- 該当するプラットフォーム: **UNIX** および **Linux** のみ。
- デフォルト値: YES
- 必要/不要: 不要。
- SERVICES=no
- 表 A-2 に戻ります。

SERVICESTARTTYPE

- 説明: このオプションは、ホストサーバーの再起動後に、**NetBackup** サービスを再起動するかどうかを指定します。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: Automatic
- 必要/不要: 不要。
- SERVICESTARTTYPE=Automatic | Manual
- 表 A-2 に戻ります。

SERVICE_USER

- 説明: このオプションは、プライマリサーバー上でほとんどの **NetBackup** サービスまたはデーモンを起動するために使用するサービスユーザー/アカウントを指定します。次の点に注意してください。
 - root ユーザーをサービスユーザーとして使用しないでください。
 - nbwebsvc ユーザーをサービスユーザーとして使用することはできません。
 - nbwebgrp グループはサービスユーザーのセカンダリグループである必要があります。
 - /usr/openv ディレクトリの所有権は、このオプションで指定する新しいサービスユーザー/アカウントに変更されます。
 - インストール後にこのユーザーを変更するには、nbserviceusercmd --changeUser コマンドを使用します。
 - クラスタサーバーの場合、すべてのクラスタノードでサービスユーザーとサービスユーザー ID が同じである必要があります。
 - SERVICE_USER 値が応答ファイルに指定され、bp.conf ファイルに存在する場合、値が一致する必要があります。
 - サービスユーザー/アカウントについて詳しくは、次を参照してください。
<https://www.veritas.com/docs/100048220>
- 該当するプラットフォーム: **Linux** のみ。

- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 必要。
- SERVICE_USER=*name*
- [表 A-2](#) に戻ります。

START_JOB_DAEMONS

- 説明: このオプションは、ジョブの実行を制御する NetBackup デーモンを開始するかどうかを指定します。
- 該当するプラットフォーム: **Linux** のみ。
- デフォルト値: yes
- 必要/不要: 不要。
- START_JOB_DAEMONS=yes | no
- [表 A-2](#) に戻ります。

STOP_NB_BEFORE_VCREDIST

- 説明: このオプションは、NetBackup が Microsoft の再頒布可能インストーラを使用して Visual C++ ランタイムライブラリを更新する前に、NetBackup プロセスを自動的に停止するかどうかを指定します。場合によっては、NetBackup プロセスを停止すると再起動の必要性が少なくなります。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: YES
- 必要/不要: 不要
- STOP_NB_BEFORE_VCREDIST=YES | NO
- [表 A-2](#) に戻ります。

STOP_NBU_PROCESSES

- 説明: このオプションは、インストール処理でアクティブな NetBackup プロセスが検出された場合、そのプロセスを自動的に停止するかどうかを指定します。インストールまたはアップグレードの前に、実行中の NetBackup ジョブがないことと、すべての NetBackup データベースが停止していることを確認します。有効な入力値は、0 (停止しない) および 1 (停止) です。
- 該当するプラットフォーム: **Windows** のみ。
- デフォルト値: 0
- 必要/不要: 不要。

- STOP_NBU_PROCESSES = 0 | 1
- 表 A-2 に戻ります。

VCREDIST_ATTEMPT_PREFERENCE

- 説明: このオプションは、互換性のある Visual C++ ランタイムライブラリがまだない Windows コンピュータでの NetBackup の動作を指定します。YES に設定すると、セットアップは Microsoft の再頒布可能インストーラを使用して Visual C++ ランタイムライブラリを更新しようとします。コンピュータに必要なランタイムライブラリがなく、このオプションが NO に設定されている場合、セットアップはエラーで停止します。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: YES
- 必要/不要: 不要
- VCREDIST_ATTEMPT_PREFERENCE=YES|NO
- 表 A-2 に戻ります。

VCREDIST_RESTART_PREFERENCE

- 説明: このオプションは、Visual C++ ランタイムライブラリが更新され、操作を完了するため再起動が必要な場合に、NetBackup のセットアップがどのように続行されるかを決定します。このオプションが STOP に設定されている場合、セットアップは停止します。このオプションが PROCEED に設定されている場合、NetBackup はセットアップを続行しますが、コンピュータは再起動しません。必要な再起動をできるだけ早く実行します。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: STOP
- 必要/不要: 不要
- VCREDIST_RESTART_PREFERENCE=PROCEED|STOP
- 表 A-2 に戻ります。

VNETD_PORT

- 説明: このオプションは、NetBackup の vnetd プロセスが使用するポートを指定します。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: 13724
- 必要/不要: 不要。
- VNETD_PORT=*port_number*

- [表 A-2](#) に戻ります。

VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT

- 説明: このオプションは、NetBackup スケールアウトデータベース接続プールサービスが使用するポートを指定します。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: 13787
- 必要/不要: 不要。
アップグレードのための値を指定する場合、この値は vxdbms.conf の VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT フィールドに格納されている現在の値と一致する必要があります。
- VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT = *port_number*
- [表 A-2](#) に戻ります。

WEBSVC_DOMAIN

- 説明: このオプションは、Web サーバーをドメイン (Active Directory) アカウントと関連付ける場合に使用します。このフィールドにドメイン名を指定します。Web サーバーをローカルアカウントに関連付ける場合は、このフィールドを空白のままにします。
- 該当するプラットフォーム: Windows のみ。
- デフォルト値: なし。
- 必要/不要: 不要。
- WEBSVC_DOMAIN=*domain_name*
- [表 A-2](#) に戻ります。

WEBSVC_GROUP

- 説明: このオプションは、NetBackup Web サーバーが使用するアカウントのグループ名を指定します。このグループはシステムに存在している必要があります。
- WEBSVC_GROUP 値が応答ファイルに指定され、bp.conf ファイルに存在する場合、値が一致する必要があります。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: nbwebgrp
- 必要/不要: 不要 (Linux プライマリサーバーの場合)、必要 (Windows プライマリサーバーの場合)。
- WEBSVC_GROUP=*custom_group_account_name*
- [表 A-2](#) に戻ります。

WEBSVC_PASSWORD_PLAIN

- 説明: このオプションは、**Windows** WEBSVC_USER アカウントのパスワードを指定します。websvc のパスワードに特殊文字が含まれている場合 ((% ^ & < > | ' ` , ; = () ! " ¥ [] . * ?) は、パスワードに適切なエスケープ文字を追加します。たとえば、websvc のパスワードが abc% の場合は、abc%% と入力する必要があります。

注意: このオプションは、このアカウントのパスワードを平文にします。そのため、セキュリティ上の問題になる可能性があります。

- 該当するプラットフォーム: **Windows**のみ。
- デフォルト値: なし。
- WEBSVC_PASSWORD_PLAIN=*password*
- [表 A-2](#) に戻ります。

WEBSVC_USER

- 説明: このオプションは、**NetBackup Web** サーバーが使用するアカウントのユーザー名を指定します。このユーザーはシステムに存在している必要があります。WEBSVC_USER 値が応答ファイルに指定され、bp.confファイルに存在する場合、値が一致する必要があります。
- 該当するプラットフォーム: すべて。
- デフォルト値: nbwebsvc
- 必要/不要: 不要 (**Linux** プライマリサーバーの場合)、必要 (**Windows** プライマリサーバーの場合)。
- WEBSVC_USER=*custom_user_account_name*
- [表 A-2](#) に戻ります。

プライマリサーバーからクライアントへのクライアントソフトウェアのプッシュインストールについて

プライマリサーバーからクライアントにソフトウェアをプッシュインストールして、クライアントのインストールを迅速に実行できます。この方式を使用すると、各クライアントでローカルインストールする必要がなくなります。

次に、プライマリサーバーからクライアントソフトウェアをインストールするための **NetBackup** 環境の準備方法について説明します。

- プライマリサーバーにクライアント形式のソフトウェアをインストールします。NetBackup 構成に関するすべてのクライアント形式をインストールしてください。
NetBackup 11.0 の時点では、クライアントのプッシュインストールとアップグレードのステージング領域にクライアントソフトウェアは配置されません。すべてのクライアント オペレーティングシステムについて、表示されるプロセスに従ってください。
[p.179の「プライマリサーバーへのクライアント形式のソフトウェアのインストール」](#)を参照してください。
- プライマリサーバーからクライアントソフトウェアをプッシュインストールするには、各クライアント名を NetBackup ポリシーに割り当てる必要があります。ポリシーはプライマリサーバーで作成されます。
ポリシーを作成する場合、ポリシー形式を指定して、そのポリシーに割り当てられるクライアントのオペレーティングシステムを示す必要があります。ポリシーが存在しない場合、プライマリサーバーによってクライアントのオペレーティングシステムが認識されないため、リモートインストール（またはプッシュインストール）は失敗します。
NetBackup ポリシーの作成方法については、[『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』](#)を参照してください。
- 必要なポリシーが作成された後に、プライマリサーバーからクライアントにクライアントソフトウェアをプッシュインストールできます。

プライマリサーバーへのクライアント形式のソフトウェアのインストール

次の操作を行うには、クライアント形式のソフトウェアをプライマリサーバーにインストールする必要があります。

- NetBackup ポリシーにクライアントを割り当て、クライアントをバックアップできるようにする
- プライマリサーバーからクライアントにクライアントソフトウェアをインストールする（またはプッシュインストールする）
UNIX クライアント形式では、クライアントインストールスクリプトによって、クライアントソフトウェアをプライマリサーバーにインストールできます。その後、プライマリサーバーからクライアントにクライアントソフトウェアをインストール（またはプッシュインストール）できます。

プライマリサーバーにクライアント形式のソフトウェアをインストールする方法

- 1 root ユーザーとしてサーバーにログインします。
- 2 ESD イメージ（ダウンロード済みファイル）がある場所に移動し、次のコマンドを入力します。

```
./install
```

- 3 次のメッセージが表示されたら、Enter キーを押して続行します。

```
NetBackup Installation Script
Copyright (c) 2025 Cohesity, Inc. All rights reserved.
```

```
Installing NetBackup Client Software
```

```
Please review the VERITAS SOFTWARE LICENSE AGREEMENT located on
the installation media before proceeding. The agreement includes
details on the NetBackup Product Improvement Program.
```

```
For NetBackup installation and upgrade information specific to
your
platform and to find out if your installed EEBs or hot fixes are
contained in this release, check out the Cohesity Services and
Operations Readiness Tools (SORT) Installation and Upgrade
Checklist
and Hot fix and EEB Release Auditor, respectively, at
https://sort.veritas.com/netbackup.
```

```
Do you wish to continue? [y,n] (y)
```

- 4 インストールしたいすべてのクライアント形式を選択し、インストールのプロンプトに従います。

NetBackup IT Analytics Data Collector について

NetBackup IT Analytics は、NetBackup のレポートと分析のためのソリューションです。NetBackup IT Analytics 11.0 では、お客様が OpsCenter から NetBackup IT Analytics に移行できるように特別に作成された NetBackup のみの機能セットが導入されています。

NetBackup IT Analytics Data Collector は、NetBackup プライマリサーバーのインストールまたはアップグレード中にインストールできます。バイナリのみが NetBackup とともに配備されます。インストールが正常に完了したら、NetBackup IT Analytics Portal と通信するように NetBackup IT Analytics Data Collector を構成する必要があります。

NetBackup プライマリサーバーを Cohesity Alta Analytics または NetBackup IT Analytics を使用して構成すると、データ収集用に Data Collector が構成されます。NetBackup プライマリサーバーがオンプレミスの NetBackup IT Analytics ポータルを使用して設計されている場合は、Data Collector を手動で構成する必要があります。

Data Collector をインストールして構成すると、Data Collector は NetBackup の情報を NetBackup IT Analytics Portal または Cohesity Alta Analytics にレポートします。

NetBackup が応答ファイルでどのように Data Collector の値を扱うかは、NetBackup のバージョンと NetBackup IT Analytics Data Collector の現在の状態に応じて変わります。

アップグレード

- NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールおよび構成されている場合、応答ファイルは常に無視されます。NetBackup IT Analytics Data Collector がアップグレードを処理します。
- 10.1.1 より前のバージョンの NetBackup では、NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされていない場合、NetBackup は常に応答ファイルの値を優先します。応答ファイルに値を指定しない場合、NetBackup IT Analytics Data Collector はデフォルトでインストールされます。
- NetBackup バージョン 10.1.1 以降では、NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされていない場合、NetBackup は応答ファイルの値に関係なく NetBackup IT Analytics Data Collector をインストールしません。
- NetBackup バージョン 10.1.1 以降では、NetBackup IT Analytics Data Collector がインストールされているが構成されていない場合、NetBackup は応答ファイルの値に関係なく常にバイナリを最新バージョンにアップグレードします。この動作によって、バイナリは常に最新の状態になります。
- どのバージョンでも、応答ファイルの値が NO の場合、NetBackup IT Analytics Data Collector はアンインストールされません。NetBackup IT Analytics Data Collector のアンインストールは手動で行う必要があります。

参照

詳しくは次を参照してください。

- 『NetBackup IT Analytics Data Collector インストールガイド』の「Data Collector ソフトウェアのインストール」を参照してください。
- 『NetBackup IT Analytics Data Collector に関する注意事項とトラブルシューティング』ガイドの「VCS と Cohesity NetBackup を使用した Data Collector のクラスタリング」を参照してください。

NetBackup IT Analytics Data Collector バイナリの手動によるインストールまたはアンインストール

NetBackup IT Analytics Data Collector は NetBackup の情報を NetBackup IT Analytics または Cohesity Alta Analytics にレポートします。Data Collector は、

NetBackup インストールまたはアップグレードとともにインストールされます。次の手順は、Data Collector を手動でインストールまたはアンインストールするのに役立ちます。

NetBackup のインストールまたはアップグレード中に Data Collector がインストールに失敗した場合は、手動でのインストールが必要になる場合があります。Data Collector のインストールに失敗しても、NetBackup プライマリサーバー全体のインストールまたはアップグレードが失敗することはありません。Data Collector を使用する予定がない場合は、アンインストールできます。

次に示す手順では、Data Collector からポータルへの接続は構成されていません。これらの手順では、Data Collector のインストールのみを行います。Data Collector は、NetBackup プライマリサーバーが Cohesity Alta Analytics または NetBackup IT Analytics ポータルに接続した後に構成されます。

Data Collector の構成方法に関する詳細情報を参照できます。

[p.183 の「NetBackup IT Analytics Data Collector の手動構成」](#)を参照してください。

Linux プライマリサーバーに Data Collector を手動でインストールするには

- 1 /catalog/anb/ita_dc.tar.gz を NetBackup インストールメディアからを一時的な場所にコピーします。
- 2 その一時的な場所に ita_dc.tar.gz tarball を抽出します。
- 3 temporary_location/dc_installer -i /usr/openv -n を実行します。

Windows プライマリサーバーに Data Collector を手動でインストールするには

- 1 インストールメディアパックを見つけて、x64/ITA_DC フォルダに移動します。
- 2 silentinstall.cmd /INSTALL_PATH:NetBackup_install_path /INSTALL_TYPE:INSTALL /REMOVE_NON_OEM_DIR:Y を実行します。

Linux プライマリサーバーから Data Collector を手動でアンインストールするには

- ◆ /usr/openv/analyticscollector/UninstallerData/uninstall_dc.sh -r を実行します。

Windows プライマリサーバーから Data Collector を手動でアンインストールするには

- 1 Windows の[プログラムと機能]で、NetBackup IT Analytics Data Collector を見つけます。この項目を右クリックし、[アンインストール]を選択します。
- 2 アンインストールスクリプトも利用可能です。スクリプトは、次の場所に格納されています。

```
C:\ProgramData\Veritas\NetBackup_IT
Analytics\DC\silentuninstall.cmd
```

NetBackup IT Analytics Data Collector の手動構成

プライマリサーバーのインストールでは、NetBackupの正常なインストールの一環として、NetBackup IT Analytics Data Collector のバイナリが自動的に配備されます。バイナリは `install_path\Veritas\AnalyticsCollector (Windows)` または `/usr/openv/analyticscollector (Linux)` にインストールされます。このセクションでは、Data Collector を手動で構成するために必要な手順について説明します。

Data Collector を構成するときは、次の詳細を手元に用意します。

- (Cohesity Alta または NetBackup IT Analytics ポータルで構成されている) Data Collector の名前。
- (Cohesity Alta または NetBackup IT Analytics ポータルで構成されている) Data Collector のパスコード。
- (Cohesity Alta または NetBackup IT Analytics ポータルで Data Collector を作成したときに生成された) データレシーバの URL。NetBackup プライマリサーバーがデータレシーバ URL のホスト名を解決できることを確認します。
- (Cohesity Alta または NetBackup IT Analytics ポータルで Data Collector を作成したときに生成され、NetBackup プライマリサーバーにコピーした) 鍵ファイルのパス。

詳しくは、『NetBackup IT Analytics ユーザーガイド』の「Data Collector の追加または編集」セクションを参照してください。

Windows で Data Collector を手動で構成するには:

- 1 次のコンテンツを使用して、バッチスクリプト `responsefile.cmd` として応答ファイルを作成します。これらは、Data Collector の構成に必要なユーザー入力に対する応答です。

```
SET DATACOLLECTOR_NAME=name_of_the_data_collector
SET DATACOLLECTOR_PASSCODE=passcode_for_the_data_collector
SET DATARECEIVER_URL=data_receiver_URL
SET DATACOLLECTOR_KEY_FILE_PATH=path_to_the_key_file
SET HTTP_PROXY_CONF=N
SET PROXY_HTTP_URL=
SET PROXY_HTTP_PORT=
SET PROXY_HTTPS_URL=
SET PROXY_HTTPS_PORT=
SET PROXY_USERID=
SET PROXY_PASSWORD=
SET PROXY_NOT_FOR=
```

- 2 各フィールドの値を適切なデータで更新します。サンプル応答ファイルは、`x64\ITA_DC\responsefile.cmd` のインストーラメディアにも含まれています。

- 3 次のコマンドを実行します。

```
"C:\ProgramData\Veritas\NetBackup IT Analytics\DC\configure.cmd"  
$RESPFILE:response_file_path $INSTALL_TYPE:CONFIG
```

- 4 C:\Program Files\Veritas\analyticscollector\mb\bin\ に移動し、次のコマンドを実行して、Data Collector と NetBackup IT Analytics との統合を検証します。

```
checkinstall.bat
```

Data Collector とポータルが構成されている場合、応答に[成功 (SUCCESSFUL)]と表示されます。

メモ: Data Collector とポータル間に aptare.jar のバージョンの不一致がある場合、checkinstall.bat コマンドを実行すると Data Collector の自動更新が開始されます。

Linux で Data Collector を手動で構成するには:

- 1 次のコンテンツを使用して応答ファイルを作成します。これらは、Data Collector の構成に必要なユーザー入力に対する応答です。

```
COLLECTOR_NAME=name_of_the_data_collector  
COLLECTOR_PASSCODE=passcode_for_the_data_collector  
DR_URL=data_receiver_URL  
COLLECTOR_KEY_PATH=path_to_the_key_file  
HTTP_PROXY_CONF=N  
HTTP_PROXY_ADDRESS=  
HTTP_PROXY_PORT=  
HTTPS_PROXY_ADDRESS=  
HTTPS_PROXY_PORT=  
PROXY_USERNAME=  
PROXY_PASSWORD=  
PROXY_EXCLUDE=
```

- 2 各フィールドの値を適切なデータで更新します。

サンプル応答ファイルは、インストールメディアと、プライマリサーバーの /usr/openv/analyticscollector/installer/responsefile.sample から入手できます。

- 3 次のコマンドを実行します。

```
/usr/openv/analyticscollector/installer/dc_installer.sh -c  
responsefile_path
```

- 4 C:\Program Files\Veritas\analyticscollector\mbs\bin\ に移動し、./checkinstall.sh を実行して、Data Collector と NetBackup IT Analytics との統合を検証します。

Data Collector が NetBackup IT Analytics ポータルと通信できる場合、応答に[成功 (SUCCESSFUL)]と表示されます。

メモ: Data Collector とポータル間に aptare.jar のバージョンの不一致がある場合、checkinstall.sh コマンドを実行すると Data Collector の自動更新が開始されます。

Data Collector の開始、停止、および状態の取得

Linux の場合:

- Data Collector プロセスを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/openv/analyticscollector/mbs/bin/aptare_agent start
```

- Data Collector プロセスを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/openv/analyticscollector/mbs/bin/aptare_agent stop
```

- Data Collector プロセスの状態を取得するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/openv/analyticscollector/mbs/bin/aptare_agent status
```

Windows の場合: Windows サービスパネルで、Aptare Agent、Aptare Kafka、および Aptare Zookeeper サービスの状態を確認します。

メモ: Data Collector がオンプレミスの NetBackup IT Analytics ポータルで構成されている場合、ポータルで任意の Data Collector プロパティを編集するには、『NetBackup IT Analytics ユーザーガイド』の NetBackup IT Analytics Data Collector のクレデンシャルの編集に関するセクションを参照してください。

NetBackup IT Analytics Data Collector の手動でのアップグレード

NetBackup IT Analytics Data Collector のバージョンが 11.1.51 の場合は、手動で Data Collector をアップグレードする必要があります。

Data Collector のバージョンを確認するには、次の場所にある `version.txt` ファイルを確認します。

- Linux の場合: `/usr/openv/analyticscollector/upgrade/version.txt`
- Windows の場合: `install_path\analyticscollector\upgrade\version.txt`

表示されているバージョンが 11.1.51 の場合は、Data Collector を手動でアップグレードします。

Data Collector のバージョンを確認するための詳細情報が利用可能です。

https://www.veritas.com/content/support/en_US/doc/140578616-149890641-0/pgfd-105383-149890641

Linux で Data Collector を手動でアップグレードするには:

- 1 Data Collector サーバーに root としてログインします。
- 2 次のコマンドを実行します。

`/usr/openv/analyticscollector/mbs/bin/downloadlib.sh`

- 3 Data Collector がアップグレードされます。

Windows で Data Collector を手動でアップグレードするには:

- 1 Data Collector サーバーにログインします。
- 2 管理者としてコマンドプロンプトを開きます。
- 3 次のコマンドを実行します。

`C:\Program Files\Veritas\AnalyticsCollector\mbs\bin\downloadlib.bat`

- 4 Data Collector がアップグレードされます。

オンプレミスベースの NetBackup IT Analytics ポータルまたは Cohesity Alta Analytics で Data Collector を正常に構成した後、Web ポータルの自動アップグレードメカニズムは、通信の確立後に Data Collector をアップグレードします。NetBackup インストーラは Data Collector をアップグレードしません。構成されていない以前のバージョンの Data Collector が NetBackup によって検出されると、インストール処理で削除され、新しいバージョンがインストールされます。

自動アップグレードメカニズムを何らかの理由で無効にした場合、NetBackup IT Analytics ポータルのアップグレードのたびに、Data Collector を手動でアップグレードする必要が

あります。Data Collector のバージョンが NetBackup IT Analytics ポータルのバージョンと確実に同じになるようにするために、アップグレードが必要です。

維持される Java Virtual Machine のオプション

NetBackup 9.0 より前では、NetBackup のアップグレード時に、Web サービス Java Virtual Machine (JVM) のすべての調整値 (メモリの割り当てなど) が上書きされます。NetBackup 9.0 で、アップグレードで維持される一連の Web サーバー JVM の調整オプションを定義しました。これらのオプションは、ローカルホストに格納されている実行可能なシェルスクリプトで環境変数として定義されています。スクリプトの内容によって、初期設定の JVM の調整オプションが上書きされます。このスクリプトは、NetBackup 9.0 以降の Web サービスが起動されたときにのみ実行されます。デフォルト値を上書きするオプションを構成できます。このスクリプトはいつでも定義できます。値を定義したら、以降のアップグレード時に再定義する必要はありません。

維持される JVM の調整オプションを定義するには、次のようにします。

- 1 適切な NetBackup 構成ディレクトリに wmcConfig スクリプトを作成します。

Windows の場合:

```
install_path\Veritas\NetBackup\var\global\wsl\config\wmcConfig.bat
```

UNIX および Linux の場合:

```
/usr/openv/var/global/wsl/config/wmcConfig.sh
```

- 2 サポートされている変数のリストから目的の変数を含めるように、スクリプトを編集します。各値は個別の行にする必要があります。サポートされる変数は次のとおりです。

```
WMC_HEAP
WMC_METASPACE
WMC_NEW_RATIO
WMC_SURVIVOR_RATIO
WMC_GC_CONFIG
WMC_HEAP_DUMP_CONFIG
```

変数とその適切な範囲について詳しくは、Oracle の JVM マニュアルを参照してください。

- 3 Web サービスを再起動して、構成の変更を適用します。

RBAC ブートストラップについて

Linux プラットフォームでの NetBackup のインストールまたはアップグレード時に、RBAC ブートストラップで、ユーザーまたはユーザーグループに、役割ベースのアクセス制御 (RBAC) 権限を割り当てるすることができます。Linux インストーラで bpnbaz

-AddRBACPrincipal コマンドを使用して、/tmp/NBInstallAnswer.conf ファイルに指定したユーザーまたはユーザーグループに、管理者の役割の権限を付与します。

メモ: RBAC ブートストラップは、以前にユーザーまたはユーザーグループが特定のオブジェクトへのアクセスを制限されていた場合でも、指定したユーザーまたはユーザーグループにすべてのオブジェクトへのアクセスを提供します。たとえば、既存のユーザー Tester1 がデフォルトの VMware 管理者の役割に割り当てられているとします。RBAC ブートストラップに Tester1 を指定すると、Tester1 に管理者の役割が割り当てられます。

インストールまたはアップグレード後に、Windows と Linux の両方のプラットフォームで、`bpbaz -AddRBACPrincipal` コマンドをスタンドアロンで実行して RBAC 権限を割り当てるすることができます。このコマンドはプライマリサーバーでのみ利用できます。このコマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

Linux プラットフォームにおけるインストール時およびアップグレード時の RBAC ブートストラップ:

インストールパッケージから入手できる応答ファイルテンプレート `NBInstallAnswer-primary.template` を使用して、/tmp/NBInstallAnswer.conf ファイルを作成します。インストールまたはアップグレードを実行する前に、作成したファイルに次のエントリを追加します。

```
RBAC_DOMAIN_TYPE = domain_type
RBAC_DOMAIN_NAME = domain_name
RBAC_PRINCIPAL_TYPE = USER | USERGROUP
RBAC_PRINCIPAL_NAME = principal_name
RBAC_DOMAIN_TYPE には、NT, VX, UNIXPWD, LDAP の値を指定できます。
```

メモ: RBAC_* オプションについて詳しくは、次のページを参照してください。

p.151 の『[NetBackup 応答ファイルについて](#)』を参照してください。

すべてのエントリが空または存在しない場合、RBAC ブートストラップは実行されません。この場合、インストールトレースファイルに「Answer file did not contain any RBAC entries」というメッセージが記録されます。インストール処理は常に、RBAC ブートストラップが成功したかどうかにかかわらず続行されます。SEC_CONFIG カテゴリに、監査コードが作成されます。

RBAC ブートストラップが成功した場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Successfully configured the RBAC permissions for principal_name.
```

ユーザーまたはユーザーグループに管理者の RBAC の役割がすでに割り当てられている場合も、このメッセージが表示されます。

応答ファイルに 1 つ以上の RBAC エントリが存在しても、応答ファイルに必要なエントリが存在しない場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Warning: Unable to configure the RBAC permissions. One or more required fields are missing in /tmp/NBInstallAnswer.conf.
```

RBAC ブートストラップに他の問題がある場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Warning: Failed to configure the RBAC permissions for principal_name. Refer to logs in /usr/openv/netbackup/logs/admin for more information.
```

RBAC ブートストラップが成功し、監査が失敗した場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Successfully configured the RBAC permissions for user_or_usergroup_name.
```

```
WARNING: Auditing of this operation failed.
```

```
Refer to logs in /usr/openv/netbackup/logs/admin for more information.
```

インストールまたはアップグレードの完了後、指定したユーザーまたはユーザーグループに、管理者の役割と対応する RBAC アクセス権が割り当てられます。ユーザーは、API と Web UI にアクセスできるようになります。

NetBackup ソフトウェアの入手について

NetBackup 11.0 は、MyVeritas の Web ページ (<https://my.veritas.com/>) からダウンロード用 ESD イメージとして利用できます。イメージは 1.8G のサイズ制限に従っています。

ESD のダウンロードを正しく行うために、一部の製品イメージがより小さく管理しやすいファイルに分割されています。ファイルを解凍する前に、1 of 2, 2 of 2 として識別できる分割されたイメージファイルを最初に結合する必要があります。MyVeritas 上の Download Readme.txt ファイルには、ファイルを結合する方法が記述されています。

NetApp クラスタのためのアップグレード前の追加手順

NetBackup のアップグレード後、すべてが問題なく機能するように、NetApp クラスタ構成を確認するという追加手順が必要になる場合があります。[表 A-4](#) に、さまざまな構成と続行方法を示します。

注意: アップグレードの後にモードが Node Scope から Vserver 対応に変わった場合、追加手順が必要になります。追加手順を実行しないと、データリスクの原因になります。

表 A-4 追加で必要な NetApp クラスタの変更

アップグレード時の NetApp クラスタモード	アップグレード後の NetApp クラスタモードへの変更	詳細情報
Node scope mode	変更なし	NetBackup と NetApp 社は、早い段階での Vserver 対応モードへの変更を推奨しています。
Node scope mode	Vserver 対応モードへの変更	追加手順が必要です。 p.190 の「Node Scope Mode から Vserver 対応モードに変わるために追加手順」 を参照してください。
Vserver 対応モード	なし	追加手順が必要です。 p.192 の「Vserver 対応モードの NetApp クラスタに必要な追加の変更」 を参照してください。

メモ: メディアサーバーが Vserver 対応モードを検出すると、以前のリリースの NetBackup を実行している他のメディアサーバーでは、それ以上のバックアップアクティビティが実行されません。

Node Scope Mode から Vserver 対応モードに変わるのは、次のことを行う必要があります。

Node Scope Mode から Vserver 対応モードに変わるために追加手順

1 Node Scope Mode を無効にすることにより、クラスタ上の Vserver 対応モードを有効にします。

2 クラスタノードにテープデバイスが接続されている場合、その再設定が必要です。デバイス構成用 NDMP ホストとしてクラスタ管理論理インターフェース (LIF) を使用するようにテープデバイスを設定します。NetBackup は、デバイス構成用にノード名の使用をサポートしません。

詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』を参照してください。

3 バックアップで使用するすべての LIF に信用証明を付与します。

このアクティビティには、バックアップポリシー用に使われる Vserver データ LIF に加えてクラスタ管理 LIF も含まれます。

詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』を参照してください。

- 4 環境内のすべての既存 NDMP ホストに対してデータベースを更新します。次のコマンドを使って、データベースを更新します。

```
tpautoconf -verify NDMP_host_name
```

- 5 クラスタ LIF を使うのにクラスタのノード名を使用するストレージユニットを更新するか、置換します。

- 6 クラスタをバックアップする既存のポリシーを更新するか、置換します。

クライアント名としてデータ LIF かクラスタ管理 LIF のいずれかを使用する必要があります。NetBackup はクライアント名としてノード名の使用をサポートしません。バックアップ選択項目も修正の必要がある場合があります。

- 7 クラスタ管理 LIF をホストしない各ノードに対してクラスタ間管理 LIF を追加します。

NetApp クラスタでは、NDMP 3-Way バックアップまたは NDMP リモートバックアップの実行にこのアクティビティが必要です。この LIF がない場合は、クラスタ管理 LIF と同じノードでホストされていないボリュームからのすべての 3-Way バックアップまたはリモートバックアップが失敗します。

- 8 古いイメージをリストア、検証、複製するには、代替読み込みホストを使用することが必要になる場合があります。

Vserver 対応モードの NetApp クラスタに必要な追加の変更

- 1 各 Vserver で tpautoconf コマンドを実行します。このコマンドは Vserver に対するクレデンシャルを備えているメディアサーバーから実行する必要があります。

```
tpautoconf -verify ndmp_host
```

コマンドが正常に実行されれば、次のような nbemmcmd 出力が表示されます。

```
servername1@>nbemmcmd -listsettings -machinename machinename123
-
machinetype ndmp
NBEMMCMD, Version: 10.1
The following configuration settings were found:
NAS_OS_VERSION="NetApp Release 8.2P3 Cluster-Mode"
NAS_CDOT_BACKUP="1"
Command completed successfully.

NAS_OS_VERSION displays the NetApp Version.
NAS_CDOT_BACKUP tells us if NetBackup uses the new cDOT
capabilities.
```

新しい Vserver が追加される場合、tpautoconf -verify ndmp_host コマンドは必須ではありません。

- 2 必要に応じて NDMP クラスタにデバイスを追加し、クラスタ管理 LIF を使ってアクセスします。デバイスを追加する場合は、そのデバイスを検出する必要があります。

- 3 新しく検出されたデバイスに対してストレージユニットを追加します。

- 4 クラスタをバックアップする既存のポリシーを更新します。

クライアント名としてデータ LIF かクラスタ管理 LIF のいずれかを使用する必要があります。NetBackup はクライアント名としてノード名の使用をサポートしません。バックアップ選択項目も修正の必要がある場合があります。

Replication Director を使用した NetApp ディスクアレイの使用

Replication Director は、2 つの異なる状況で NetApp ディスクアレイのスナップショットをレプリケートできます。

- 非クラスタモード: 7-Mode は、NAS および SAN におけるスナップショットのレプリケートに使われています。プラグインは、OCUM (OnCommand Unified Manager) サーバー (図 A-1) にインストールする必要があります。

- クラスタモード: clustered Data ONTAP (cDOT) は、ストレージの仮想マシン間 (SVM または vServer) におけるスナップショットのレプリケートに使います。サポート対象は、NAS のみです。
プラグインは、OCUM サーバー、プライマリサーバー、またはあらゆるメディアサーバー (図 A-2) 以外の Windows コンピュータまたは Linux コンピュータにインストールする必要があります。

モードは両方とも同じトポロジーをサポートします。

表 A-5 では、NetBackup バージョンと NetApp プラグインの間の関連について説明します。

表 A-5 バージョンの互換性

NetBackup のバージョン	NetApp プラグイン バージョン	説明	OCUM サーバーに対するプライマリサーバーの比	サポート対象のポリシー形式
8.x 以降	1.1	7-Mode のサポートがすべての NetBackup Replication Director 機能に提供されます。	1つのプライマリサーバーが多数の OCUM サーバーをサポートします。 プラグインは、OCUM (OnCommand Unified Manager) サーバーにインストールする必要があります。	MS-Windows、標準、NDMP、VMware、Oracle
	1.1 P1	7-Mode のサポートがすべての NetBackup Replication Director 機能に提供されます。	1つのプライマリサーバーが多数の OCUM サーバーをサポートします。	MS-Windows、標準、NDMP、VMware、Oracle
	2.0	cDOT サポートを提供します。	1つのプライマリサーバーが多数の OCUM サーバーをサポートします。 プラグインは、OCUM サーバー、プライマリサーバー、またはあらゆるメディアサーバー以外の Windows コンピュータまたは Linux コンピュータにインストールする必要があります。	MS-Windows、標準、NDMP、VMware、Oracle

メモ: プラグインをアップグレードする前に NetBackup 環境全体をアップグレードする必要があります。すべてのプライマリサーバー、メディアサーバー、クライアント、プラグインと通信するホストをアップグレードします。

図 A-1 NetBackup と NBUPPlugin for 7-Mode 間の通信

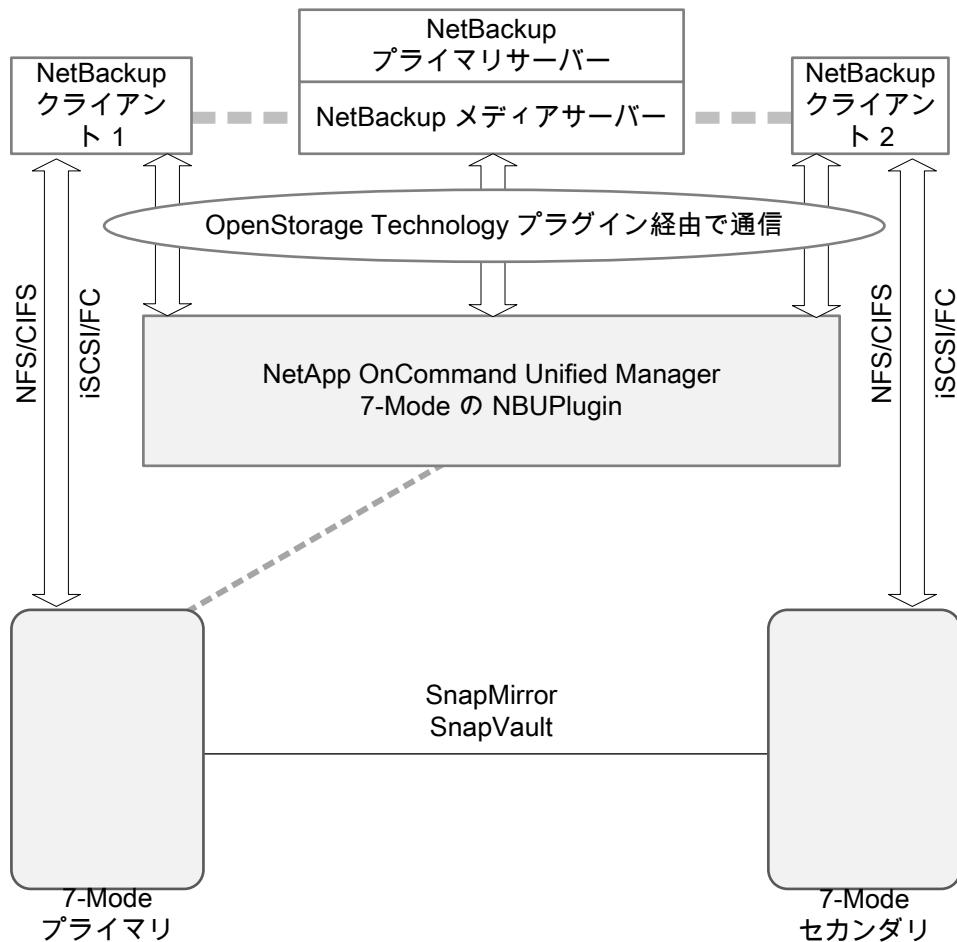
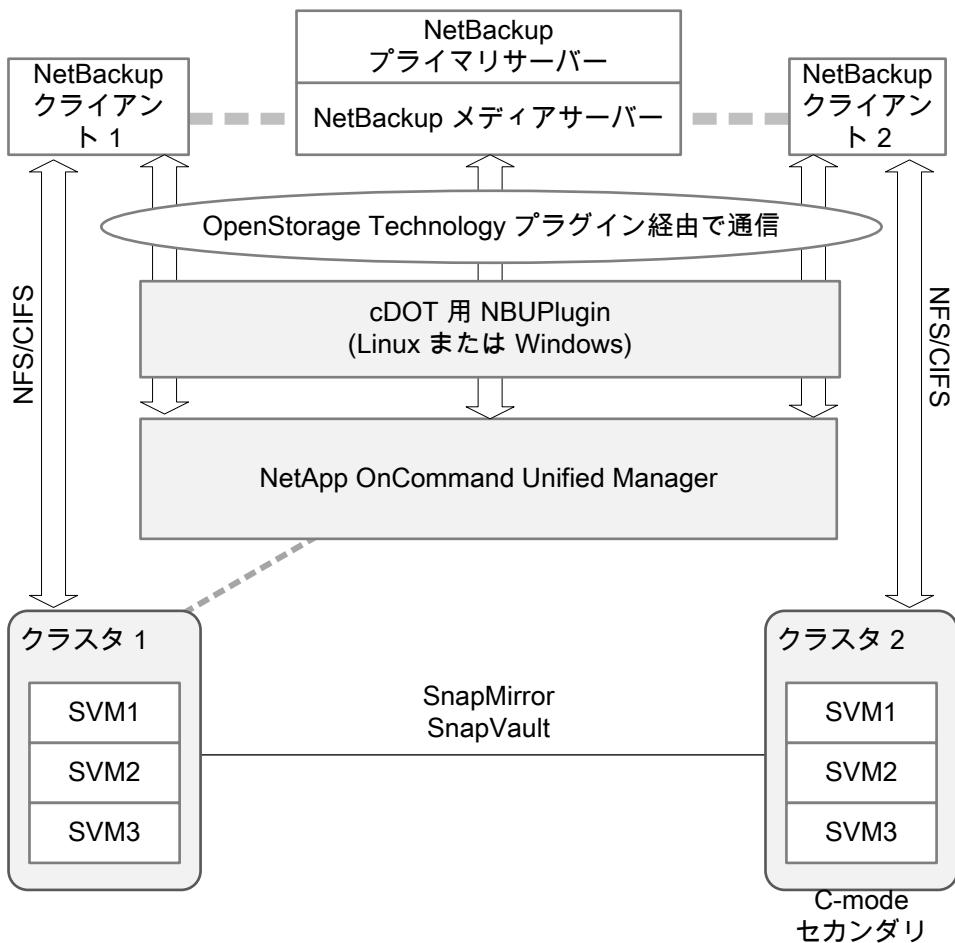


図 A-2 NetBackup と NBUPlugin for clustered Data ONTAP 間の通信



プラグインのバージョンの判断

NBUPlugin のバージョンを判断するには、NBUPlugin がインストールされているシステムで次のバージョンファイルを検索します。

Windows の場合: `Install_path\Program Files\Netapp\NBUPlugin\version.txt`

UNIX の場合: `/usr/NetApp/NBUPlugin/version.txt`

ファイルの内容には、製品名、ビルドの日付、NBUPlugin のバージョンが記載されています。複数のプラグインがインストールされている場合は、両方のリストに表示されます。

プラグインのアップグレード

NetApp Plug-in for NetBackup をアップグレードするには、古いプラグインを使用するすべてのストレージライフサイクルポリシージョブがアップグレード前に完了していることを確認してください。

ストレージライフサイクルポリシーに関連付けられたすべてのジョブの完了、処理中、または未開始を判断するには、次のコマンドを使用します。

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd>nbstlutil.exe stlist -U`

UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbstlutil stlist -U`

NetBackup のバージョン間の互換性について

プライマリサーバー、メディアサーバー、およびクライアントの間で、バージョンが異なる NetBackup を実行できます。この旧バージョンのサポートによって、NetBackup サーバーを1つずつアップグレードして、全体的なシステムパフォーマンスに与える影響を最小限に抑えることができます。

NetBackupではサーバーとクライアントの特定の組み合わせのみがサポートされています。バージョンが混在する環境では、特定のコンピュータが最新のバージョンである必要があります。具体的には、バージョンの順序を NetBackup Snapshot Manager コンピュータ、プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントのようにします。たとえば、10.2 NetBackup Snapshot Manager > 10.0 プライマリサーバー > 9.0 メディアサーバー > 8.3.0.1 クライアントというシナリオがサポートされます。

NetBackup バージョンはすべて 4 桁の長さです。NetBackup 10.0 リリースは 10.0.0.0 リリースです。同様に、NetBackup 9.1 リリースは NetBackup 9.1.0.0 リリースです。サポート目的では、4 番目の数字は無視されます。9.1 プライマリサーバーは 9.1.0.1 メディアサーバーをサポートします。サポートされない例は、9.1 プライマリサーバーと 10.0 メディアサーバーの組み合わせです。

NetBackup カタログはプライマリサーバー上に存在します。したがって、プライマリサーバーはカタログバックアップのクライアントであると見なされます。NetBackup 構成にメディアサーバーが含まれている場合は、プライマリサーバーと同じ NetBackup バージョンを使ってカタログバックアップを実行する必要があります。

NetBackup バージョン間の互換性について詳しくは、[Cohesity SORT Web サイト](#)を参照してください。

[サポート終了 \(EOSL\)](#) 情報をオンラインで確認してください。

UNIX および Linux の場合のアップグレード要件

表 A-6 は NetBackup のアップグレードのために UNIX と Linux システムを準備するための要件を記述します。各項目に対応するためにチェックリストとしてこの表を使ってください。

インストール要件の最新情報について詳しくは Cohesity SORT Web サイトを参照してください。SORT に関する詳しい情報を参照できます。

p.31 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

表 A-6 UNIX および Linux の NetBackup の要件

チェック	要件	詳細
	オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none"> ■ UNIX と Linux の互換性のあるオペレーティングシステムの完全なリストについては、次の Web サイトで『Software Compatibility List (SCL)』を参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility https://sort.veritas.com/netbackup
	メモリ	<p>サーバーのサイズを正しく設定するには、次に示す情報を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SORT の Web サイト。p.31 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。 ■ NetBackup 環境のサイズを設定する方法に関する一般的な詳細。p.213 の「NetBackup プライマリサーバーとドメインのサイズについてのガイダンス」を参照してください。 ■ NetBackup 環境の計画とチューニングについての詳しい情報を参照できます。詳しくは『NetBackup バックアップ計画とパフォーマンスチューニングガイド』を参照してください。
	ディスク容量	<ul style="list-style-type: none"> ■ 必要となる正確な空き領域はハードウェアプラットフォームによって決まります。このトピックに関する詳細情報を参照できます。 NetBackup リースノート 11.0 ■ NetBackup カタログには、バックアップについての情報が含まれているため、製品の使用に伴ってサイズが大きくなります。カタログに必要なディスク領域は、主に、次のバックアップ構成によって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ対象のファイル数。 ■ バックアップの間隔。 ■ バックアップデータの保持期間。 <p>空き容量など、領域に問題がある場合は、NetBackup を代替のファイルシステムにインストールできます。インストールの際に、代替のインストール場所を選択して、/usr/openv からの適切なリンクを作成できます。</p> <p>メモ: ディスク容量の値は初回インストール用です。NetBackup カタログはプライマリサーバーが稼働中の環境になっているときにかなり多くの領域を必要とします。</p>

チェック	要件	詳細
	一般要件	<ul style="list-style-type: none"> ■ <code>gzip</code> および <code>gunzip</code> コマンドがローカルシステムにインストールされていることを確認してください。これらのコマンドがインストールされているディレクトリは、<code>root</code> ユーザーの PATH 環境変数設定に含まれている必要があります。 ■ すべてのサーバーに対する、すべての NetBackup インストール ESD イメージ、有効なライセンス、および <code>root</code> ユーザーのパスワード。 ■ サポートされているハードウェアでサポートされているバージョンのオペレーティングシステム(パッチを適用済みであること)を稼働しているサーバー、十分なディスク容量、およびサポートされている周辺装置。これらの要件について詳しくは、『NetBackup リースノート 11.0』を参照してください。 ■ すべての NetBackup サーバーがクライアントシステムを認識し、またクライアントシステムから認識されている必要があります。一部の環境では、それぞれの <code>/etc/hosts</code> ファイルに対して、もう一方の定義を行なう必要があります。また、他の環境の場合は、ネットワーク情報サービス (NIS) またはドメインネームサービス (DNS) を使用することになります。 ■ 画面解像度には <code>1024 x 768, 256</code> 色以上が必要です。
	クラスタシステム	<ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup クラスタ内の各ノードで <code>ssh</code> コマンドまたは同等のコマンドを実行できることを確認します。<code>root</code> ユーザーとして、パスワードを入力せずにクラスタ内の各ノードにリモートログオンできる必要があります。このリモートログオンは、NetBackup サーバー、NetBackup エージェントおよび別ライセンス製品のインストールと構成を行うときに必要です。インストールおよび構成を完了した後は不要になります。 ■ NetBackup をインストールする前に、クラスタフレームワークをインストールして構成し、起動しておく必要があります。 ■ DNS、NIS、<code>/etc/hosts</code> ファイルを使って、仮想名を定義しておく必要があります。IP アドレスも同時に定義します。(仮想名は IP アドレスのラベルです。) ■ アクティブノードからアップグレードを開始し、それから非アクティブノードをアップグレードします。 <p>クラスタ要件に関する詳細情報を参照できます。</p> <p>『NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド』</p>
	NFS の互換性	NetBackup では、NFS マウントされたディレクトリへのインストールはサポートされていません。NFS マウントされたファイルシステムのファイルロックは確実でない場合があります。
	カーネルの再構成	一部の周辺機器およびプラットフォームでは、カーネルの再構成が必要です。 詳しくは、 『NetBackup デバイス構成ガイド』 を参照してください。
	Red Hat Linux	Red Hat Linux の場合、NetBackup ではサーバー用のネットワーク構成にする必要があります。
	他のバックアップソフトウェア	この製品をインストールする前に、現在システムに構成されている他のベンダーのバックアップソフトウェアをすべて削除します。他のベンダーのバックアップソフトウェアによって、NetBackup のインストールおよび機能に悪影響が及ぼされる場合があります。

チェック	要件	詳細
	Web サービス	<p>NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Tomcat Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウント要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。これらの必須アカウント要素は、インストールの前に作成しておく必要があります。詳しくは以下を参照してください。</p> <p>p.142 の「NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成」を参照してください。</p> <p>メモ: NetBackup Web サービスに使用するユーザー アカウントの詳細を保存します。プライマリサーバーのリカバリでは、NetBackup カタログのバックアップが作成されたときに使用されたものと同じ NetBackup Web サービスのユーザー アカウントとクレデンシャルが必要です。</p> <p>メモ: セキュアモードで NetBackup PBX を実行する場合は、Web サービスユーザーを PBX の権限を持つユーザーとして追加します。PBX モードの判別と、正しくユーザーを追加する方法について詳しくは、次をご覧ください。</p> <p>http://www.veritas.com/docs/000115774</p> <p>デフォルトでは、UNIX インストールスクリプトは、Web サーバーをユーザー アカウント nbwebsvc およびグループ アカウント nbwebgrp に関連付けようとしています。これらのデフォルト値は、NetBackup インストール応答ファイルに上書きできます。UNIX のインストールスクリプトを開始する前に、ターゲットホストに NetBackup インストール応答ファイルを設定する必要があります。NetBackup インストール応答ファイルにカスタム Web サーバー アカウント名を次に示すように設定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 root ユーザーとしてサーバーにログインします。 2 任意のテキストエディタでファイル /tmp/NBInstallAnswer.conf を開きます。ファイルが存在しない場合はファイルを作成します。 3 次に示す行を追加して、デフォルトの Web サーバー ユーザー アカウント名を上書きします。 WEBSVC_USER=custom_user_account_name 4 次に示す行を追加して、デフォルトの Web サーバー グループ アカウント名を上書きします。 WEBSVC_GROUP=custom_group_account_name 5 ファイルを保存して閉じます。

Windows および Windows クラスタのアップグレード要件

表 A-7 に、NetBackup 11.0 のインストールのために Windows システムを準備するための要件が記述されています。各項目に対応するためにチェックリストとしてこの表を使ってください。

インストール要件の最新情報について詳しくは Cohesity SORT Web サイトを参照してください。SORT に関する詳しい情報を参照できます。

p.31 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

注意: NetBackup では、インストールまたはアップグレードの後、nbdb_move コマンドを使用して Windows クラスタ上のデフォルト以外の場所に NetBackup カタログを移動することができます。ただし、アップグレードを成功させるためには、アップグレードの前に NetBackup カタログをデフォルトの場所に戻す必要があります。カタログがデフォルトの場所にない場合、NetBackup のアップグレードは行わないでください。アップグレードの前にデータベースをデフォルトの場所に移動しなかった場合、プライマリサーバーが使用できなくなります。nbdb_move についての詳しい情報を参照できます。

[『NetBackup コマンドリファレンスガイド』](#)

表 A-7 Windows および Windows クラスタの NetBackup の要件

チェック	要件	詳細
	オペレーティングシステム	<ul style="list-style-type: none"> ■ セキュリティ更新プログラムを含む、最新のオペレーティングシステムパッチと更新プログラムを適用したことを見つめます。オペレーティングシステムが最新のものかどうか不明な場合は、ご購入先にお問い合わせのうえ、最新のパッチおよび更新版入手してください。 ■ Windows の互換性のあるオペレーティングシステムの完全なリストについては、次の Web サイトで『Software Compatibility List (SCL)』を参照してください。 http://www.netbackup.com/compatibility
	メモリ	<p>サーバーのサイズを正しく設定するには、次に示す情報を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SORT の Web サイト。p.31 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。 ■ NetBackup 環境のサイズを設定する方法に関する一般的な詳細。p.213 の「NetBackup プライマリサーバーとドメインのサイズについてのガイダンス」を参照してください。 ■ NetBackup 環境の計画とチューニングについての詳しい情報を参照できます。詳しくは『NetBackup バックアップ計画とパフォーマンスチューニングガイド』を参照してください。

チェック	要件	詳細
	ディスク容量	<ul style="list-style-type: none">■ NTFS パーティション。■ サーバーソフトウェアおよび NetBackup カタログに対応するために必要となる正確な空き領域は、ハードウェアプラットフォームによって決まります。このトピックに関する詳細情報を参照できます。 11.0 リリースノート 11.0■ アップグレードでは、NetBackup が代替の場所にインストールされている場合でも、プライマリドライブに追加の領域が必要になります。プライマリドライブは、Windows がインストールされているドライブです。<ul style="list-style-type: none">■ サーバーをアップグレードする場合、NetBackup を代替ドライブの場所にインストールするときに、NetBackup では、プライマリ Windows ドライブに 2.8 GB の空き容量を用意するように求めます。■ クライアントをアップグレードする場合、NetBackup を代替ドライブの場所にインストールするときに、NetBackup では、プライマリ Windows ドライブに 1.7 GB の空き容量を用意するように求めます。■ NetBackup カタログには、バックアップについての情報が含まれているため、製品の使用に伴ってサイズが大きくなります。カタログに必要なディスク領域は、主に、次のバックアップ構成によって異なります。<ul style="list-style-type: none">■ バックアップ対象のファイル数。■ バックアップの間隔。■ バックアップデータの保持期間。■ NetBackup では、ディスクストレージユニットボリュームまたはファイルシステムで 5% 以上の利用可能なディスク容量を確保することをお勧めします。 <p>メモ: ディスク容量の値は初回インストール用です。NetBackup 11.0 カタログはプライマリサーバーが稼働中の環境になっているときにかなり多くの領域を必要とします。</p>
	一般要件	<p>以下の項目すべてがあることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ NetBackup インストール ESD イメージ■ 適切なライセンスファイル 詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100058779 を参照してください。■ すべてのサーバーの管理者アカウントとパスワード■ 画面解像度は 1024 x 768、256 色以上に設定してください。

チェック	要件	詳細
	リモートインストールおよびクラスタインストール	<p>リモートインストールおよびクラスタインストールには、前述のすべてのインストール要件に加えて、次のガイドラインが適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内のすべてのノードで、同じバージョンのオペレーティングシステム、Service Pack および NetBackup を実行している必要があります。サーバーのオペレーティングシステムに異なるバージョンを混在させることはできません。 ■ インストールのアカウントには、すべてのリモートシステムまたはクラスタ内のすべてのノードの管理者権限が必要です。 ■ Remote Registry サービスはリモートシステムで開始する必要があります。 NetBackup のインストーラはリモートシステムの Remote Registry サービスを有効にし、開始できます。Remote Registry サービスが開始されない場合、インストールは次のエラーメッセージを受信します。 <i>Attempting to connect to server server_name failed with the following error: Unable to connect to the remote system. One possible cause for this is the absence of the Remote Registry service. Please ensure this service is started on the remote host and try again.</i> ■ NetBackup の仮想名と IP アドレス NetBackup で利用可能な仮想名および IP アドレスを用意します。インストール中に、この情報を入力する必要があります。 ■ メディアサーバーのクラスタのサポートの変更 クラスタ化されたメディアサーバーの新しいインストールを実行することはできません。 ■ Windows Server Failover Clustering (WSFC) <ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup グループによって使用される共有ディスクがクラスタ内で構成され、アクティブノードでオンラインになっている必要があります。 ■ 11.0 を共有ディスクが存在するノード(アクティブノード)からインストールします。 ■ コンピュータ名またはホスト名は 15 文字より長い名前には設定できません。 ■ Cluster Server (VCS) のクラスタ: NetBackup をインストールする前に、すべての NetBackup ディスクリソースを、VEA (Veritas Enterprise Administrator) で構成しておく必要があります。 ■ クラスタノードのデバイス構成とアップグレード クラスタをアップグレードする場合、ltid およびロボットデーモンは、特定のクラスタノードのデバイス構成を EMM データベースから取得します。EMM データベースでのデバイス構成の格納または取得は、クラスタノード名 (gethostname を使用して表示) によって行われます。クラスタノード名は、デバイス構成の更新時(ltidによるドライブ状態の更新時など)に使われます。クラスタノード名は、デバイスの接続先を示す場合にのみ使用されます。NetBackup の仮想名は、ロボット制御ホストなど、他の目的にも使用されます。 <p>クラスタ要件に関する詳細情報を参照できます。 NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド</p>
	リモート管理コンソールのホスト名	プライマリサーバーのインストール中に、リモート管理コンソールホストの名前を入力する必要があります。

チェック	要件	詳細
	NetBackup 通信	<p>ネットワークがすべてのサーバーおよびクライアントから認識され、相互に通信できるように構成されていることを確認します。</p> <p>通常は、ping コマンドを実行してサーバーからクライアントにアクセスできるように設定されなければ、NetBackup でも正しく動作します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ NetBackup サービスおよびポート番号は、ネットワーク全体で同じである必要があります。■ NetBackup では、NetBackup サービスおよびインターネットサービスのポートに、デフォルトのポート設定を使用することをお勧めします。ポート番号を変更する場合は、すべてのプライマリサーバー、メディアサーバーおよびクライアントに対して同じ値を設定する必要があります。ポートエントリは、次のファイルに格納されています。 <code>%SYSTEMROOT%\system32\drivers\etc\services</code>。デフォルト設定を変更するには、NetBackup のカスタムインストールを行うか、services ファイルを手動で編集する必要があります。
	CIFS マウントされたファイルシステム	NetBackup では、CIFS マウントされたディレクトリへのインストールはサポートされていません。CIFS マウントされたファイルシステムのファイルロックは確実でない場合があります。
	ストレージデバイス	ロボットおよびスタンドアロンテープドライブなどのデバイスが製造元の指示どおりに取り付けられ、Windows ソフトウェアから認識されている必要があります。
	サーバー名	サーバー名の入力を求められたら、適切なホスト名を常に入力してください。IP アドレスを入力しないでください。
	バージョンの混在	使用を計画しているクライアントの最新バージョンと同じかそれ以上のリリースレベルの NetBackup サーバーをインストールしてください。サーバーソフトウェアのバージョンが古い場合、新しいバージョンのクライアントソフトウェアとともに使用すると、問題が発生する可能性があります。
	p.196 の「NetBackup のバージョン間の互換性について」を参照してください。	
	他のバックアップソフトウェア	現在システムに構成されている他のベンダーのバックアップソフトウェアをすべて削除します。他のベンダーのバックアップソフトウェアによって、NetBackup のインストールおよび機能に悪影響が及ぼされる場合があります。

チェック	要件	詳細
	Web サービス	<p>NetBackup 8.0 より、NetBackup プライマリサーバーには、重要なバックアップ操作をサポートするための構成済み Tomcat Web サーバーが含まれます。この Web サーバーは、権限が制限されているユーザー アカウント要素の下で動作します。これらのユーザー アカウント要素は、各プライマリサーバー（またはクラスタ化されたプライマリサーバーの各ノード）で使用できる必要があります。詳しくは以下を参照してください。</p> <p>p.142 の「NetBackup プライマリサーバー Web サーバーのユーザーとグループの作成」を参照してください。</p> <p>メモ: NetBackup Web サービスに使用するユーザー アカウントの詳細を保存します。プライマリサーバーのリカバリでは、NetBackup カタログのバックアップが作成されたときに使用されたものと同じ NetBackup Web サービスのユーザー アカウントとクレデンシャルが必要です。</p> <p>メモ: セキュアモードで NetBackup PBX を実行する場合は、Web サービスユーザーを PBX の権限を持つユーザーとして追加します。PBX モードの判別と、正しくユーザーを追加する方法について詳しくは、次をご覧ください。</p> <p>http://www.veritas.com/docs/000115774</p>
	CA 証明書の指紋	<p>(該当する場合) メディアサーバーとクライアントのみの場合:</p> <p>NetBackup 認証局 (CA) を使用する場合、インストール時にプライマリサーバーの CA 証明書の指紋を把握している必要があります。この要件は、NetBackup 認証局を使用する場合にのみ適用されます。CA 証明書の指紋と、セキュリティ証明書の生成時のこの指紋の役割について詳しくは、次を参照してください。</p> <p>https://www.veritas.com/support/en_US/article.000127129</p>
	認証トークン	<p>(該当する場合) メディアサーバーとクライアントのみの場合:</p> <p>場合によっては、セキュリティ証明書を正常に配備するために、インストーラの実行時に認証トークンが必要です。認証トークンと、セキュリティ証明書の生成時のこのトークンの役割について詳しくは、次を参照してください。</p> <p>NetBackup 認証局 (CA) を使用すると、場合によっては、セキュリティ証明書を正常に配備するために、インストーラの実行時に認証トークンが必要になります。認証トークンと、セキュリティ証明書の生成時のこのトークンの役割について詳しくは、次を参照してください。</p> <p>https://www.veritas.com/support/en_US/article.000127129</p>
	外部認証局	<p>プライマリサーバー（クラスタを含む）の場合: 外部認証局の構成は、インストール後のアクティビティです。</p> <p>メディアサーバーおよびクライアントの場合: インストール処理中、またはインストールの完了後に ECA を構成できます。インストール後の構成について詳しくは、次の記事を参照してください。</p> <p>https://www.veritas.com/support/en_US/article.100044300</p> <p>詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で外部 CA と外部証明書の章を参照してください。</p>

p.197 の「UNIX および Linux の場合のアップグレード要件」を参照してください。

Windows クラスタのアップグレードの要件

通常のサーバー要件に加えて、NetBackup のクラスタアップグレードは特別な配慮を必要とします。

次に、Windows システムで NetBackup のクラスタアップグレードを行う場合のガイドラインについて説明します。

表 A-8 インストールとアップグレードに関する Windows クラスタの要件

項目	要件
サーバーのオペレーティングシステム	<p>セキュリティ更新プログラムを含む、最新のオペレーティングシステムパッチと更新プログラムを適用したことを確認します。オペレーティングシステムが最新のものかどうか不明な場合は、ご購入先にお問い合わせのうえ、最新のパッチおよび更新版を入手してください。</p> <p>互換性のあるオペレーティングシステムの完全なリストについては、次の Web サイトで『Software Compatibility List (SCL)』を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ http://www.netbackup.com/compatibility ■ https://sort.veritas.com/netbackup
権限	クラスタインストールを実行するには、クラスタ内のすべてのリモートノードの管理者権限を持っている必要があります。クラスタ内のすべてのノードと各ノードの既存のソフトウェアを記録しておきます。
NetBackup の仮想名と IP アドレス	NetBackup で利用可能な仮想名および IP アドレスを用意します。インストール中に、この情報を入力する必要があります。
ノードのオペレーティングシステム	すべてのクラスタノードで、同じバージョンのオペレーティングシステム、同じ Service Pack レベル、および同じバージョンの NetBackup を使用する必要があります。クラスタ環境では、異なるバージョンのサーバーは実行できません。
メディアサーバーのクラスタのサポートの変更	クラスタ化されたメディアサーバーはサポートされません。

項目	要件
Windows Server Failover Clustering (WSFC)	<p>セキュリティ更新プログラムを含む、最新のオペレーティングシステムパッチと更新プログラムを適用したことを確認します。オペレーティングシステムが最新のものかどうか不明な場合は、ご購入先にお問い合わせのうえ、最新のパッチおよび更新版を入手してください。</p> <p>互換性のあるオペレーティングシステムの完全なリストについては、次の Web サイトで『Software Compatibility List (SCL)』を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ http://www.netbackup.com/compatibility ■ https://sort.veritas.com/netbackup <ul style="list-style-type: none"> ■ インストールまたはアップグレードを開始する前に、共有ディスクリソース、仮想 IP、仮想名を除くすべての NetBackup リソースをオフラインにします。 ■ アクティブノード(共有ディスクリソース、仮想 IP、仮想名のあるノード)から NetBackup をインストールまたはアップグレードします。 ■ コンピュータ名またはホスト名は 15 文字より長い名前には設定できません。
Cluster Server (VCS) のクラスタ	<ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup をインストールする前に、すべての Cohesity ディスクリソースを、NetBackup Enterprise Administrator (VEA) で構成しておく必要があります。 ■ インストールまたはアップグレードを開始する前に、VCS NetBackup リソースをオフラインにする必要があります。 <p>メモ: アクティブノードのインストールまたはアップグレード時に共有ディスクと IP リソースがオンラインであることを確認してください。</p>
クラスタノードのデバイス構成とアップグレード	クラスタをアップグレードする場合、ltid およびロボットデーモンは、特定のクラスタノードのデバイス構成を NetBackup データベースから取得します。NetBackup データベースでのデバイス構成の格納または取得は、クラスタノード名 (gethostname を使用して表示) によって行われます。クラスタノード名は、デバイス構成の更新時 (ltid によるドライブ状態の更新時など) に使われます。クラスタノード名は、デバイスの接続先を示す場合にのみ使用されます。NetBackup の仮想名は、ロボット制御ホストなど、他の目的にも使用されます。

新しいメディアサーバーに全データを移行してクラスタ化されたメディアサーバーを削除する

NetBackup 環境からクラスタ化されたメディアサーバーを削除できます。すべてのデータをクラスタから新しいスタンダードアロンサーバーに移行してから古いクラスタサーバーを廃止する必要があります。

すべての NetBackup リソースを移行してメディアサーバーを廃止するために必要な手順については、で詳しく説明しています。<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>
『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』で「メディアサーバーの廃止方法について」を参照してください。<http://www.veritas.com/docs/DOC5332>

Amazon クラウドストレージサーバーのアップグレード後の手順

NetBackup 8.1 から、Amazon (S3) と Amazon GovCloud ストレージサーバーのオブジェクトのサイズが変更されています。この変更は、これらのクラウドストレージサーバーの読み取りおよび書き込みバッファサイズの有効範囲に影響します。プライマリサーバーで NetBackup 管理コンソールを使用して、NetBackup 8.1 より前のサーバーの読み取りおよび書き込みバッファサイズの値を更新する必要があります。メディアサーバーに関連付けられている各クラウドストレージサーバーのこれらの設定を更新します。

有効範囲については、『NetBackup クラウド管理者ガイド』の READ_BUFFER_SIZE と WRITE_BUFFER_SIZE の情報を参照してください。

NetBackup 管理者コンソールの Amazon (S3) および Amazon GovCloud の読み取りおよび書き込みバッファサイズを更新するには

- 1 NetBackup 管理コンソールを開きます。
- 2 [メディアおよびデバイスマネージャ (Media and Device Manager)]、[クレデンシャル (Credentials)]、[ストレージサーバー (Storage Server)] の順に移動します。
- 3 Amazon (S3) および Amazon GovCloud ストレージサーバーの場合。
 - 右側のペインでストレージサーバーをダブルクリックして [ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)] ダイアログボックスを開きます。
 - [ストレージサーバーの変更 (Change Storage Server)] ダイアログボックスで、[プロパティ (Properties)] タブをクリックします。
 - 表示されるパラメータの値を更新します。これらの値はバイト単位で入力します。

```
READ_BUFFER_SIZE  
WRITE_BUFFER_SIZE
```

4 [保存 (Save)]をクリックします。

コマンドラインから次のコマンドを使用して読み取りおよび書き込みバッファサイズを更新します。

1 nbdevconfig -getconfig -stype storage_server_type -storage_server storage_server_name -configlist filename

2 表示されるパラメータの値を更新します。これらの値はバイト単位で入力します。

```
READ_BUFFER_SIZE  
WRITE_BUFFER_SIZE
```

3 nbdevconfig -setconfig -stype storage_server_type -storage_server storage_server_name -configlist filename

サーバーのアップグレード後のクライアントのアップグレード

update_clients インストールスクリプトによって、クライアントにクライアントソフトウェアのプッシュインストールを実行できます。NetBackup メディアサーバーまたはプライマリサーバーであるリモートクライアントには、クライアントソフトウェアのプッシュインストールは実行できません。これは、1 つのホスト上のサーバーソフトウェアおよびクライアントバイナリが同じバージョンである必要があるためです。

メモ: インストールスクリプト update_clients を使用して NetBackup 8.2 以降のクライアントをプッシュできないことに注意してください。VxUpdate を使用する必要があります。

update_clients インストールスクリプトを使用すると、サーバーに構成されている完全なクライアントリストを確認できます。パラメータを指定せずに実行すると、/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpplclients に基づいて、すべてのクライアントの更新が試行されます。一部のクライアントをアップグレードする場合は、一部のクライアントを指定できます。ハードウェアおよびオペレーティングシステムのパラメータを使用するか、-clientList パラメータを使用します。

メディアサーバーから update_clients を実行できます。この場合、-ClientList パラメータを使用する必要があります。このコマンドを使用すると、メディアサーバーおよび一連のクライアントを、プライマリサーバーよりも前のバージョンに保持できます。このコマンドを使用するには、予定外のクライアントをアップグレードしないように、プライマリサーバー

およびメディアサーバーでの `update_clients -ClientList` コマンドの使用に熟知している必要があります。

クラスタ環境の場合、クライアントソフトウェアのプッシュインストールを実行できるのは、アクティブノードからだけです。

メモ: セキュアな環境でクライアントを配備し、クライアントがプライマリサーバーに直接接続されていない場合は、追加の手順が必要になります。このトピックに関する詳細情報を参照できます。[NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド](#)で、プライマリサーバーに未接続でクライアントに証明書を配備する方法についてのトピックを参照してください。

クライアントのアップグレードの間に、新しいクライアントファイルがクライアントの `/tmp` 内のディレクトリに書き込まれます。このディレクトリには、正常にアップグレードを行うために新しいクライアントファイルを一時的に保存するための十分な領域がなければなりません。十分な領域が利用可能でない場合、アップグレードスクリプトで `/tmp` ディレクトリ内の場所に書き込みを行うことができなかったという状態メッセージが表示されます。この問題を解決するには、`/tmp` ディレクトリにより多くの領域を割り当てて、アップグレード手順を再び実行します。一時ディレクトリはアップグレードが完了すると削除されます。

サーバーのアップグレード後にクライアントをアップグレードする方法

1 インストールスクリプトを開始するには、次のいずれかの方法を使用します。

- ESD イメージ (ダウンロード済みファイル) ■ インストールイメージが存在する場所に移動します。
■ 次のコマンドを入力します。

```
./install
```

ネイティブインストールツール ■ NetBackup では、ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのインストールとアップグレードがサポートされます。詳細情報を参照できます。

[p.107 の「ネイティブインストーラによる UNIX と Linux のクライアントバイナリのアップグレード」](#) を参照してください。

2 次のメッセージが表示されたら、Enter キーを押して続行します。

```
Installing NetBackup Client Software.  
Do you wish to continue? (y/n) [y]
```

クライアントのバイナリは、バイナリがコンパイルされたオペレーティングシステムのバージョンを表します。通常、バイナリは、より新しいバージョンのオペレーティングシステム上で問題なく動作します。たとえば、Solaris 10 のバイナリは Solaris 11 レベルのオペレーティングシステムでも使用されます。

- 3 インストールするクライアント形式を選択し、プロンプトに従ってそのクライアント形式をインストールします。目的のクライアント形式がすべてインストールされるまで、必要に応じて繰り返します。

このサーバーからプッシュするすべての形式の **UNIX** クライアントのソフトウェアをインストールしたことを確認してください。これを行わない形式の **UNIX** クライアントは、**NetBackup** のポリシー構成に追加できません。

- 4 NetBackup プライマリサーバー上で、root ユーザーとして次のコマンドを入力して、bprd が動作しているかどうかを確認します。

/usr/openv/netbackup/bin/bpps

`bprd` が動作している場合は、次のコマンドを実行して停止します。

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bprdreq -terminate
```

- 5 バックアップまたはリストアが実行中ではないことを確認するには、次のコマンドを入力します。

/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpdb|jobs

- 6 update_clients スクリプトを実行することによって UNIX クライアントソフトウェアを更新します。クライアントのリストには、仮想名ではなく各ノードのホスト名を指定します。

次のいずれかのコマンドを使用します。

-ClientList ファイルを /usr/openv/netbackup/bin/update_clients 使わない場合

-ClientList ファイルを /usr/openv/netbackup/bin/update_clients
使う場合 -ClientList *filename*

メディアサーバーでは、-ClientList パラメータを使用する必要があります。

クライアントが 30 を超える場合、リストを複数のファイルに分割して、各ファイルに対して `update_clients` を実行できます。

クライアントリストファイルを作成するには、次の手順を実行します。

- 次のように NetBackup admincmd ディレクトリに変更します。

```
cd /usr/openv/netbackup/bin/admincmd
```

- `bppclclients` コマンドを使用して、現在 NetBackup データベースに構成されているクライアントのリストが含まれるファイルを作成します。このコマンドで使用するオプションは、次に示すように、プライマリサーバーまたはメディアサーバーのどちらからインストールを行なうかによって異なります。

プライマリサーバーからプッ `./bpplclients -allunique -noheader > file`
シューインストールを行う場合

メディアサーバーからプッ `./bpplclients -allunique -noheader -M ¥
シューインストールを行う場合 m_server_name > file`

オプションの説明は、次のとおりです。

m_server_name 環境内の **NetBackup** プライマリサーバーの名前。

file 一意のクライアントのリストを含めるファイルの名前。**NetBackup**
データベース内でクライアントが構成されていない場合、ファイル
は空になります。

`bpplclients` コマンドは、次の形式で **file** に出力を書き込みます。

`hardware os client`

hardware ハードウェアの名前。たとえば、ディレクトリ
`/usr/openv/netbackup/client` では、`ls` コマンドを実行
します。

os オペレーティングシステムの名前。たとえば、ディレクトリ
`lshardware/usr/openv/netbackup/client/hardware.`
コマンドを実行します。

client クライアントの名前。

file の内容は、次の例のようになります。

`Solaris Solaris9 curry`

- (オプション) **file** を編集します。

file の内容を変更するには、この手順を実行します。**NetBackup** クライアント
ソフトウェアで更新するクライアントだけが含まれるように **file** を編集します。ク
ライアントのホスト名は、クライアントの各ノード名である必要があります。仮想名
は指定できません。`hostname` コマンドと `domainname` コマンドは個々のノード
名の正しい値を戻します。形式は、`hostname` または `hostname.domainname`
です。

- 7 update_clients スクリプトを実行すると、プライマリサーバー情報の入力が要求されます。

```
Starting update_clients script.  
There are N clients to upgrade.  
Do you want the bp.conf file on the clients updated to list this  
server as the primary server? (y/n) [y]
```

y または n のどちらかを入力します。

Enter キーを押します。

- 8 同時に実行する更新の数を入力します。

```
Enter the number of simultaneous updates you wish to take  
place. [1 - 30] (default: 15):
```

- 9 インストーラは認証局の証明書の詳細を取得しようとします。

```
Getting CA certificate details.  
Depending on the network, this action may take a few minutes. To  
continue without setting up secure communication, press Ctrl+C.
```

Ctrl+C を押す場合は、インストールを再実行するか、必要なセキュリティコンポーネントを使用せずにインストールを続行する必要があります。必要なセキュリティコンポーネントが存在しない場合はバックアップとリストアが失敗します。

認証局の証明書が見つかった場合、次のメッセージが表示されます。

```
Using CA Certificate fingerprint from primary server:  
01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67:89:AB:CD:EF:01:23:45:67  
If clients need an authorization token for installation, please  
specify one here. Token (leave blank for no authorization token):
```

認証トークンを空白のままにした場合、次のメッセージが表示されます。

```
WARNING: Authorization Token was not specified.  
Manual steps may be required before backups and restores can  
occur.
```

- 10 質問に対して、y または n のどちらかを入力します。

```
The upgrade will likely take Y to Z minutes.  
Do you want to upgrade clients now? (y/n) [y]
```

- 11 すべてのサーバーおよびクライアントが更新されたら、プライマリサーバー上で root ユーザーとして次のコマンドを入力して、bprd デーモンを起動します。

```
/usr/openv/netbackup/bin/initbprd
```

アップグレードエラーのロールバック手順

NetBackup 10 へのアップグレードが成功すると、レガシーログディレクトリの権限の制限が厳しくなります。NetBackup 11.0 へのアップグレードが失敗した場合は、アップグレードに伴う権限の変更をロールバックする必要があります。そうしないと、NetBackup が正常に動作しない可能性があります。

Linux で権限をロールバックするには:

- 1 /usr/openv/tmp ディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
. recoverPermissions.txt
```

Windows で権限をロールバックするには:

- 1 install_path\NetBackup\logs\ ディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
icacls install_path\NetBackup\logs\ /restore  
install_path\NetBackup\Temp\recoverPermissions.txt /C
```

/Cスイッチは、使用するとエラーが発生しても処理を続行できるため、重要です。このスイッチを使用しないと、エラーが発生した場合に処理が停止します。

NetBackup プライマリサーバーとドメインのサイズについてのガイド

NetBackup プライマリサーバーのサイズ決定は、全体的な NetBackup ソリューション設計の一環として重要なアクティビティです。NetBackup プライマリサーバーと NetBackup ドメイン用に最適な構成を判断するために、必ず、データ保護を包括的に評価します。

次の情報はガイドラインを示すものです:

- NetBackup では、カタログサイズにハード制限はありません。ただし、カタログバックアップとリカバリのパフォーマンスを良好にするために、カタログサイズを **4 TB** 未満に保つことをベストプラクティスとしてお勧めします。
NetBackup カタログのサイズと、NetBackup カタログからのデータの読み取りに関するパフォーマンスは、I/O パフォーマンス、つまりディスク速度によって決定されます。可能な場合はカタログに **SSD (ソリッドステートドライブ)** を使用することをお勧めします。ディスクには優れた読み取りおよび書き込みパフォーマンスが必要です。これは、大規模環境ではさらに重要です。
長期保持 (LTR) を使用したイメージでは、圧縮とカタログアーカイブを使用したカタログサイズの管理をお勧めします。
圧縮とカタログアーカイブによるカタログサイズの管理について詳しくは、『**NetBackup バックアップ計画とパフォーマンスチューニングガイド**』を参照してください。
- EMM データベース内のデバイス数は **1,500** を超えないようにしてください。
デバイスには、テープドライブ、テープライブラリ、ディスクプールなどがあります。
- メディアサーバーの数は **50** を超えないようにしてください。
各 NetBackup ドメイン内で管理可能な数のメディアサーバーとストレージターゲットを維持することが重要です。配備されるメディアサーバーとストレージターゲットは管理および保守が必要で、最終的にパッチの適用とアップグレードが必要になります。これらの各メディアサーバーにも、保守が必要な構成が含まれています。したがって、管理性、操作性、管理の影響を考慮することが重要です。バックアップの作業負荷をサポートするために、必要な CPU、メモリ、ネットワーク帯域幅、およびディスク I/O で適切にサイズが設定されたメディアサーバーとストレージターゲットを配備します。同じ作業負荷で DR の場所への複製またはレプリケーションが必要かどうかを考慮することも重要です。それらの二次的なオプションに対応するように、メディアサーバーとストレージターゲットのサイズを決定することは不可欠です。まとめると、ドメインごとに **50** 未満の数を維持しながら、適切なサイズのメディアサーバーとストレージターゲットを配備します。
- ジョブの数は、**1 クライアントあたり 1 秒に 1 つ** を超えないようにする必要がありますが、別々のクライアントから各ジョブを送信することで、**1 秒に複数のジョブ** を送信できます。各バックアップクライアントには「**1 クライアントあたり 1 秒に 1 つのジョブ**」の制限があるため、複数のクライアントで並列して実行される場合があります。
- CPU やメモリなどのコンピュータリソースは、プライマリサーバーがどこまで拡張できるかに影響します。

メディアサーバーからのメタデータストリームの処理に対応するには、必須の量のシステムリソースがプライマリサーバーに存在する必要があります。メディアサーバーは、バックアップしたファイルに関するメタデータをプライマリサーバーに送信します。このメタデータは定期的にパッチ処理され、送信されます。調整パラメータ `MAX_ENTRIES_PER_ADD` によって決定されるパッチサイズは、プライマリサーバーのパフォーマンス、特に多数の小さいファイルを含むバックアップイメージの場合に大きな影響を与えます。

NetBackup カタログにメタデータを送信するためのバッチサイズについて詳しくは、『NetBackup バックアップ計画とパフォーマンスチューニングガイドガイド』を参照してください。

プライマリサーバーは、これらのメタデータメッセージのペイロードをそれぞれ処理する必要があります。各ペイロードにはオペレーティングシステムプロセスが必要で、それぞれのプロセスがシステムリソースを消費します。消費されるシステムリソースは、ディスク容量、CPU サイクル、メモリ容量、ネットワーク帯域幅、ディスク I/O です。

表 A-9 に、詳細を示します。

表 A-9 サイズの決定に関するガイドライン

プロセッサの数	推奨メモリ要件	プライマリサーバーごとのメディアサーバーの最大数*
8	128 GB	20
16	256 GB	100

*メディアサーバーの数をドメインごとに 50 未満に制限します。

プロセッサとメモリの要件について、追加の推奨事項が利用可能です。

p.197 の「UNIX および Linux の場合のアップグレード要件」を参照してください。

p.200 の「Windows および Windows クラスタのアップグレード要件」を参照してください。